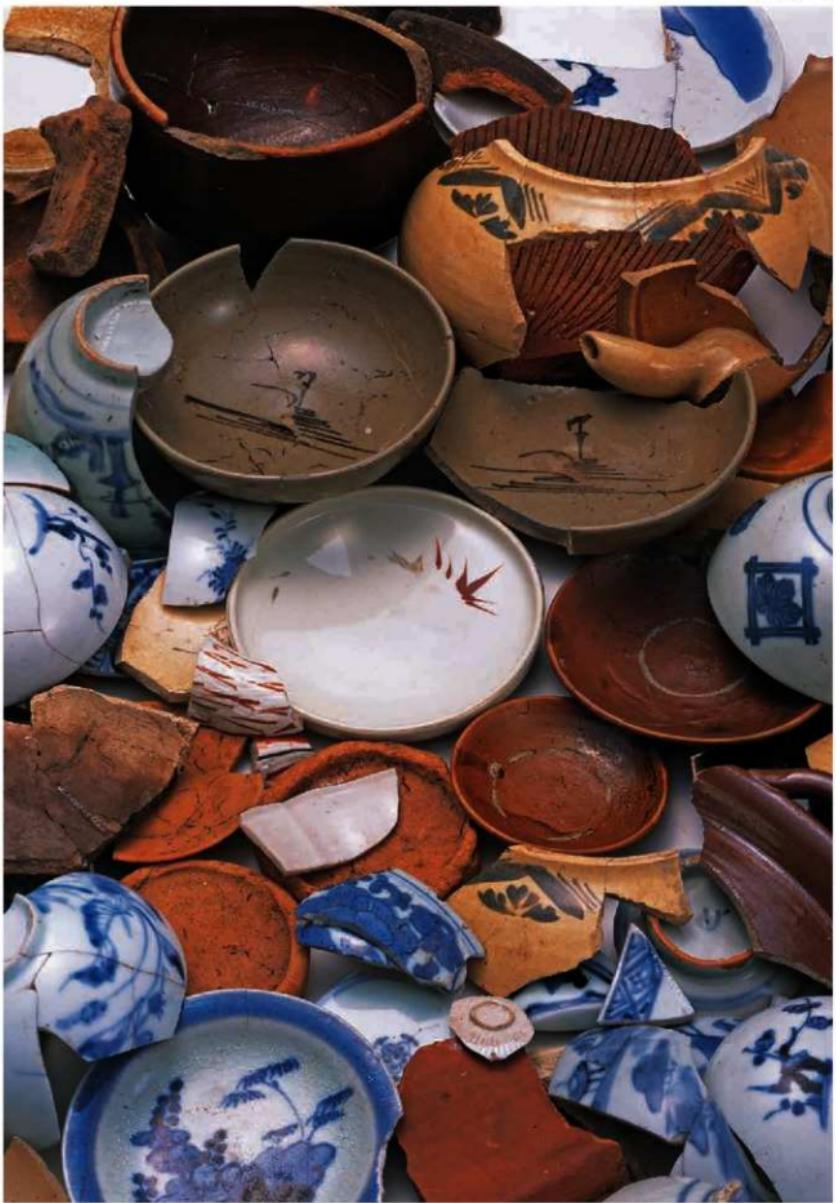


六所家総合調査報告書

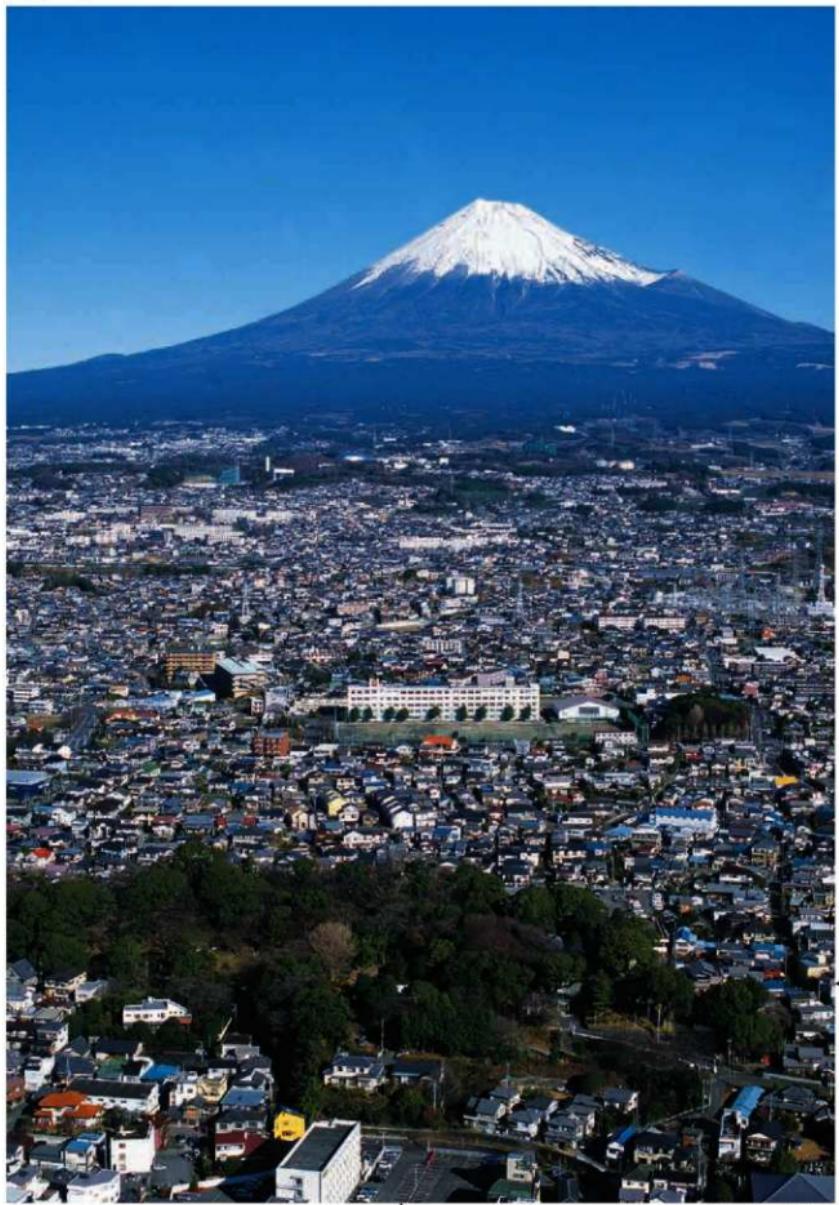
埋蔵文化財

2014年3月

富士市教育委員会



SE 2出土遺物



調査地遠景（南から）



調査地遠景（西から）



日吉浅間神社

口絵 4



東泉院石垣（東から）



六所郡入口外観（南東から）

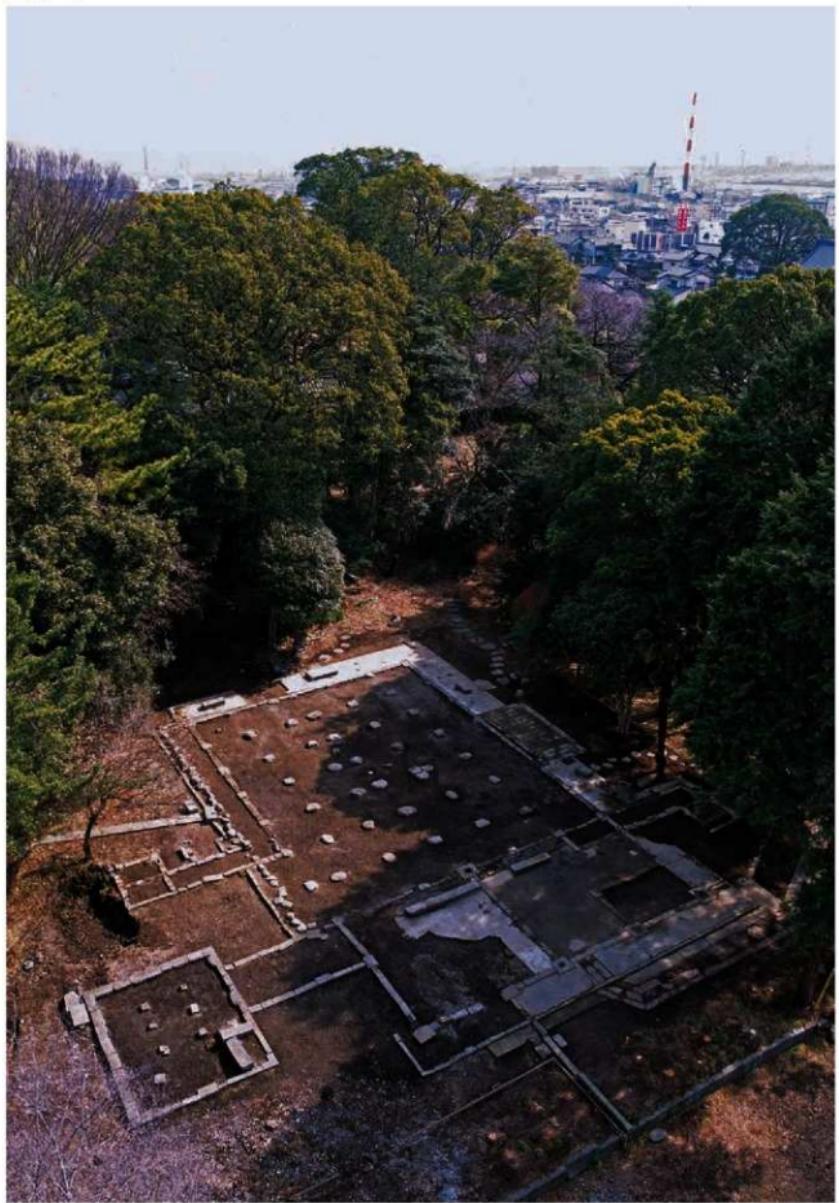


六所御門塀（南から）



六所御門塀・石垣（南西から）

図絵 6



主屋解体後の礎石（西から）



敷地北側において検出された遺構（S E 2ほか）（南から）



出土した貿易陶磁器（景德鎮窯・徳化窯・ヨーロッパ）



出土した肥前磁器の一部

口絵 8



近代の石垣と近世築山（南西から）



近代造成土下で確認された近世遺構



近代造成土から出土した衛生陶器・ガラス

序

富士市教育委員会では、平成17年に故六所五郎氏・利子氏より、市内今泉八丁目に所在する六所邸主屋や宝蔵等の建物および、それら建物に残されていた、古文書・書画・民具等の資料一式の寄贈を受けました。これを受けて、平成18年度に郷土資料（六所家旧蔵）基礎整理委員会、平成19年度からは六所家総合調査委員会を設け、各委員の御指導のもと、資料の整理・調査を行つてまいりました。

六所家は、明治政府による神仏分離政策によって還俗するまでは、富士山東泉院という寺院を営んでいました。また、明治時代以降はこの地域の有力者として活動することとなります。それゆえに、六所家に伝來した資料は、郷土の歴史・文化を解明するため、大変貴重な情報源であるといえます。

このたび、刊行するはこびとなりました埋蔵文化財分野では、平成19年度より継続的な発掘調査を行つてまいりました。発掘調査では、東泉院の建物の一部や近代の富士病院廃院後の土地造成の痕跡など、文書に残された事柄を考古学的手法により裏付けることに加え、記録に残されない人々の活動が明らかになりました。また、出土品の整理作業を通じて、国内でも出土事例の少ない時期の中国景德鎮窯産の碗などの存在も明らかになりました。今後は、これらの調査成果を広く市民の皆様に伝えていくとともに、学術資料として保管・活用してまいりたいと思います。

最後になりましたが、発掘調査に際して多くのご協力をいただきました六所家の御親族や関係者の皆様に深くお礼申し上げるとともに、調査および本書の作成に際して、御多忙の中ご尽力いただきました諸先生ならびに関係された皆様に感謝の意を表する次第です。あわせて、今後もなお一層の御指導、御協力を賜りますようお願い申し上げ、発刊の言葉といたします。

平成26年3月

富士市教育委員会

教育長 山田幸男

例　言

- 1 本書は、富士市教育委員会において、平成 19 年度より実施している六所家総合調査にともなう調査報告書のうち、埋蔵文化財編として平成 26 年 3 月 31 日に刊行されたものである。
- 2 六所家総合調査に至るまでの経緯は次のとおりである。

平成 17 年、六所五郎氏・利子氏より市内今泉八丁目に所在する六所邸主屋や土蔵等の建屋および、それら建屋に残されていた、六所家およびその前身である東泉院という寺院にかかる古文書・書画・民具等の資料一式について寄贈の申し入れがあった。申し入れを受け、富士市教育委員会では、主屋および土蔵から富士市立伝法小学校および富士市立博物館へと資料を移動し、基礎的な資料の分類を実施した。

平成 18 年度には、富士市立博物館において、若林淳之（静岡大学名誉教授）・丸茂謙祥（元立正大学講師）・植松章八（元富士市文化財保護審議会委員）・松田香代子（愛知大学非常勤講師）からなる郷土資料（六所家旧蔵）基礎整理委員会を組織し、委員会の指導のもと、基礎的な整理作業を実施した。それとともに、富士市教育委員会文化振興課では、石川薫一級建築設計事務所に委託を行い、六所邸建屋の現況を把握し、記録保存を図ることを目的とした建物調査を実施した。

これらの事業の成果に基づき、六所家およびその前身である東泉院にかかる古文書・書画・民俗・富士山信仰、埋蔵文化財・建造物・庭園の各分野について総合的に調査する六所家総合調査事業が平成 19 年度に立ち上げられ、この調査事業の主体となる六所家総合調査委員会が組織された。
- 3 六所家総合調査委員会の組織は以下の通りである。

会長	若林淳之（故人）	静岡大学名誉教授	（平成 19 年度～21 年度）
丸茂謙祥	元立正大学講師	（平成 22 年度～現在）	
副会長	丸茂謙祥	元立正大学講師	（平成 19 年度～21 年度）
湯之上隆	静岡大学教授	（平成 22 年度～23 年度）	
植松章八	元富士市文化財保護審議会委員	（平成 24 年度～現在）	
委員	植松章八	元富士市文化財保護審議会委員	（平成 19 年度～平成 23 年度）
建部恭宣	富士市文化財保護審議会委員	（平成 19 年度～現在）	
松田香代子	愛知大学非常勤講師	（平成 19 年度～現在）	
菊池邦彦	東京都立産業技術高等専門学校教授	（平成 22 年度～現在）	
前田利久	清水国際高等学校教諭	（平成 24 年度～現在）	
事務局	富士市教育委員会文化振興課・富士市立博物館		
- 4 埋蔵文化財の調査体制および方法の詳細は本文中に記すが、考古学的側面については植松章八氏（六所家総合調査委員会副会長）、建築学的側面については建部恭宣氏（六所家総合調査委員会委員）より指導を受けた。
- 5 本書の執筆・編集は、小島利史（富士市教育委員会臨時職員）の協力を得て、佐藤祐樹（富士市教育委員会文化振興課上席主事）が行い、第 4 章第 1 節は樋内秀樹氏（東京大学埋蔵文化財調査室准教授）より玉稿を賜った。
- 6 掲載した写真は、現地写真は佐藤、出土遺物は小田貴子（富士市教育委員会臨時職員）が撮影した。ただし、巻頭に掲載した写真のうち S E 2 集合写真は杉本和樹氏による。

- 7 摂載した出土遺物の実測図の絵付け部分の図化は、大成エンジニアリング株式会社に委託した。
- 8 調査において出土した遺物や図面、写真は富士市教育委員会において保管している。
- 9 出土した土器・陶磁器のうち中世は池谷初恵氏に、近世以降については堀内秀樹氏に年代的位置づけを御教示頂いた。
出土した瓦については金子 智氏に御教示いただいた。また、本書作成に際し、主に以下の文献を参考にした。
愛知県 2007『愛知県史』別編（窯業2 中世・近世 濱戸系）
愛知県 2012『愛知県史』別編（窯業3 中世・近世 常滑系）
加藤 覧・金子 智 1990「御殿下記念館地点、山上会館地点検出の瓦について」『東京大学本郷構内の遺跡 山上会館、御殿下記念館地点』第3分冊 考察編 東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書4
金子 智 1993「近世瓦の基本分類」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』別冊第20集 哲学・史学編
大成可乃 2011「東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類（2）—器種（小器種）の出土状況—」『東京大学構内遺跡調査研究年報』7
東京大学埋蔵文化財調査室 1999『東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類』（1）
堀内秀樹 1997「東京大学本郷構内の遺跡における年代的考察」『東京大学構内遺跡調査研究年報』1
- D 球根文化財調査および報告書作成にあたって、次の方々に多大な御協力をいただいた（敬称略）。
池谷初恵 植松章八 加藤理文 金子 智 堀内秀樹 六所芳和 渡井英智

目 次

口 紋

序

例 言

目 次

第1章 調査の経過

第1節 発掘調査の経過	1
第2節 整理作業	2

第2章 遺跡の概要

第1節 地理的環境	3
第2節 吉原宿の変遷と東泉院	5

第3章 調査成果

第1節 絵図と現況図の合成	11
第2節 北東ブロック	13
第3節 東ブロック	21
第4節 西ブロック	29
第5節 北ブロック	34
第6節 主屋ブロック	45

第4章 総括

第1節 六所家敷地内 S E 2 出土陶磁器の様相	61
第2節 埋蔵文化財からみた空間構成と調査成果の統合化	67

遺物観察表

写真図版

挿図目次

第2章 道路の概要	
第1節 地理的環境	
第1図 下方五社と東泉院の位置	3
第2図 富士山西道の浅間神社と登山道	4
第2節 吉原宿の変遷と東泉院	
第3図 吉原宿の変遷と東泉院	5
第4図 調査地区分図	6
第5図 中吉原宿跡出土遺物	6
第6図 調査地と周辺の道路	7
第7図 調査地概況図	8
第8図 調査全体図	9
第9図 基本土層堆積図	10
第3章 調査成果	
第1節 紹介と現況調査の合成	
第10図 国化した文久二年範囲	11
第11図 文久二年範囲と現況の合成	12
第2節 北東ブロック	
第12図 北東ブロック トレーナ配置図	13
第13図 IG4北側	14
第14図 北東ブロック トレーナセクション図	14
第15図 IG4北側	15
第16図 IG4南側 概観	16
第17図 IG4南側	16
第18図 北東ブロック 全体図	17
第19図 SD1・SD2・SK1・P1+1	18
第20図 SX3	19
第21図 SX3 南西から	19
第22図 SX3 北から	19
第23図 北東ブロック 出土遺物	20
第3節 東ブロック	
第24図 東ブロック トレーナ配置図	21
第25図 東ブロック トレーナセクション図	22
第26図 IC5	23
第27図 D5調査区 SX5	24
第28図 SX5石	25
第29図 SX1	26
第30図 東ブロック 出土遺物(1)	27
第31図 東ブロック 出土遺物(2)	28
第4節 西ブロック	
第32図 西ブロック トレーナ配置図	29
第33図 西ブロック トレーナセクション図	30
第34図 西ブロック 出土遺物(1)	31
第35図 西ブロック 出土遺物(2)	32
第36図 西ブロック 出土遺物(3)	33
第5節 北ブロック	
第37図 北ブロック トレーナ配置図	34
第38図 北ブロック トレーナセクション図	35
第39図 北ブロック 全体図	36
第40図 北ブロック 調査区トレーナセクション図	36
第41図 SE2検出 南東から	37
第42図 SE2	37
第43図 SD3・SK3・P1+2・SX2・SX4	38
第44図 SX6	39
第45図 北ブロック出土遺物(1)	40
第46図 北ブロック出土遺物(2)	41
第47図 北ブロック出土遺物(3)	42
第48図 北ブロック出土遺物(4)	43
第49図 北ブロック出土遺物(5)	44
第6節 主屋ブロック	
第50図 主屋ブロック トレーナ配置図	45
第51図 主屋ブロック トレーナセクション図	46
第52図 主屋基礎	47
第53図 主屋板塀	48
第54図 主屋西側通路	49
第55図 主屋 壁石エレベーション(1)	50
第56図 主屋 壁石エレベーション(2)	51
第57図 主屋 トレーナ配置図	52
第58図 主屋 トレーナセクション図	53
第59図 SX7(1)	54
第60図 SX7(2)	54
第61図 主屋トレーナ壁材検出	55
第62図 主屋トレーナ壁材断面	55
第63図 SX7上層磚	55
第64図 SX7	55
第65図 SX7(244・245出土状況)	55
第66図 25Tr(258出土状況)	55
第67図 宝鏡	56
第68図 宝鏡 南東から	56
第69図 宝鏡基礎	56
第70図 主屋ブロック 出土遺物(1)	58
第71図 主屋ブロック 出土遺物(2)	59
第72図 SE1	59
第73図 SE1 南から	59
第74図 切り石積みが確認されるSE1	59
第75図 年代判断のメルクマールになる小器種	62
第76図 ブンタオ・カゴ模範品	64
第77図 忠永6年の共箱に入ったヨーロッパプリントウエア皿	65
第78図 隣接地で見つかった古代建物跡	67
第79図 出土した中世の遺物	68
第80図 中世遺物の出土範囲	69
第81図 江戸時代後期(文久2年頃)の東泉院	69
第82図 近代における土地利用の変化	70

挿表目次

第1章 調査の経過	
第2節 整理作業	
第1表 調査体制一覧	2
第4章 総括	
第1節 六所家敷内SE2出土陶磁器の様相	
第2表 各段階におけるメルクマールとなる器種・技法とその推定年代	63
第3表 SE2出土陶磁器組成	63
第2節 理蔵文化財からみた空間構成と調査成果の統合化	
第4表 東泉院の歴史と埋蔵文化財調査成果	68
附 表	
第5表 出土遺物観察表(1)	72
第6表 出土遺物観察表(2)	73
第7表 出土遺物観察表(3)	74
第8表 出土遺物観察表(4)	75
第9表 出土遺物観察表(5)	76

写真図版目次

口縫 1

S E 2出土遺物

口縫 2

調査地遺景（南から）

口縫 3

調査地遺景（西から）

日吉瀬間神社

口縫 4

東泉院石垣（東から）

六所部人口外觀（南東から）

口縫 5

六所部門門扉（南から）

六所部門門扉・石垣（南西から）

口縫 6

主屋解体後の礎石（西から）

口縫 7

敷地北側において発された遺構（S E 2ほか）（南から）

出土した質易陶器群（質易鏡面・化粧土・ヨーロッパ）

出土した肥前磁器の一部

口縫 8

近代の石垣と近世築山（南西から）

近代造成土下で確認された近世遺構

近代造成土から出土した衛生陶器・ガラス

PL.1 調査地遺景

1. 調査地遺景（南から）

2. 調査地（西から）

PL.2 主屋ブロック

1. 現存する六所家門扉（南から）

2. 解体撤去前の土屋（南西から）

PL.3 主屋ブロック

1. 現主屋解体後の礎石（北西から）

PL.4 主屋ブロック

1. 現主屋礎石（北西から）

2. 現主屋礎石（南東から）

3. 主庭飛石（西から）

4. 敷石通路（南西から）

PL.5 主屋ブロック

1. 25Tr 磨削検出状況（西から）

2. 29Tr 磨削検出状況（南東から）

3. SX7 上部の磨削（西から）

4. SX7 遺物出土状況（西から）

PL.6 東ブロック

1. D5 調査区調査前（南から）

2. D5 調査区調査後（北西から）

3. SX3（築山）（南西から）

4. IG5（西から）

5. 3Tr 板石検出及び土層堆積（南東から）

6. 3Tr 板石検出状況（南東から）

7. SX5 板石北側断ち割り（東から）

PL.7 東ブロック

1. D5 調査区 SX5（西から）

2. D5 調査区 SX5（南から）

3. SX5 検出（南から）

4. SX5 検出（南西から）

PL.8 東ブロック

1. SX1（南東から）

2. SX1 18Tr（西から）

3. SX1 19Tr（南から）

4. SX1 20Tr（西から）

5. 宝藏北壁 14Tr（北東から）

PL.9 北ブロック

1. 北ブロック調査前（東から）

2. 4Tr（北西から）

3. SX6 石槽み（北西から）

4. SX6（南東から）

PL.10 北ブロック

1. SX6（北から）

2. SX6 14Tr 南北セクション（西から）

3. SD3・SE2・SX2（南東から）

4. 北ブロック調査区南側點土柱出現況（北から）

5. 北ブロック調査区全景（南東から）

PL.11 西ブロック

1. 22Tr 調査前（北西から）

2. 22Tr（南西から）

3. 23Tr（北西から）

4. IG6（奥）・IG7（前）（西から）

PL.12 北東ブロック

1. 北東ブロック調査前（北西から）

2. IG3（北西から）

3. SX3（北から）

4. IG4 南側石段（北西から）

5. SD1（東から）

6. 北東ブロック調査区西壁セクション（東から）

7. SD2（南から）

PL.13～PL.24

出土遺物

第1章 調査の経過

第1節 発掘調査の経過

【1次調査】

平成20年度 敷地全体を対象に試掘調査 敷地内は周知の埋蔵文化財包蔵地「善得寺城跡」として登録してあった（現在は「善得寺城跡・東泉院跡」）。しかし、7000m²近い土地に城跡を含めてどのような遺構が存在するのか、まったく分からぬ状況であった。そのため、敷地内に5本のトレンチを設定し、遺構・遺物の検出を目指した。その結果、15世紀前半の遺物や近世の建物の一部（3Tr）と考えられる遺構を検出した。城跡の痕跡については、その存在を含めて明らかとならなかった。

【2次調査】

平成20年度 敷地内北東・北側を調査 古原公園再整備に伴い、遺構の保護が困難と考えられる箇所について、遺構検出を行い、地下の状況を平面的に把握することとなった。そのため、敷地北東ブロック・北ブロックについて、トレンチ調査を行った後、その所見をもとに平面的調査を行った。

その結果、宝蔵の北側において、石組みを伴い平坦面を人為的に造り出したと考えられる箇所（SX6）があり、周辺から15世紀前半の遺物が数点出土した。加えて、北ブロックにおいて井戸跡（SE2）を検出し、一部掘削調査を行った。その結果、17世紀後半の中国景徳鎮窯産と考えられる碗や焼塩壺の蓋などが出土した。

平成20年度に3Trにおいて、一部検出された建物跡は、絵図との合成から江戸時代後期（文久年間）の建物の一部（湯殿跡）と推定された。井戸跡（SE1）も確定された。

【3次調査】

平成21年度 湯殿跡と推定されていた地点の調査 絵図との合成から、文久年間に存在したと考えられる建物の一部、湯殿部分を考古学的に把握するため、平面的に遺構検出を行った（D5調査区）。平成21年度3Trにおいて建物の一部と考えられる石が検出されていたが、平面的調査の結果、粘土の広がりも確認された。一部、断ち割りを行った結果、粘土には瓦片が混入しており、

その人為的な造作から建物の基礎工事の痕跡と推定された。出土した瓦には19世紀中葉以降に生産されたと考えられるものが含まれることから、その造作時期は、明治期前後と推定された。

井戸跡（SE2）の調査 2次調査において、一部掘削調査を行った井戸跡（SE2）の掘削を継続して行った。その結果、さらに焼塩壺の蓋2点、身1点を含む多くの遺物が出土した。出土した陶器は18世紀後半の良好な一括遺物と考えられ、1780年代前後に井戸が埋められたものと推測された。また、出土した瓦の分析から、複数の建物の瓦が混在していることが明らかとなった。陶器同様、18世紀後半の瓦が多く、土蔵の存在を推定させる海鼠瓦や切妻造りの建物に伴う袖平瓦が出土。被熱した瓦が半数以上認められることから、火災の存在を窺わせた。

【4次調査】

平成24年度 斜面部の調査 11月から12月にかけて主屋西側および北側の斜面部にはトレンチ3箇所（22～24Tr）を設定し、近世の遺物の検出を目的に確認調査を行った。その結果、西側斜面から出土した遺物の大半は近・現代のものであったが、北側の23・24Trからは近・現代の遺物に混ざって近世の遺物を一定量確認することが出来た。の中には、二次的な被熱が認められる破片もあることから東泉院における火災の存在をうかがうことが出来る。

【5次調査】

平成24年度 主屋下部の調査 明治10年頃に建てられた主屋解体後の2月から、主屋部分に十字のトレンチを設定し、近世の遺構検出に努めた。その結果、直徑20～30cm程度の溶岩礫を人為的に造成の部材として使用している痕跡が認められた。礫層（通称、「大礫層」）の下部には、薄く黒色造成土が存在し、上面から遺物がまとまって出土し（SX7）、明らかな明治時代の遺物がないことから、造成は絵図に描かれた文久年間前後と考えられた。

第2節 整理作業

発掘調査報告書（本書）刊行のための整理作業は、平成25年4月から開始した。出土遺物の接合・復元・図化・写真撮影、発掘記録図面類・観察表等の整理、遺構図・遺物図のトレース作業、報告の執筆などを行ない、これらを編集して報告書を作成した。

平成26年3月31日、埋蔵文化財発掘調査に関わる一連の作業は、本書の刊行をもって終了した。

本書にて報告する図面・発掘記録・出土遺物等の資料は、すべて富士市教育委員会にて保管している。

調査指導

平成19年7月27日 植松章八（六所家総合調査委員）渡井英智（富士宮市教育委員会）・池谷初恵（伊豆の国市・加藤理文（織豊期城郭研究会）調査指導
平成20年8月28日 植松章八・渡井英智・加藤理文調査指導
平成20年11月21日 植松章八 調査指導

平成20年12月19日 植松章八・渡井英智・池谷初恵 調査指導
平成21年2月16日 堀内秀樹（東京大学大学院人文社会系研究科）出土遺物指導
平成21年2月19日 植松章八 調査指導
平成21年3月3日 植松章八・渡井英智・池谷初恵・加藤理文 調査指導
平成22年1月20日 堀内秀樹 出土遺物指導
平成22年2月18日 建部恭宣（六所家総合調査委員）宝蔵の基礎構造等調査指導
平成22年2月2日 金子 智（高浜市やきもの里かわら美術館）出土瓦調査指導
平成22年3月9日 植松章八 遺構・出土遺物指導
平成25年2月28日 建部恭宣 主屋地下構造の指導
平成25年3月14日 植松章八 主屋地下構造の指導
平成25年4月16日 堀内秀樹 出土遺物指導
平成25年6月27日 堀内秀樹 出土遺物指導
平成26年2月28日 堀内秀樹 出土遺物指導

第1表 調査体制一覧

年 度	平成19年度	平成20年度	平成21年度	平成24年度	平成24年度	平成25年
作業区分	試掘・確認	試掘・確認	試掘・確認	試掘・確認	試掘・確認	整理作業
調査	第1次	第2次	第3次	第4次	第5次	
調査主体	教育長 平岡彥三	平岡彥三	平岡彥三	山田幸男	山田幸男	山田幸男
事務局	教育次長 石井邦敏	石井邦敏	堀内哲雄	鈴木清二	鈴木清二	鈴木清二
課長	村田猛	友野貴正	友野貴正	渡井義彦	渡井義彦	渡井義彦
参考事務	若月正巳	若月正巳				
参考事務補	木ノ内義昭	木ノ内義昭	木ノ内義昭			
主任幹事	前田勝己			前田勝己	前田勝己	前田勝己
主査	前田勝己			佐藤祐樹	佐藤祐樹	石川武男
上席主査						佐藤祐樹
主事	佐藤祐樹	佐藤祐樹				
主事補	佐藤政次	佐野五十三	佐野五十三	小島利史	小島利史	小島利史
臨時職員	若林美希			服部孝信	服部孝信	若林美希
調査補助	宇佐美和代 熊井則明 牧野かおり	小島利史 石川都久子 藤沢悦子 齊藤妙子 西田真由子 内藤妙子 小川博子	熊井則明 牧野かおり 小島利史 石川都久子 藤沢悦子 齊藤妙子 西田真由子	石川都久子 渡辺美規子 望月真弓	石川都久子 渡辺美規子 望月真弓	福澤万智子 井上尚子 小田貴子 三輪真佐子 金田純子 石川都久子 渡辺美規子 望月真弓
開始	5月29日	9月11日	10月14日	10月30日	2月7日	4月1日
終了	8月1日	3月10日	3月26日	11月29日	3月29日	3月31日
発掘面積	173.8m ²	1884.569m ²	201.887m ²	12.718m ²	77.168m ²	

第2章 遺跡の概要

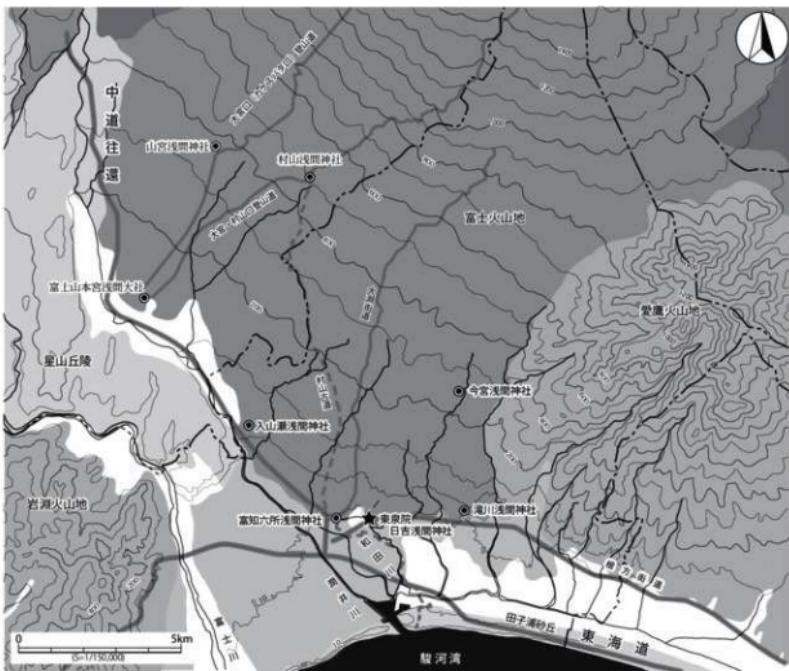
第1節 地理的環境

富士市は静岡県の東部に位置し、駿河湾を南に臨み、北には富士山がそびえ、山裾を南西に広げている。西には岩本山を有する星山丘陵が、東には死火山である愛鷹山が存在する。西方には北から流下した富士川が駿河湾に注ぎ、富士山西麓から流れる潤井川、愛鷹山に源流をもつ須津川や赤渊川など、多数の河川が流れる。

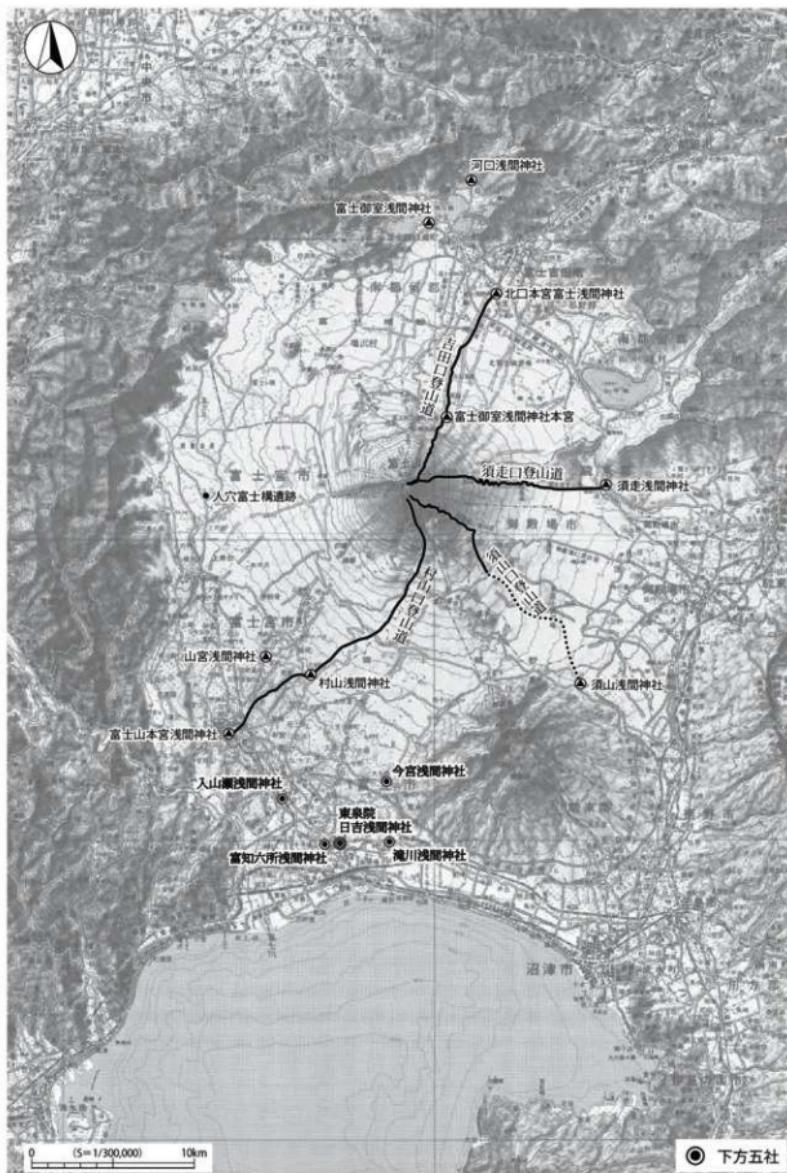
こうした環境にある富士市域の地形は、富士山や愛鷹山の新旧火山活動により形成された丘陵地、富士川や潤井川が運搬した土砂の堆積により形成された沖積平野、河川の放出砂礫が駿河湾の沿岸流や波浪によって運搬さ

れ形成された田子浦砂丘、砂丘の内側につくられた湖沼に冲積層が堆積して発達した浮島ヶ原低湿地など、変化に富んだ様相をみせている。

地形の基盤のひとつである富士山の噴火活動は、小御岳火山の噴火（数十万年前）に始まり、古富士火山（8万年～1万6千年前）、新富士火山（1万4千年前～現在）と大きく3期に分けられる。不透水性の古富士泥流の上に、透水性の新富士火山溶岩流が広がるため、新富士火山溶岩流の末端には数多くの湧水地が存在し、近世以降、製紙業を中心として発展してきた。



第1図 下方五社と東泉院の位置



第2図 富士山周辺の浅間神社と登山道

第2節 吉原宿の変遷と東泉院

近世・近代における都市の発展は災害との戦い、そして対応の歴史でもあった。富士市においては、地震・津波、水害、台風・高潮、富士山の噴火、火災などとともに都市が発展してきた。

現在、富士市の中心市街地の一つである吉原は、東海道の元宿と蒲原宿の間に位置し、東海道14番目の宿場として栄えた。しかし、その場所は、台風と高潮による被害を絶えず受け、元吉原宿、中吉原宿、新吉原宿と、およそ40年ごとに移転してきた。

元吉原宿自体も、田子の浦港東側の「阿字神社」北側にあった「見附」の宿が、風波の被害を受けて今井と呼ばれる場所に作られ、慶長6年(1601)に徳川幕府から東海道の宿場に指定された場所である。しかし、砂丘上に立地するため、砂山が駅舎を埋めてしまい、寛永16~17年(1639~1640)にかけて中吉原宿に所替をした。中吉原宿は元吉原宿から依田原村、左富士をすぎた場所に当たる。しかし、これまでよりも内陸に移動

したもののが安定した宿場経営をすることが出来ず、延宝8年(1680)閏8月6日に襲来した江戸時代最大級の台風による高潮の被害を受け壊滅した。

平成11年の中吉原宿遺跡における発掘調査では、延宝8年に近い年代を示す遺物は見られなかったものの、17世紀中葉における良好な廃棄資料を得ることができ、土層検討からも高潮の存在を考古学的に証明する事が出来た(富士市教委2002)。

天和元年(1681)、吉原宿は現在の場所(新吉原宿遺跡)に所替され、今まで続いている。しかし、その後、高潮などの被害に全くあわなかつたわけではなく、元禄12年(1699)にも町の一部が浸水被害を受けている。

東泉院(六所家)は、吉原宿(新吉原宿遺跡)から北側350mの高台に位置する。東泉院は創建時期がはっきりしないものの、江戸時代を通じて、富士市今泉八丁目付近に存在したと考えられる密教寺院である。富士山南麓地域に所在する三日市場の富知六所浅間神社、原田



第3図 吉原宿の変遷と東泉院

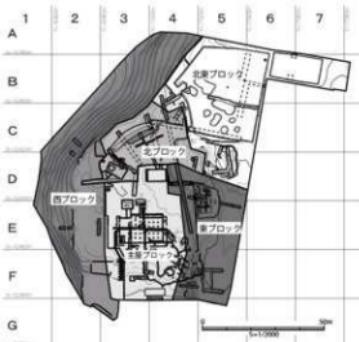
の滝川神社、今宮の浅間神社、入山瀬の浅間神社、そして今泉の日吉浅間神社の神社を管轄する権限を持っていた「五社別当」として位置づけられていた。また、東泉院は寺院でありながら御朱印寺であったことから、この地域を支配していた領主としての側面も持ち合わせていたと言える。

なお、現在、東泉院は「善得寺城跡・東泉院跡」として埋蔵文化財保有地登録されている。

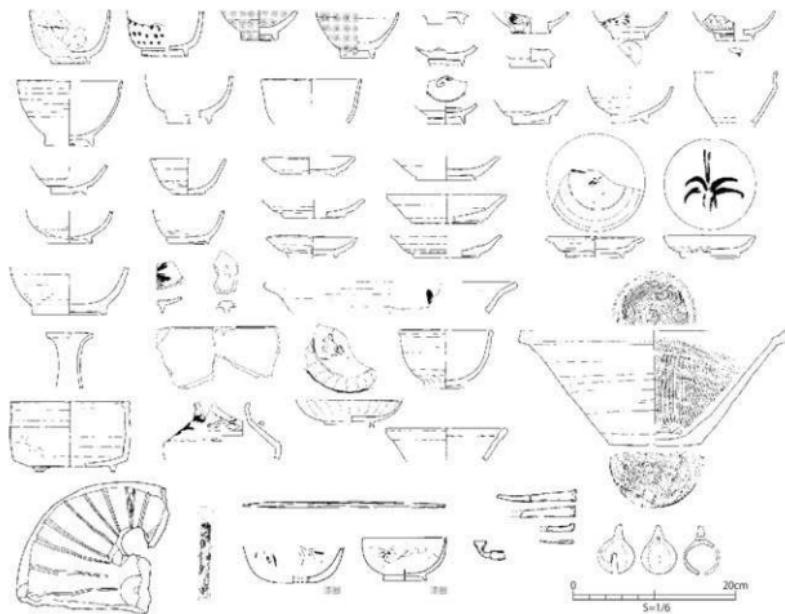
参考文献

富士市教育委員会 2002『中吉原宿遺跡』

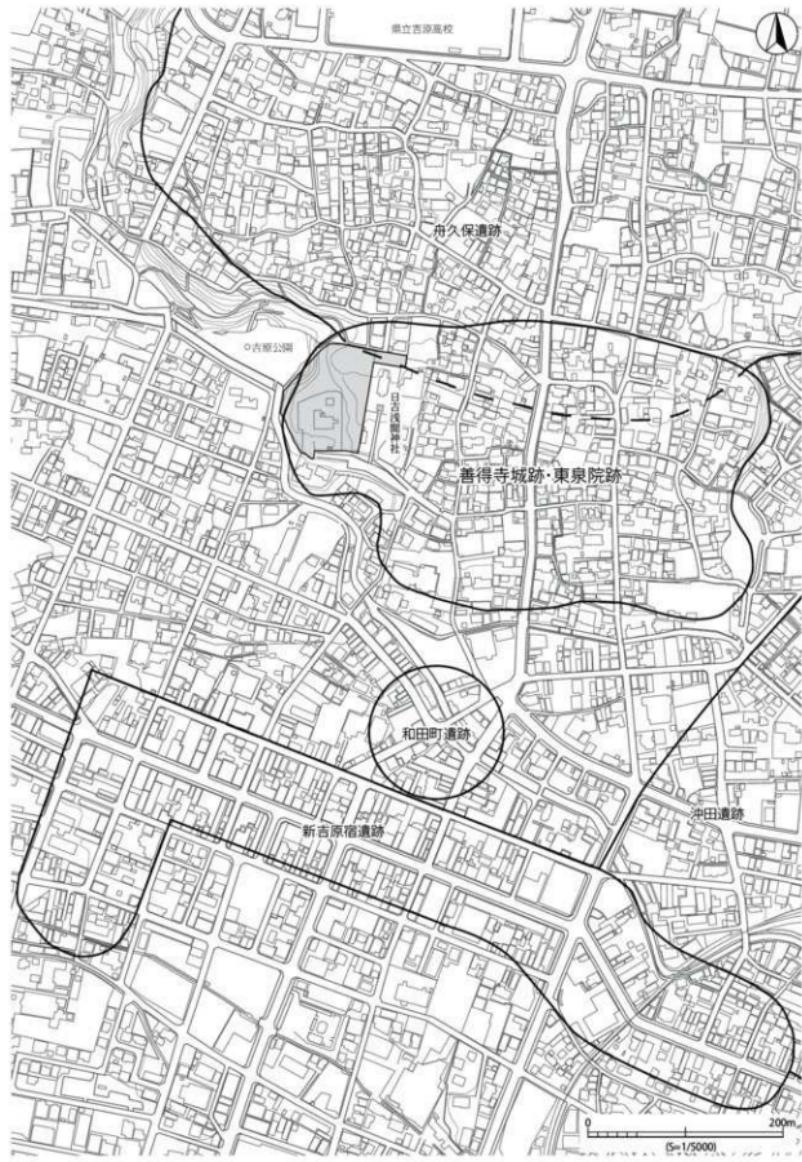
富士市教育委員会 2013『過去に学ぶ 富士の災害史』



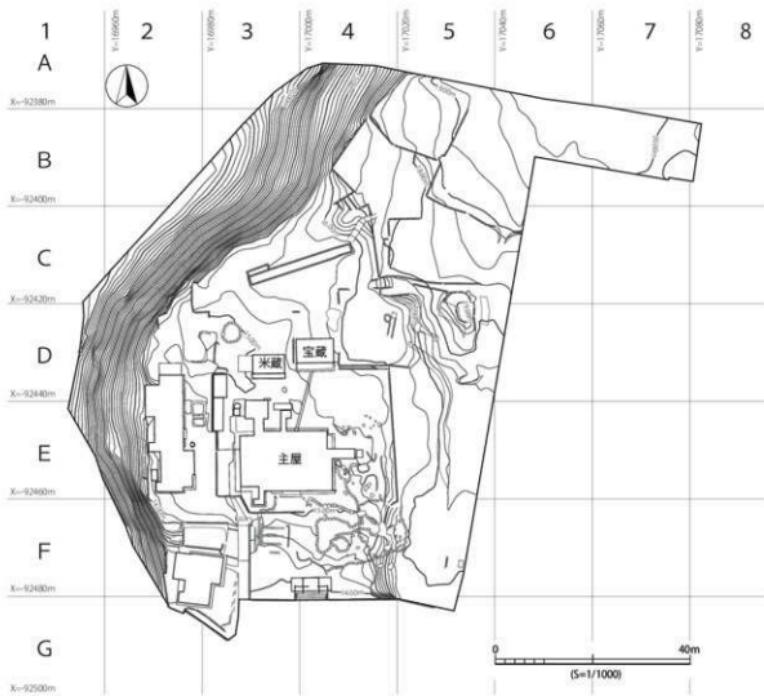
第4図 調査地区分図



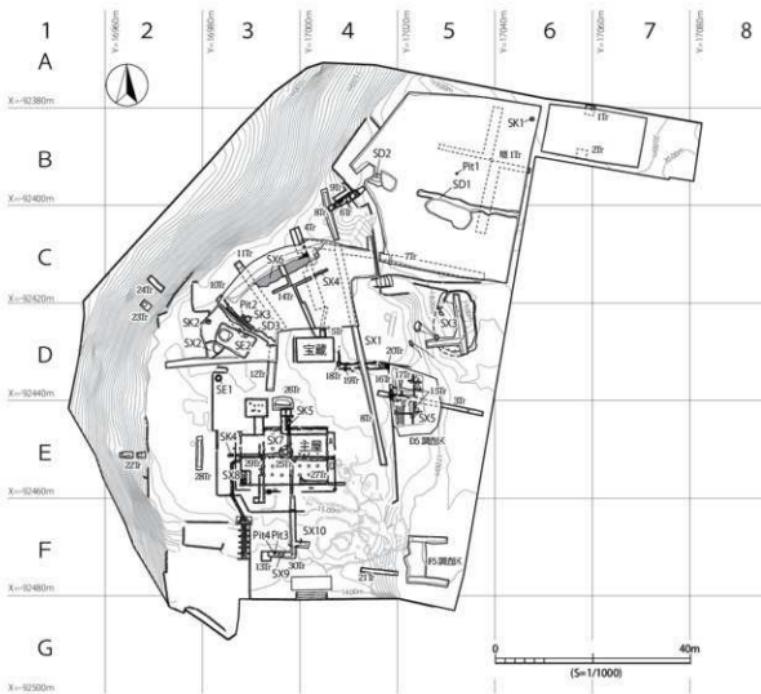
第5図 中吉原宿遺跡出土遺物



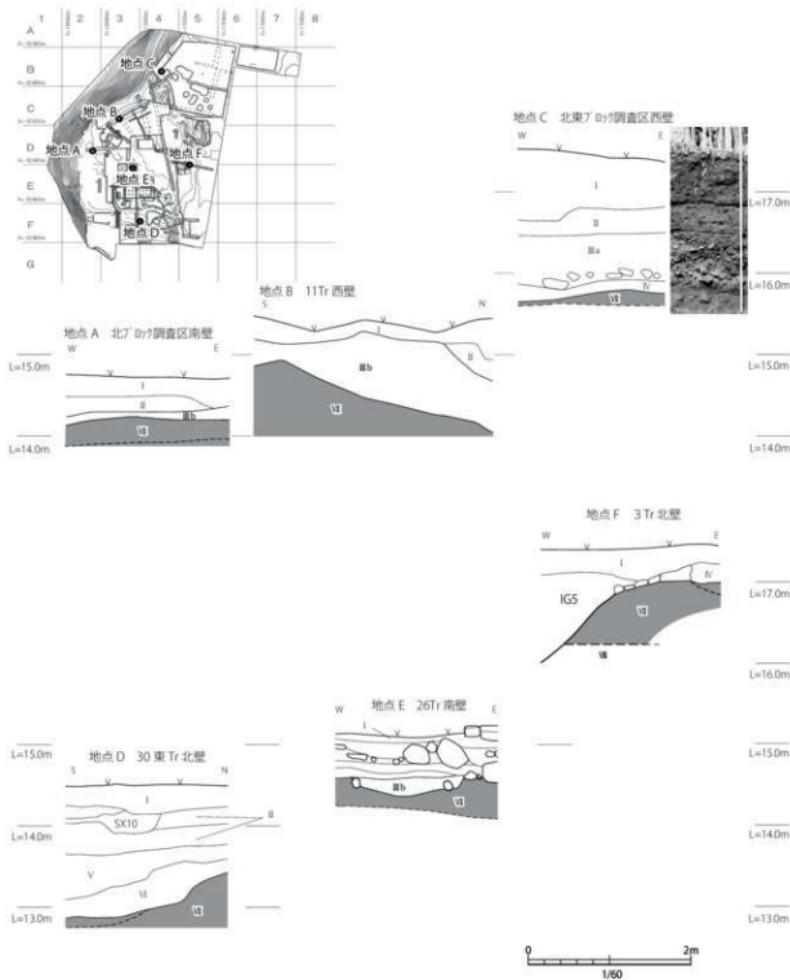
第6図 調査地と周辺の遺跡



第7図 調査地現況図



第8図 調査全体図



- | | |
|-------|---|
| I層 | 表土 |
| II層 | 近代以前の造成土 |
| III層 | 近世以前の堆積層
上面が削平されていなければ近世において地表面になっていたと考えられる土層。北東ブロックではにぶい黄褐色土(IIIa層)が堆積し、北ブロック及び主屋周辺では黒色土(IIIb層)が堆積している。 |
| IV層 | 暗褐色土層(7SYR3/3)
しまりややあり。粘性なし。豆腐と蛭巣の間の層。厚さは、薄い。内容物は認められない。地山につながる漸移層。 |
| V層 | 黒色土層(2SYR2/2)
しまりやや強。粘性なし。3cm未満の礫が少量入る。30西Trでは下層から土師器片が出土している。 |
| VI層 | 黑色土層(10YR1.7/1)
しまりやや強。3~6cmの礫が少量入る。 |
| VII層 | 黄褐色土層(10YR5/6)
しまりややあり。粘性なし。1cm程度の小石や人頭大の石が入る。場所によりさらに硬い(褐色10YR4/1)地山もある。 |
| VIII層 | 赤褐色砂礫層(2SYR4/6)
しまり強。粘性なし。密なる砂砾により構成される地山層(ザルボウ)。北東ブロックから主屋にかけて部分的に、確認される。 |

第9図 基本土層堆積図

第3章 調査成果

第1節 絵図と現況図の合成

これまでに、東泉院及び関連建物の配置について描かれている絵図は3種見つかっている。安永7年(1778)、寛政2年(1790)、文久2年(1862)に製作されたもので、そのうち、安永7年のものは、元文5年(1740)の写しと考えられている(建部2009)。また、明治4年(1871)の境内を描いた絵図も存在するが(杉山2008)、文久2年に描かれたものと建物配置に大きな差はない。

そのほかにも棟札やその写し(下書き含む)も相当数あることから、それらの分析により東泉院の建築生産活動に迫ることが出来ている。言うまでもなく、考古学的調査においては、建物の痕跡を明らかにすることが出来たとしても、その建物の詳細な建築年代、用途について明らかにすることには限界がある。そのため、発掘調

査において検出された遺構と絵図との合成は、研究上重要な位置をしめる。

3種の絵図のうち、建物の大きさや塀の長さなどが記載された絵図として文久2年のものが注目される(以下、「文久絵図」と称する)。この文久絵図の入っていた袋には、文久2年8月に「御普請役元メ米倉幸内殿・増田多録郎殿」による内見分の際に、両人からの依頼により提出したものの控えと書かれていることから、徳川第14代將軍家茂が東泉院に宿泊するにあたり、事前警備などの目的から作成したものと考えられている(大高2012)。文久絵図にはさらに数種の控えが存在するが、その一つには、現在の主屋の場所に描かれている客殿とその内部の大きさ、さらに周囲の門や庭などが記載され



第10図 図化した文久2年絵図

ている。そのため、文久図面と考古学的調査との合成を図ることが可能である。ただし、発掘調査の結果、文久2年頃には、主屋周囲の地面は敷地東側の石垣部分を除いて、現在の高さに整地されているものと考えられることから、現状の測量図と合成し、文久絵図に描かれた建物の痕跡を探すこととした（佐藤 2009）。

文久絵図では、建物内の各部屋の間取りが詳細に記録されている。また、見る限り、文久建物のみを詳細に記録する目的があったようで、現存する「宝蔵」（土蔵）に大きさなどの記述ではなく、また実際よりも小さく描かれている。建物の北西には「井」（と）と書かれた地点があり、その地点が後述する井戸（SE 1）と考えられたため、文久絵図と測量図との合成基準とした。また、文久建物

の軒が東西軸に平行するという前提で現況図と合成了した。

合成の結果、文久絵図に描かれた建物（約 274 坪）は、現主屋と比べると約 2 倍の床面積を有することや宝蔵の東側 SX 1 とした箇所にはかつて「庫裏」が存在したこと、SX 7 とした東側の高まりは「庭」とされ、それを取り囲むように板塀が存在したこと、建物の玄関は現存する門の一直線上に存在することなど多くのことが明らかとなつた。

また、松田氏は、合成結果から文久絵図に描かれた建物の西側部分と現在の主屋の間取りが一致する点に注目し、改築を含め、江戸時代から引き継がれていることを想定した（松田 2010）。



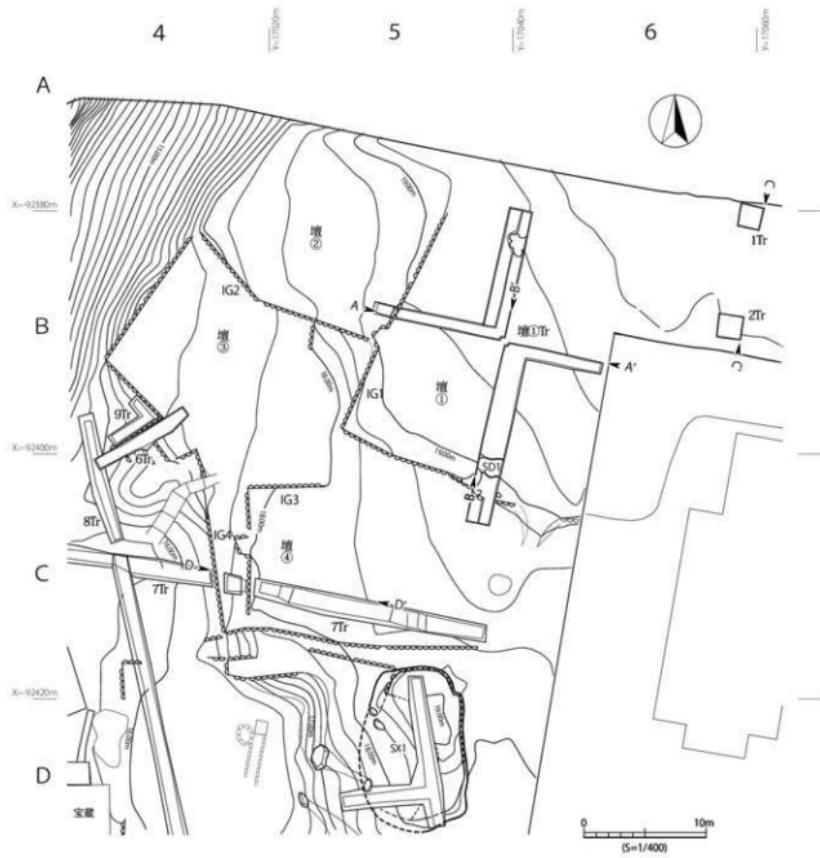
第 11 図 文久二年絵図と現況図の合成

第2節 北東ブロック

トレンチ調査

敷地の北東部分に位置し、東側には日吉浅間神社とを画する堀が南北に伸びている。調査開始前は、乱雑な石積みによって、雑壇のように区画されていた。それらの石積みをIG1～IG4と呼び、各区画を壇①～壇④と呼称した。

平成19年度は、前述の石積み(IG1)の性格を知ることを目的に壇①に十字のトレンチを設定し、人力による掘削を行った。その結果、表土直下に南西に緩やかに傾斜する基盤層(VII層)が検出された。人工的な掘削の痕跡はほとんど見つけられずトレンチ南側において、溝



第12図 北東ブロック トレンチ配置図

状の落ち込みが唯一、確認された。

石積みは極めて乱雑で、不均等な溶岩礫を5段前後積み上げているものの耕作土の土留めとしての機能しか有さず、近代以降の所産であると考えられた（IG1・2）。

敷地北側ブロックと北東ブロックには、比高差1.3mが存在する。これは、IG4とした石積みが南北方向に存在することに起因する。IG4には、北側と、南側の二箇所に階段状の石積みが取り付いており、北側ブロックから北東ブロックへの進入を可能としている。北側の階段付近に6Tr、9Trを設定し、平面図などの記録作成後、掘削もあわせて行った。

IG4は基底石にやや大きめな60cm程度の溶岩を使用し、2段目からは20cm程度の溶岩を積み上げている。

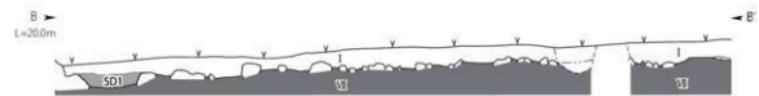


第13図 IG4 北側

壇①東西Trセクション



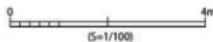
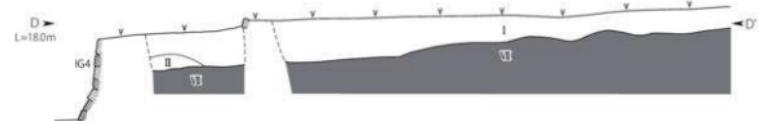
壇②南北Trセクション



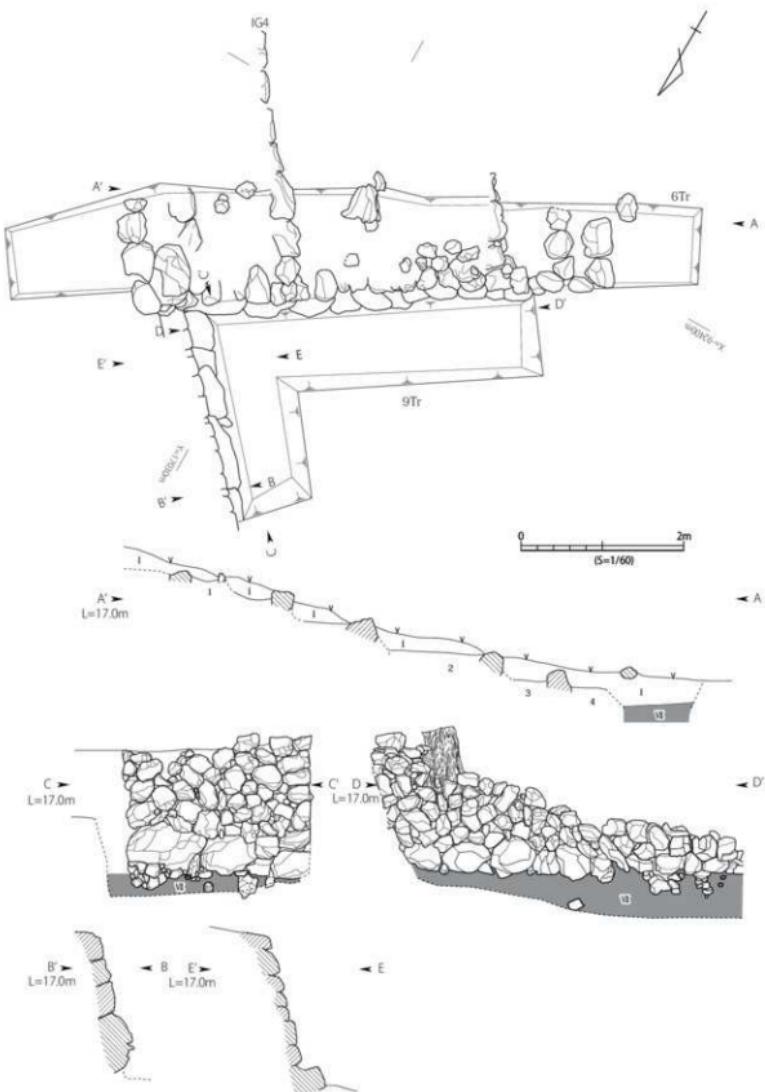
1・2Tr南北セクション



7Tr東西セクション



第14図 北東ブロック トレンチセクション図



- 1 黒褐色土層(10YR2/3) しまり弱、粘性弱、赤色粒子中量。
- 2 黄褐色土層(10YR3/3) しまりやや弱、粘性強、礫(2~4cm)多層、黄褐色カクを含む。
- 3 黄褐色土層(10YR3/3) しまりやや弱、粘性強、礫(2~4cm)多層、上面に厚さ1cmの黄褐色土の薄層がなされる。
- 4 黒褐色土層(10YR2/3) しまりやや弱、粘性強、礫(2~4cm)中量。

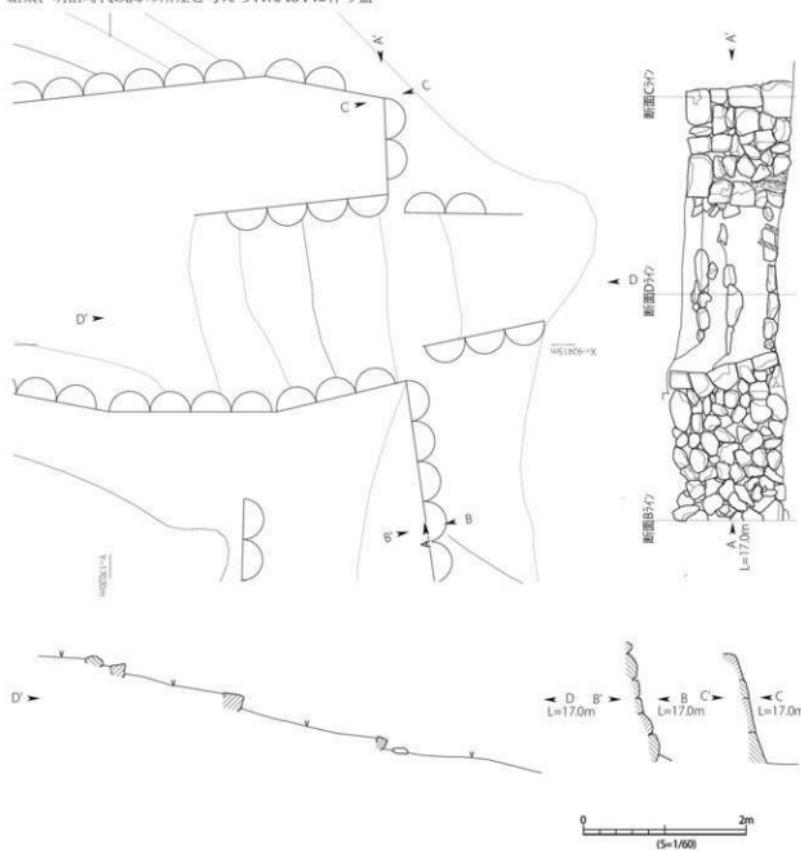
第15図 IG4北側

石の積み上げ方に規則性は認めがたく、石材を斜めに落とすように積み（谷積み）上げている。石積みの内側に存在する盛土中より出土した遺物から、IG4 及び延長線上に存在する IG5 は、明治時代以降に行われた土地改変に伴うものと結論付けられた。

壇④とした箇所には、他とは異なり明らかに方形を意識した石積みを認識することができた。護摩堂や歡喜堂など、絵図に描かれた建物痕跡の可能性が考えられたため、敷地北側ブロックから東西方向に 39m におよぶ Tr を設定し、詳細な土層観察を行うこととした。その結果、明治時代以降の所産と考えられた IG4 に伴う盛



第16図 IG4南側 現状



第17図 IG4南側

土(Ⅱ層)を切る形で壙④の基盤の耕作土(Ⅰ層)が存在することから、これらの方形の石積みも明治時代以降の造作と考えられた。

また、敷地北東隅において、1Tr・2Trを設定した。これは、敷地内が善得寺城として機能していた場合に山側に自然傾斜との分断を図るような掘り込みが存在するはずであると考えたためである。しかし、掘削の結果、そのような掘り込みは認めがたく、ほぼ地山が水平に検出された。結局、平成24年度までの調査では、城の痕跡を示す遺構・遺物は発見されなかった。

平面的調査

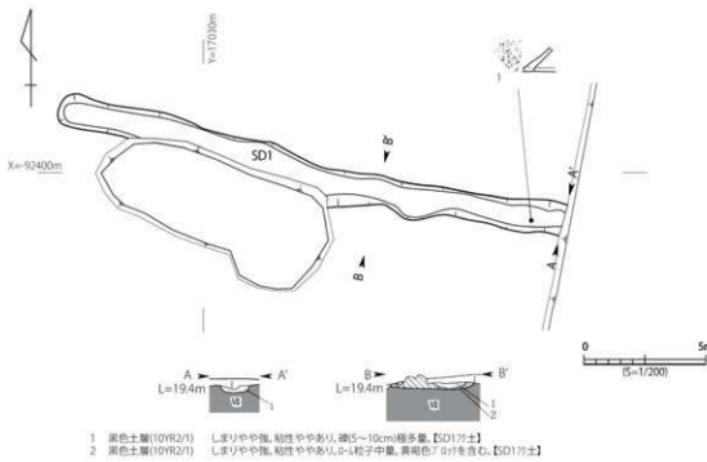
前述のトレンチ調査の所見をもとに、平成20年、北東ブロックの平面的調査を開始した。調査では、基盤層に至るまでの間に生活面が存在しないか、重機により慎重に掘削した。しかし、生活面を認識することはできず、加えて、基盤面において認識された遺構も、トレンチ調査の際に一部検出されていたSD1をあわせても溝状遺構2、土坑1、ピット1と少なかった。

SD1

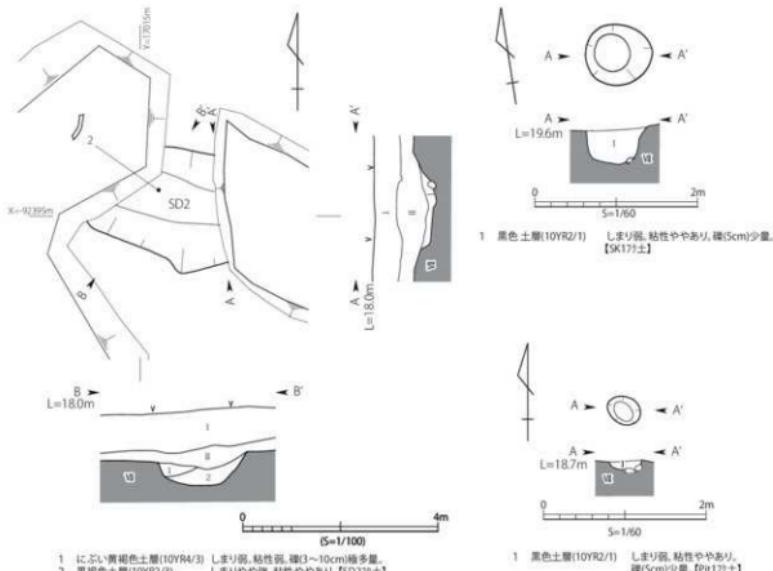
SD1はIG1を造る際の掘り方とも考えられたが、石積みの存在しない箇所にまで掘り込みが続くことから、



第18図 北東ブロック全体図



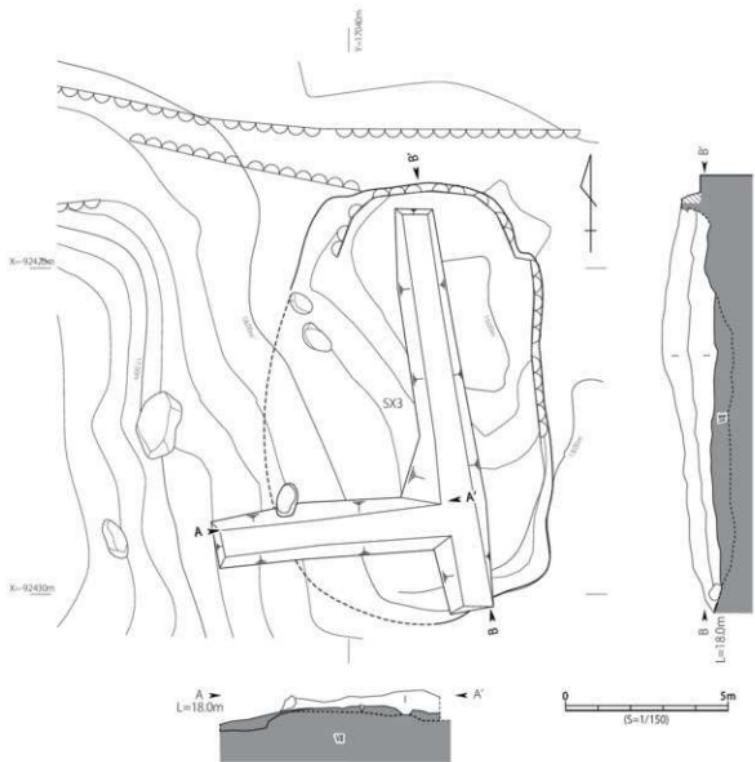
1 黒色土層(10YR2/1) しまりやや強。粘性ややあり、礫(5~10cm)稍多量。【SD1刀土】
2 黑褐色土層(10YR2/2) しまりやや強。粘性ややあり、0-5cm粒子中量。黄褐色アロカを含む。【SD1刀土】



1 にぶい黄褐色土層(10YR4/3) しまり弱。粘性弱。礫(3~10cm)稍多量。
2 黑褐色土層(10YR2/3) しまりやや強。粘性ややあり。【SD2刀土】

1 黒色土層(10YR2/1) しまり弱。粘性ややあり。礫(5cm)少量。【Pit1刀土】

第19図 SD1・SD2・SK1・Pit1



I 黒褐色土層(7.5YR2/2) しりやや弱。粘性弱。礫(1cm)少。【SX3付】

第20図 SX3



第21図 SX3 南西から



第22図 SX3 北から



第23図 北東ブロック 出土遺物

IG1 を造る以前の溝と判断した。東側は、調査区外へと続き、東西方向で 21m、幅 1.25m、深さ 0.3m を測る。平面は直線的で何らかの意図を持って掘削されたものと考えられるがその目的は明らかではない。溝が、東側の日吉浅間神社の拝殿と本殿の境あたりへと続くことと関係ある可能性もある。底面には自然石が露出するため完全に平らではないが平坦を作り出そうとする意図を感じられる。

SD2

SD1 の西側の延長線上で検出されたものの、幅、深さともに大きく異なることから、別の目的で掘削された遺構と考えられた。調査区の関係から部分的な検出しか行えなかったが、幅 1.9m、深さ 0.5m をはかり、断面は比較的深い U 字を呈する。覆土は自然堆積と考えられ、上部は明治時代頃の盛土によってバックされている。

SK1

単独で検出され、周辺には、同様のプランは確認されなかつた。形態はほぼ正円を呈し、底面はほぼ平らで幅

0.75 m、深さ 0.5 m を測る。出土した遺物には、18世紀後半から 19世紀のものが認められるものの、明治時代以降のものも認められ、掘削時期は判然としない。

Pit 1

SK1 同様、単独で検出された。遺物も認められないものの立ち上がりが明瞭なことから遺構として認定した。覆土からも時期を明らかとすることはできない。

SX3

北東ブロックとした範囲内において明らかな高まりとして調査前から認識されていた。高まりの北側と東側において土留めと考えられる石積みが存在する。土層観察からは高まりの土に意図的な造作は認められなかった。高まりの南側、西側には石積みが認められず、特に西側は地山本来の傾斜をよく残しており、自然石もいたところに認められた。

高まりの西側には文久二年に建物が存在したらしく、SX3 の場所は「庭」と注記されていることから（前節参照）、築山と考えられる。

出土遺物

北東ブロックでは、13 点の遺物を図示した。1~9 は 14世紀から 15世紀を中心とした時期の破片である。4 は、15世紀中~後葉の大窯の綠釉碗で、ほかは常滑の捕鉢や甕が目立つ。12・13 はガラス製の医療器具であり、東ブロックでも多く出土しており、組合立富士病院に関係する遺物と考えられる。

北東ブロックまとめ

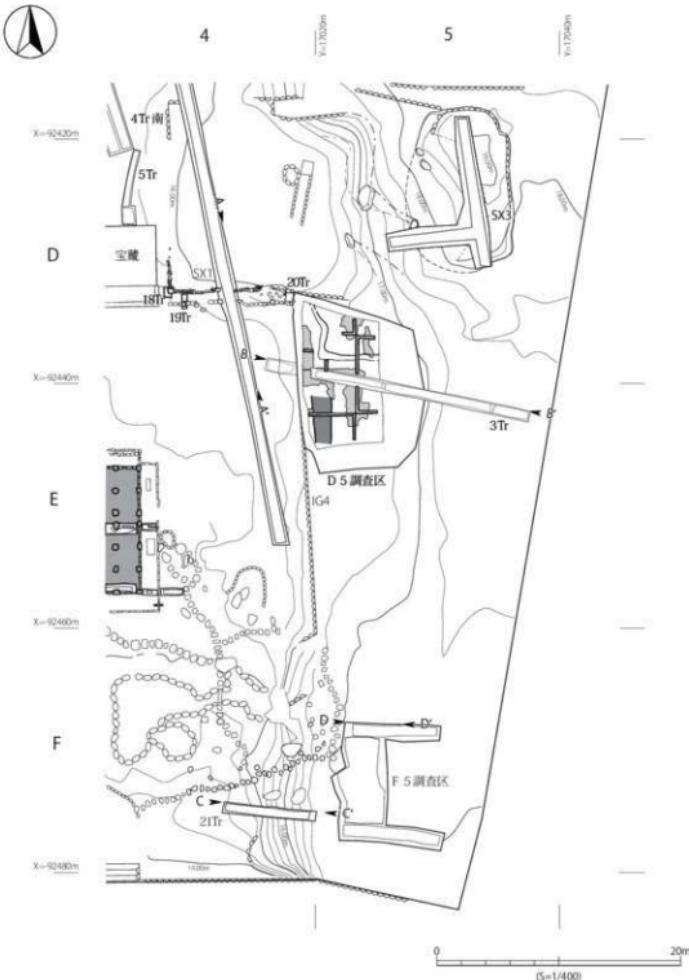
以上のように、近世以前の明確な遺構を複数検出するには至らなかった。これは、明治時代以降、IG 4 や盛土をはじめとする大規模な土地変更が行われ、本来存在するはずの旧表土が削り取られてしまった為と考えられる。そのため、絵図に描かれた建物跡などの存在を考古学的に実証することはできなかったが、唯一 SX 3 については、文久年間に描かれた絵図との合成から築山の可能性が指摘された。後述する「文久建物」の配置を考える上で重要な成果である。

加えて、北東ブロックから、中世の遺物片が比較的多く出土したことから、大規模な土地変更が行われる以前には、建物などの遺構や寺院空間が存在した可能性が考えられる。

第3節 東ブロック

北東ブロック同様、敷地東側には、日吉浅間神社とを画する塀が存在する。また、IG5を境として西側とは1.1mの比高差が存在する。これは、北東ブロックにお

いて認められた明治時代以降の大規模な土地変更とそれに伴う石垣設置と同じ造作の結果である。



第24図 東ブロック トレンチ配置図

トレンチ調査

平成19年に、石垣（IG5）に直交するように東西方向に3Trを設定し、近代以前の遺構が存在するか調査を行った。その結果、東側から西側に向かって地山が大きく落込むことが確認され、その落ち込みの西側に石積み（IG5）を設置しながら、東側から西側に向かって土を押し出すように盛土が行われていることが明らかとなつた。盛土中からは明治20年以降の陶磁器が多く出土し、あわせて衛生陶器などの病院で使用されたと考えられる遺物が多数出土した。これらは、現在、日吉浅間神社や氏子会館が位置する場所の前面にかつて存在した組合立富士病院のものと考えられ、病院廃止後、病院周辺の土が西側（敷地内東側）に運ばれる土地変更の結果

と考えられる。

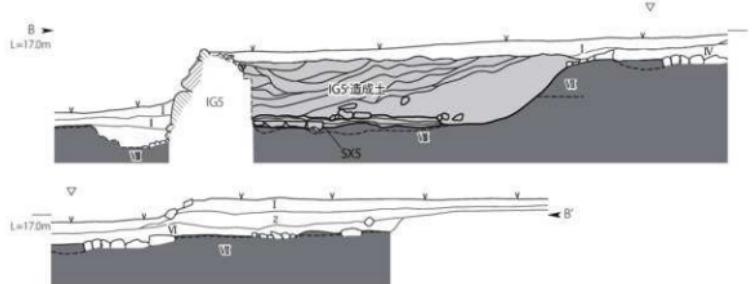
また、盛土の下層からは、粘土にパックされる形で板石が4枚敷き詰められるように検出された（SX5）。詳細はD5調査区として報告する。

敷地南端では、東西方向に21Trを設定した。これは、文久元年の絵図に西側から東側に向かう通路、門が描かれていたため、それらの検出を目指したものである。掘削の結果、現在、露出している溶岩は、元の地形をそのまま残しており、腐植土以外の土層が存在せず、階段などの存在を推定させる遺構も確認されなかった。また、21Trの東側では、F5調査区を設定し門などに伴う柱穴の検出を目指したもの、明確な落ち込みなどを検出するには至らなかった。これは、前述の組合立富士病院廃

【8Tr南北セクション】



【3Tr東西セクション】



1. 黒色土層(10YR2/1) しまり弱。粘性なし。砂質。縫(1mm)の白色粒子を中量含む。
2. 黑褐色土層(10YR2/3) しまり弱。粘性なし。礫(1~10cm)多量。V3、アラカリ混入。

0 4m
(S=1/100)

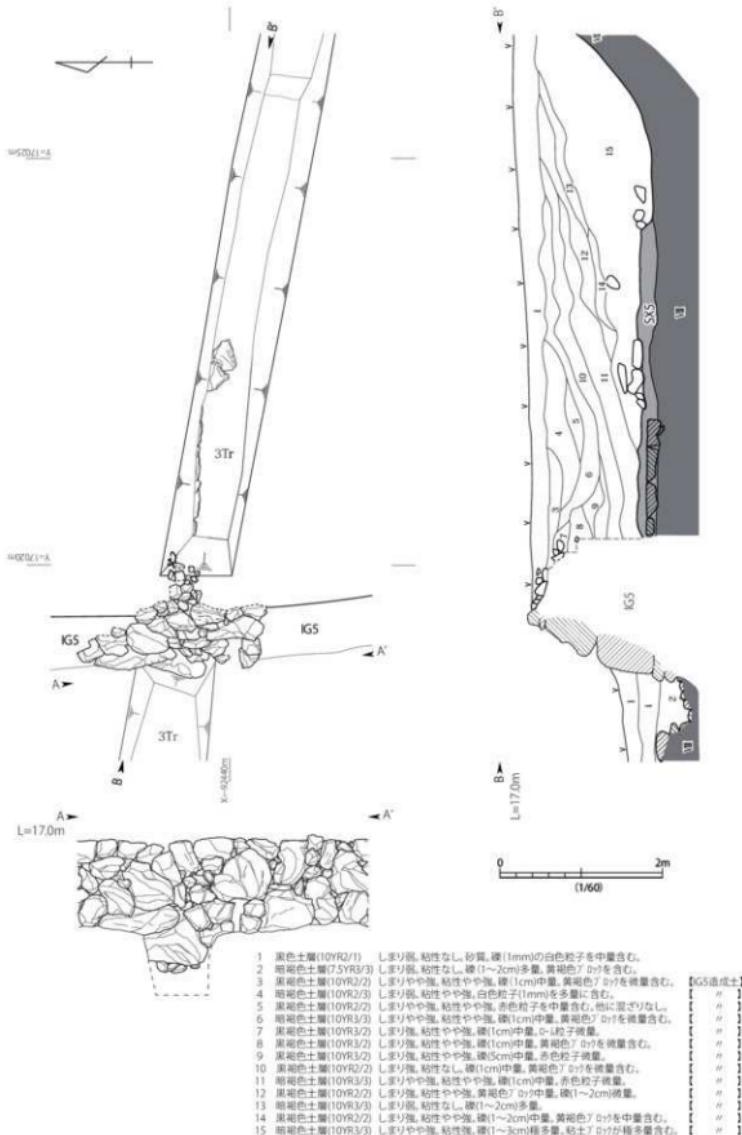
【21Tr東西セクション】



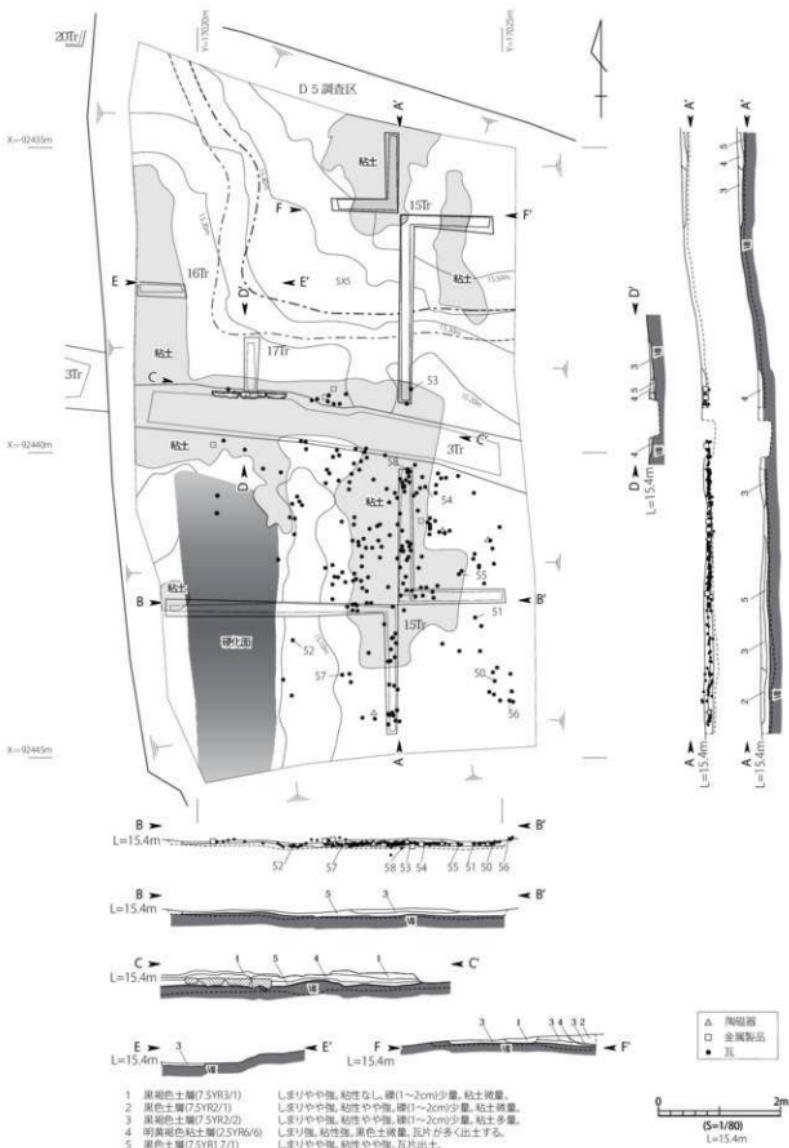
【F5調査区北壁東西セクション】



第25図 東ブロック トレンチセクション図



第26図 I G 5



第27図 D 5調査区 S X S

止後の大規模な土地改変によるものと考えられる。

D 5 調査区

平成 19 年度の調査で 3 Tr として調査し、粘土中より 40cm × 10cm、厚さ 10cm 程度の板石を 4 つ検出した。当初、この石がどのような遺構に伴うものなのか、また、いつのものなのか明らかではなかったが、文久年間に描かれた絵図を合成した結果、「湯殿」の位置と一致したため、平成 21 年度に平面的な調査を行うことになった。

調査区の西側には明治時代に設置されたと考えられる石垣（IG5）とそれに伴う造成土が高さ 1.5m 程度あり、後述する粘土、地山検出面は削平を受けているものと考えられた。

掘削の結果、3 Tr を中心に粘土や粘土と黒色土が混ざったような土層が検出された。そのため、粘土の広がりの性格を明らかとするため、15 ~ 17 Tr を設定し調査を行った。その結果、粘土中より 19 世紀中葉の生産と考えられる瓦片が多数出土した。また、平成 19 年度に検出した長方形の板石の上部にも瓦片が認められ、粘土にパックされているかのような状況であった。

粘土中に瓦片を混入する技法は、建物を建てる際の基礎工事の作法と考えられ、19 世紀中葉以降のものと考えられる不要となった瓦が使用されているということから、その作法は、幕末・明治時代頃と考えられた。また、粘土が検出されなかった調査区南西端では、幅 1.3 ~ 1.6m で長さ 4 m の硬化面が認められた。加えて、調査区北東側では、粘土が直角に検出され、その形に合わせるように地山の傾斜変換が認められた。以上のことを総合すると、地山の一段高い北東側に「湯殿」が存在し、粘土の検出された部分は、文久年間に主屋建設に伴う基礎工事の痕跡と推定することができる。ただし、粘土に



第 28 図 S X 5 板石

パックされた状態で検出された板石は、意識的に設置されたと考えられるものの、排水溝などの側溝の石ともなり得ず、構造は現段階では明らかでない。

S X 1

安政 4 年（1857）に再建された土蔵（宝蔵）の東側に接した箇所に東西 2 列の石列が存在し、後側（北側）の石列は直角に北方向に曲がる。前列の石列は一段でやや大きめの河原石を表土上に置き、後列の石列（石積み）は、それよりも小さい溶岩礫を使用し 3 ~ 4 段積み上げている。これは、水平面を確保するための石積みと考えられる。

「文久絵図」では「庫裏」が描かれている場所に当たることから、当初、礎石や、掘り込み、硬化面などを検出するために人力による平面的な掘りさげを行ったものの検出することが出来なかった。さらに、南北方向に 8 Tr を設定し、掘削を行ったもののやはり、石積み設置の時期を明らかにすることも、建物の存在を証明することはできなかった。

出土遺物

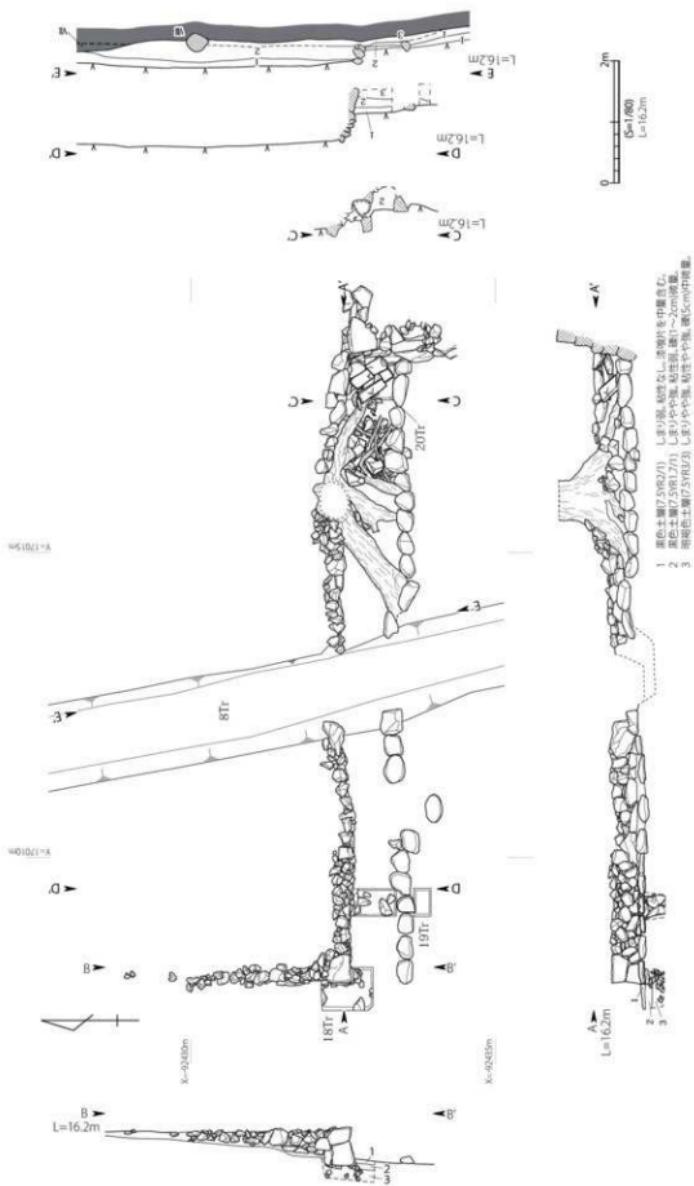
平面的な調査を行った D5 調査区の遺物を多く図示した。総じて、明治時代後半から大正時代の小碗など日常的に使用する陶磁器が多く、IG5 の石垣造成時期を示している可能性が高い。また、37 ~ 45 は医療器具と考えられ、特に注目されるのが 41 のガラス瓶である。側面にエンボスで「富士病院」と見える。内容量は 100ml である。

46 の 10 世紀の駿東窓も注目される。

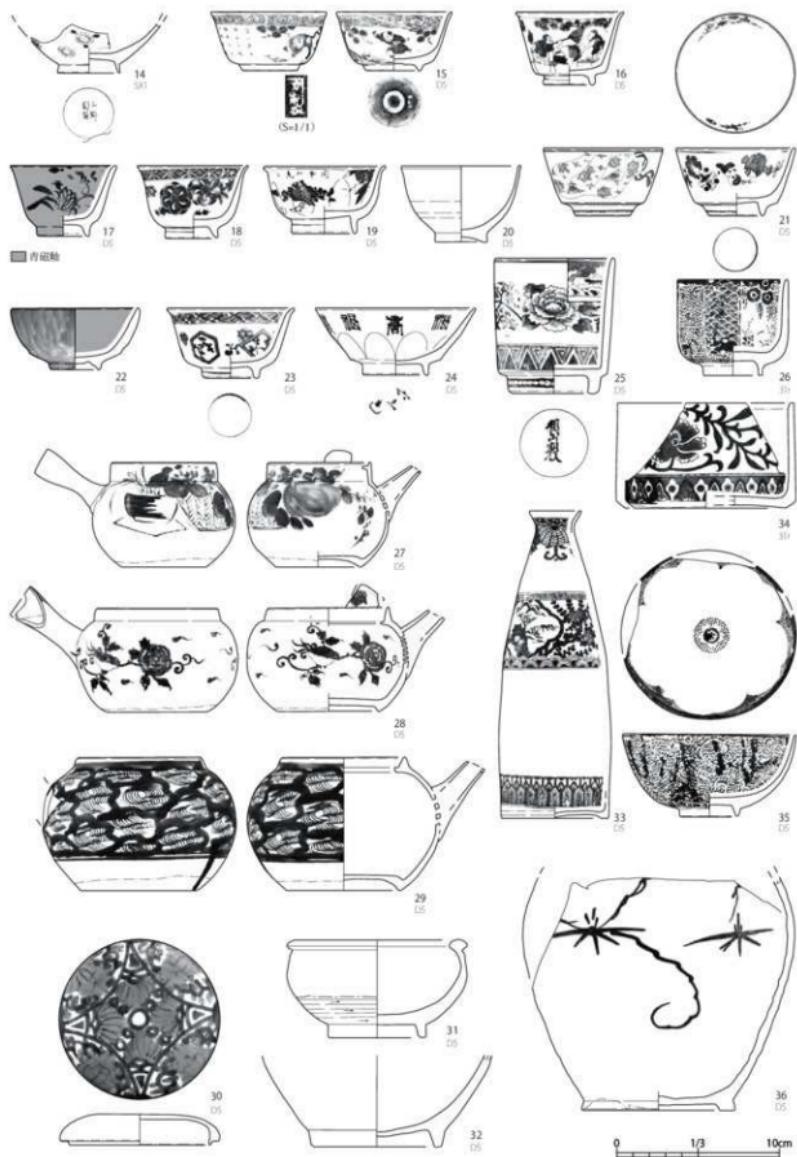
東ブロックまとめ

東ブロックは敷地外東側の土を西側へ造成盛土するという明治時代以降の土地造成が行われた結果、一部分ではあるが近世の遺構をパックしていたことが判明した。

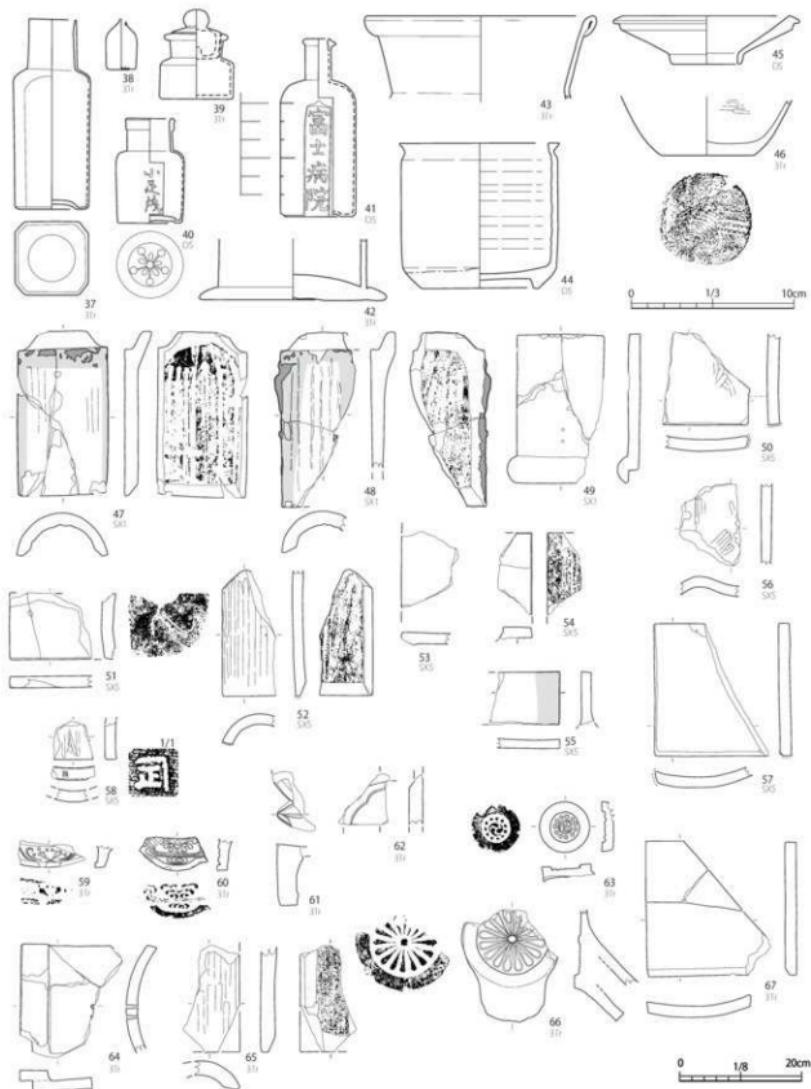
文久年間に絵図との合成により築山と判断された SX 3 をはじめ、盛土に保護されていた湯殿跡における遺構の検出が注目される。いずれも考古学的成果のみで近世と断定することはできないが絵図との合成によりその可能性の高さが指摘される。



第29図 S×1



第30図 東ブロック 出土遺物（1）



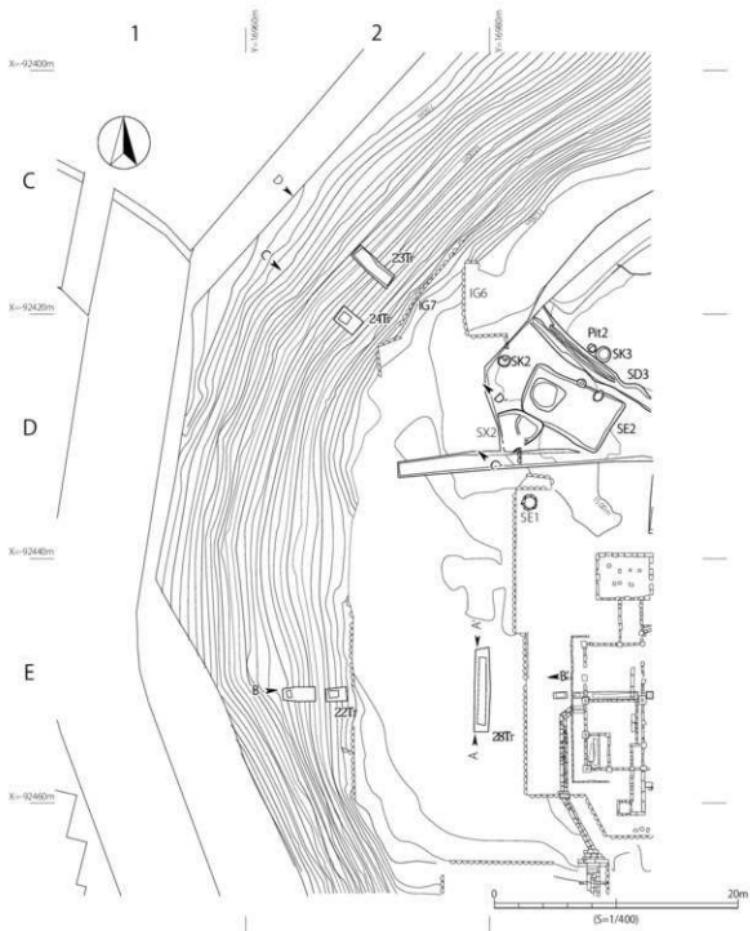
第31図 東ブロック 出土遺物（2）

第4節 西ブロック

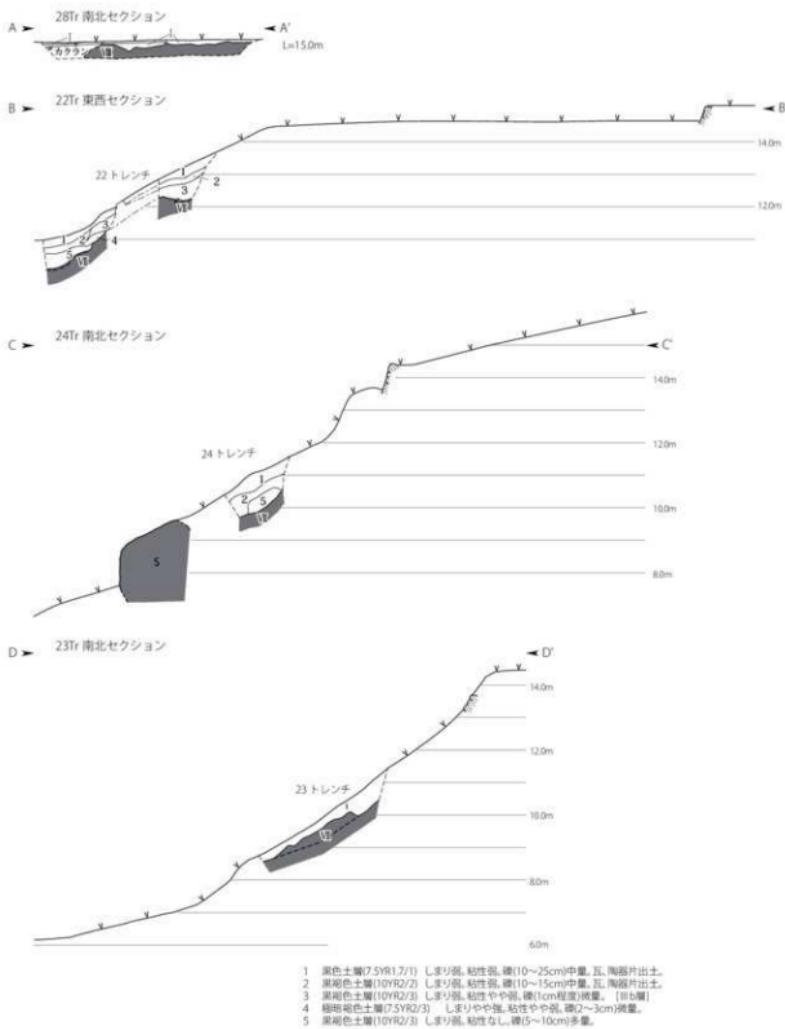
主屋が存在した平場から西側に向かい、高さ 10m の急傾斜がありそれを下ると和田川・吉原公園に至る。西側ブロックの 22 ~ 24Tr は、東泉院時代、ゴミとして捨てられた遺物が斜面部に存在するのではないかと考

え、敷地西側斜面に 22Tr、北西側斜面に 23・24Tr を設定し掘削を行った。

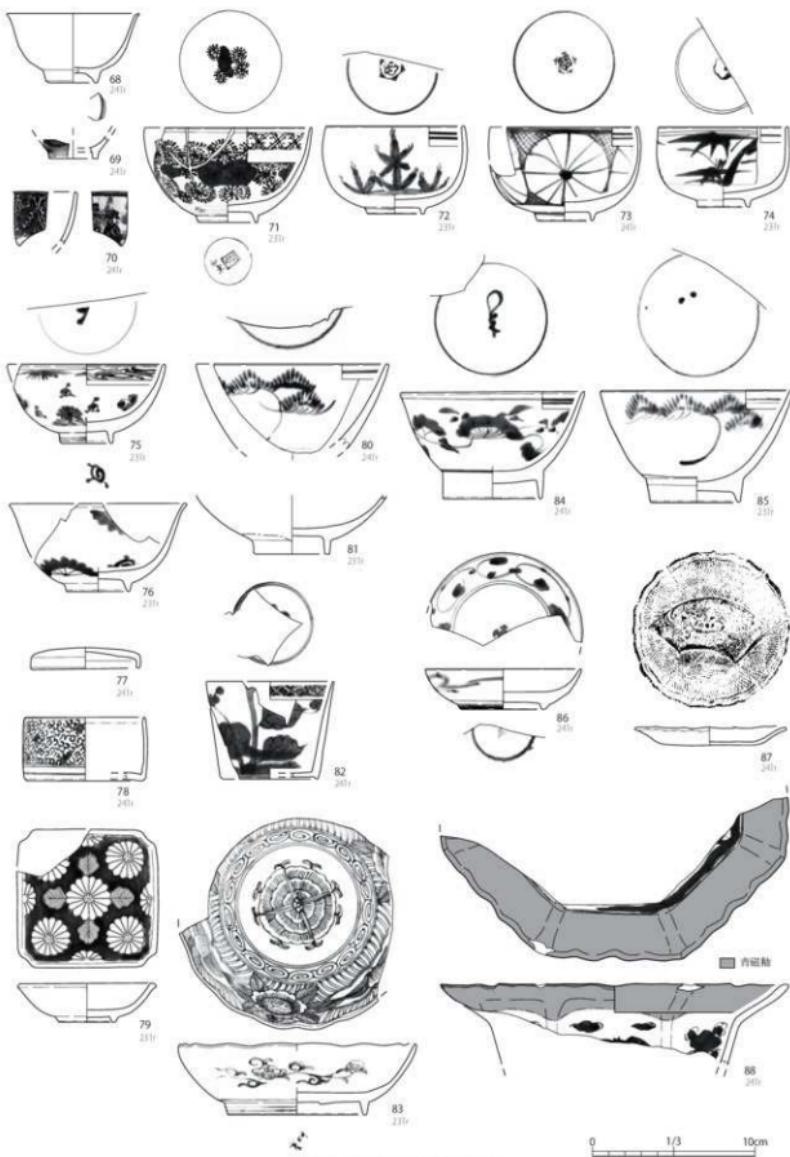
22Tr の土層観察の結果、表土・近代の堆積土、近世以前の堆積土、地山と分けて考えることができたが、近



第32図 西ブロック トレンチ配置図



第33図 西ブロック トレンチセクション図



第34図 西ブロック 出土遺物(1)



第35図 西ブロック 出土遺物（2）

代遺物が多く、近世遺物は多く出土しなかった。

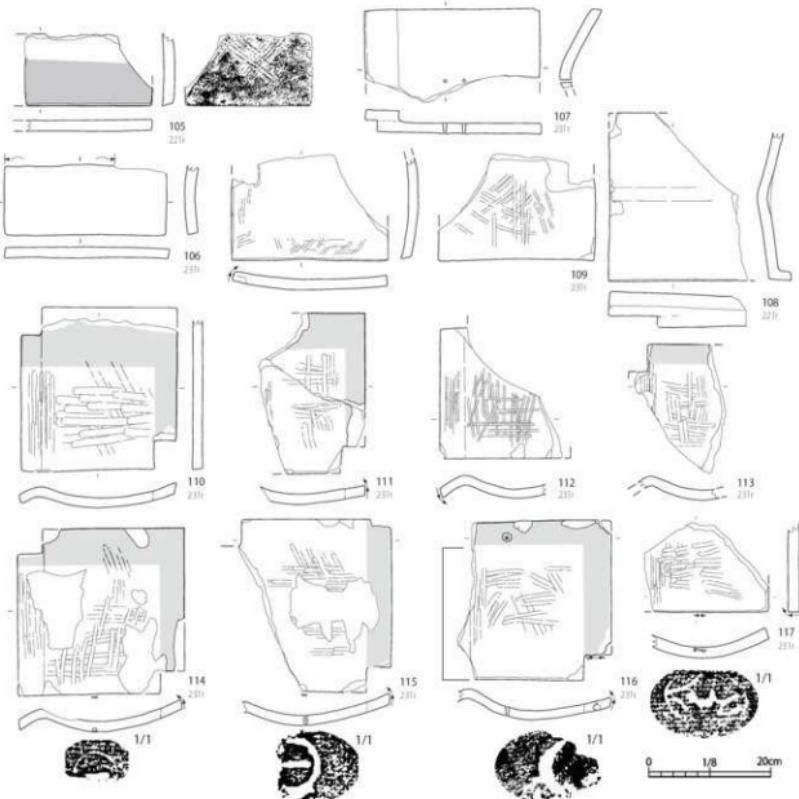
一方、23・24Trからは、近世の遺物が比較的多く出土し、二次的に火を受けたものも含まれていた。また、遺物の断面が磨耗していないことから、斜面上部から投げ捨てられたものと推定された。23・24Trと主屋との間には、18世紀後半に火災の片付けのために埋められたSE2の存在が明らかになっていることから、23・24Trなどで出土している被熱した遺物も同様の原因によるものと推定される。

出土遺物

18世紀後半と19世紀後半の遺物が多く出土している。

特に注目されるのが、68・69・70である。68は19世紀前～中葉、中国徳化窯産の碗、69は19世紀中葉、中国福建省産の碗で、静岡県内ではあまり出土しない貴重なものである。また、70は19世紀中葉にヨーロッパで生産された碗である。小破片だが、ナポレオンが描かれたものと考えられる。

71は19世紀後半の碗だが、金縫ぎの痕跡が認められ、その際に「東和」朱書きされている。ほかにも83の底部裏面にも同様の朱書きが認められることから「東和」が東泉院を示していたものと考えられ、「和田町東泉院」の略の可能性であった指摘される。



第36図 西ブロック 出土遺物（3）

第5節 北ブロック

平成19年～20年にかけて、平面的な調査に先行してトレンチ（4Tr、8Tr、10Tr、11Tr）による調査を行った。その結果、平坦面の確保を目的として、土や石を斜面部側に押し出し、造成している痕跡が確認された。これは、一時期によるものというよりは、長期間に渡る継続的な造作と考えられた。

平面的調査

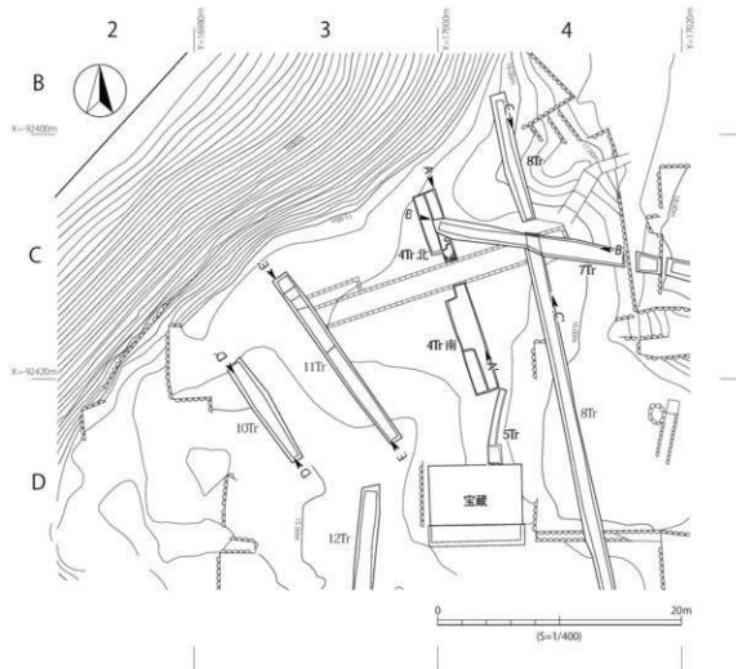
平成19年に掘削した4Trから15世紀の遺物（221）が出土したため、平面的な調査を実施した。

トレンチ調査で明らかとなっていた、平坦部確保に伴う造成の痕跡は、調査区北側において平面的に検出され

た。それによると、地山が落ち込む箇所に黒色土を押し出し、人頭大より大きい溶岩を設置しながら部分的に石垣状にし土留めを図っていた（SX6）。さらに別の時期にも黒色土の前面（斜面側）に、拳大の石などを押し出し、水平な土地を作り出していた。

SE2

SE2は平成20年度の調査により検出された遺構である。長辺7.8m、短辺4.4m、深さ0.5mの方形の掘り込みの床面の一方に直径2.4m程度の円形掘り込みが伴う遺構である。円形の掘り込みの検出面から深さ2.8mは調査を行うことが出来たが、それ以上は安全管理上の理由から掘削を断念した。現状では、井戸跡が廃棄され



第37図 北ブロック トレンチ配置図

たものと考えており、埋め土内から多量の陶磁器・瓦片が出土している。

SD 3

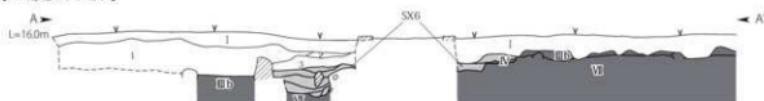
調査区の西側、SE2 の方形の掘り込みと並行するよう検出され、幅 0.9 ~ 1.5 m、深さ 0.2 m を測る。溝を挟んで東西で地山の標高差が 20cm 存在する。溝の東側には明確な建物の痕跡が見つからなかったものの、平坦面との区画や排水などの性格を担っていたものと考えられる。加えて、SE2 の主軸とほぼ並行していることを評価すれば、雨水などが SE2 の中に入らないようにするた

めとも考えられる。溝の周囲から SK2・SK3・Pit2 などが検出されたものの相互の関係は不明。

SX 2

調査区の西端において検出された。西側は調査区外のため、全体の形状は不明。東西残存長 3.5 m、南北 3.2 m、深さ 0.4 m を測る。おそらく、方形の掘り込みになると考られ、南東コーナー付近にはさらに土坑状の掘り込みを伴う (SX2SK1)。柱穴や礎石なども検出されず、その性格は明らかではないが、東側の SE2 と主軸を同一にすることなどから、同時期の遺構と考えられる。

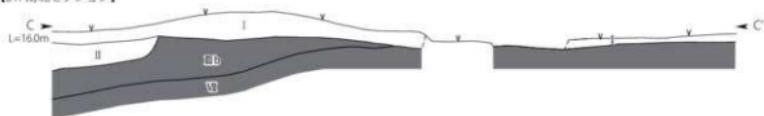
【4Tr 南北セクション】



【7Tr 東西セクション】



【8Tr 南北セクション】



【10Tr 南北セクション】

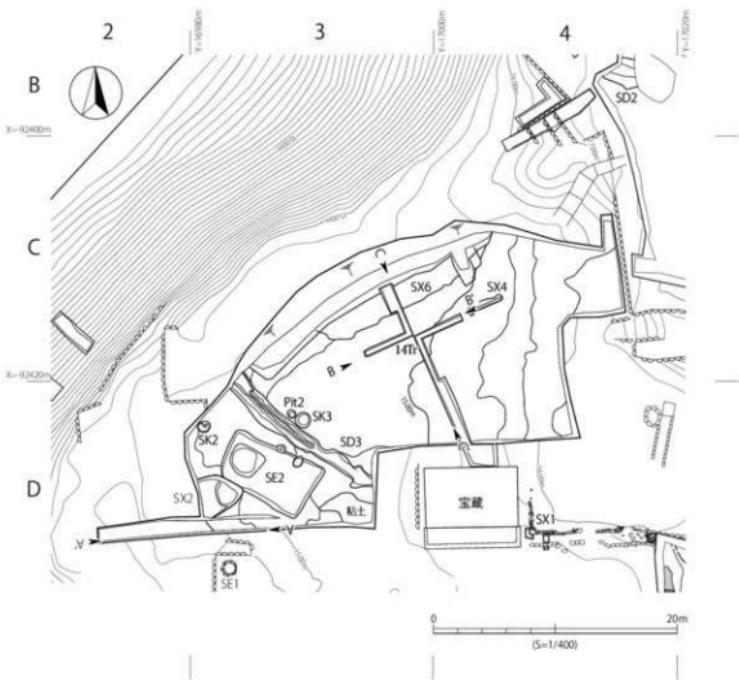


【11Tr 南北セクション】



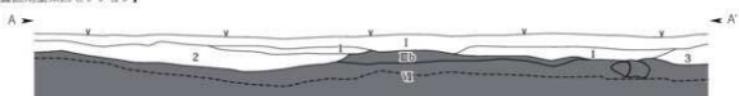
- 1 黒褐色土層(10YR2/2) しまり弱、粘性弱、礫(15~30cm)極多量、黄褐色アカウ中量。(II層)
- 2 黒褐色土層(10YR2/2) しまりや強、粘性強、上部にのみ礫(10cm)が少量入る。
- 3 黒色土層(10YR2/1) しまりやや強、粘性やや弱、上部にのみ礫(10cm)が少量入る。
- 4 黑褐色土層(10YR2/2) しまり弱、粘性弱、礫(10~15cm)多量。
- 5 黑褐色土層(10YR2/2) しまりやや弱、粘性やや弱、赤色粒子(5mm)中量、やや砂質。
- 6 黑褐色土層(10YR2/2) しまりやや強、粘性弱、礫(1cm)少量。

第38図 北ブロック トレンチセクション図



第39図 北ブロック 全体図

【調査区南壁東西セクション】



【14Tr東西セクション】



【14Tr南北セクション】



- 1 黄赤褐色土層(2.5YR3/3) しまり弱、粘性弱、赤褐色砂礫による造成土。[II]
- 2 黑褐色土層(7.5YR2/2) しまり弱、粘性弱、礫5~10mm少量、腐化材少量。
- 3 黄褐色土層(7.5YR3/3) しまりやや弱、粘性弱、黄褐色7.5Y中量。

0
(S=1/100)
5m
L=15.0m

第40図 北ブロック 調査区トレーンセクション図

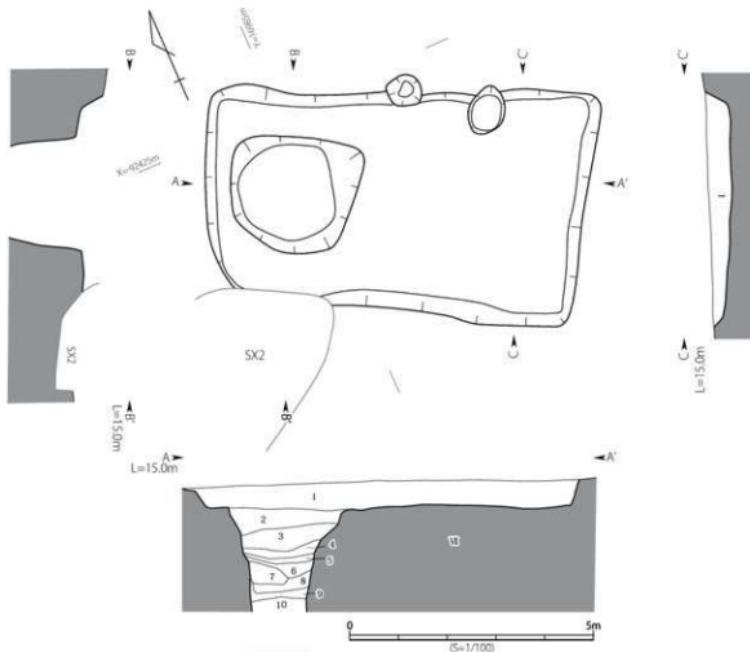
出土遺物

S E 2 SE2の遺物については次章にて詳細を整理していくこととし、ここではその概要について触れるに留めておく。SE2からは18世紀後半の一括遺物が出土した。陶磁器片に混ざって海鼠瓦を含む瓦片も出土し、いずれも二次的に火を受けた痕跡が認められることから、寛政2年(1790)における主屋での火災後の片付けに伴う遺物と推定される。

特に注目されるのが、17世紀後半に中国景德鎮窯で作られた青花磁器(120)や江戸在地系のかわらけ(161)や泉州麻生(161)の刻印がされる身とセットになる焼塩壺

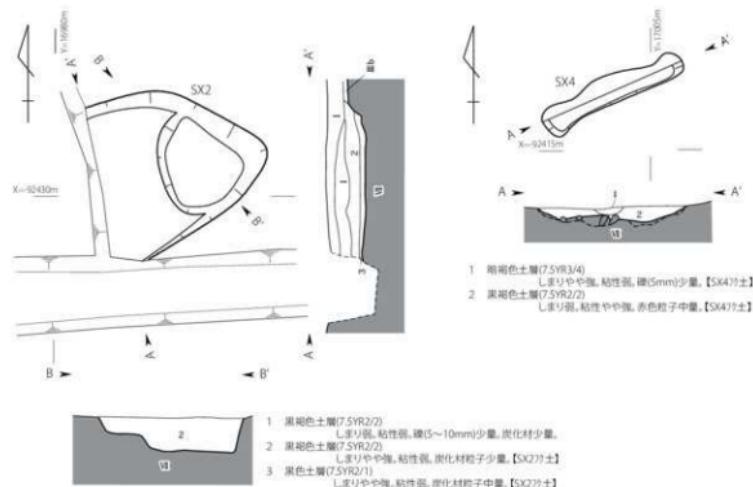
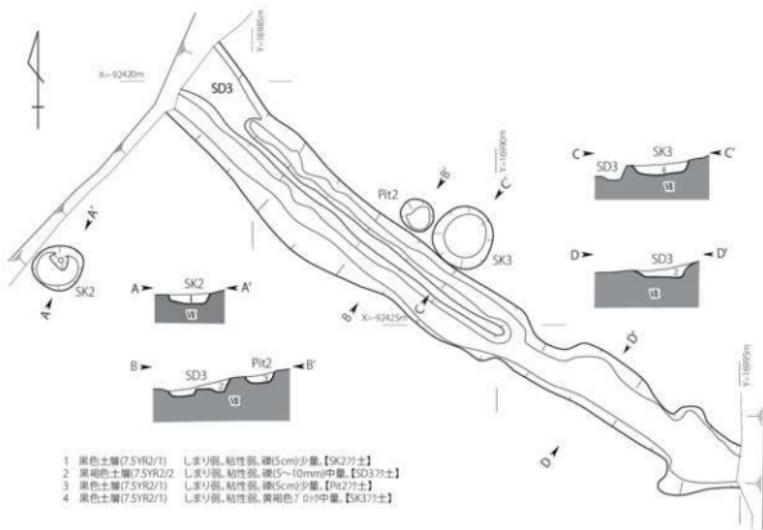


第41図 S E 2検出 南東から



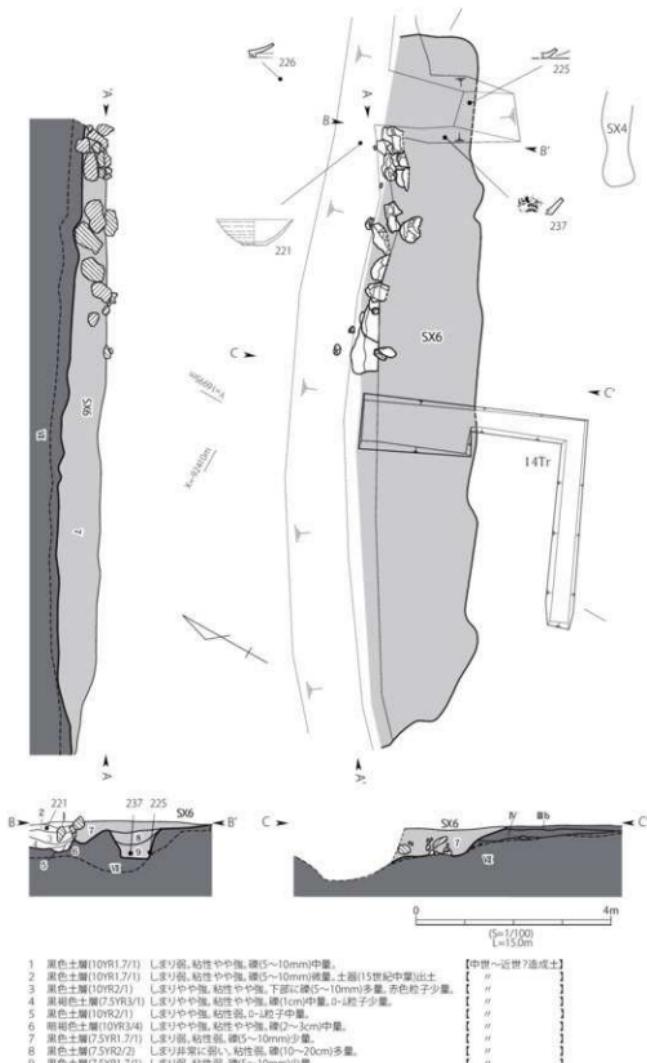
- | | [SE2]土 |
|-------------------|---------------------------------------|
| 1 黒褐色土層(7SYR2/2) | しまりやや強。粘性弱。炭化材料少量。 |
| 2 黒色土層(10YR2/1) | しまりやや強。粘性弱。硬(3cm)中量。炭化材少量。 |
| 3 黒色土層(10YR2/1) | しまりやや強。粘性弱。硬(3cm)中量。炭化材5~20mm)中量。 |
| 4 黒色土層(10YR2/1) | しまりやや強。粘性弱。硬(3cm)中量。炭化材10~30mm)中量。 |
| 5 黒色土層(10YR1.7/1) | しまりやや弱。粘性弱。炭化材20~40mm)多量。炭化材が帯状になる。 |
| 6 黒色土層(10YR2/1) | しまりやや強。粘性弱。黄褐色(2)テクノ層。炭化材は含まない。 |
| 7 黒色土層(10YR2/1) | しまりやや強。粘性弱。黄褐色(2)テクノ層。炭化材は含まない。 |
| 8 黒色土層(10YR2/1) | しまりやや強。粘性弱。黄褐色(2)テクノ層。下部に炭化材が混入。 |
| 9 黒色土層(10YR2/1) | しまりやや強。粘性弱。黄褐色(2)テクノ層。下部に焼土(2)テクノ層混入。 |
| 10 黒色土層(10YR2/1) | しまりやや強。粘性弱。上部に焼土(2)テクノ層混入。 |

第42図 S E 2

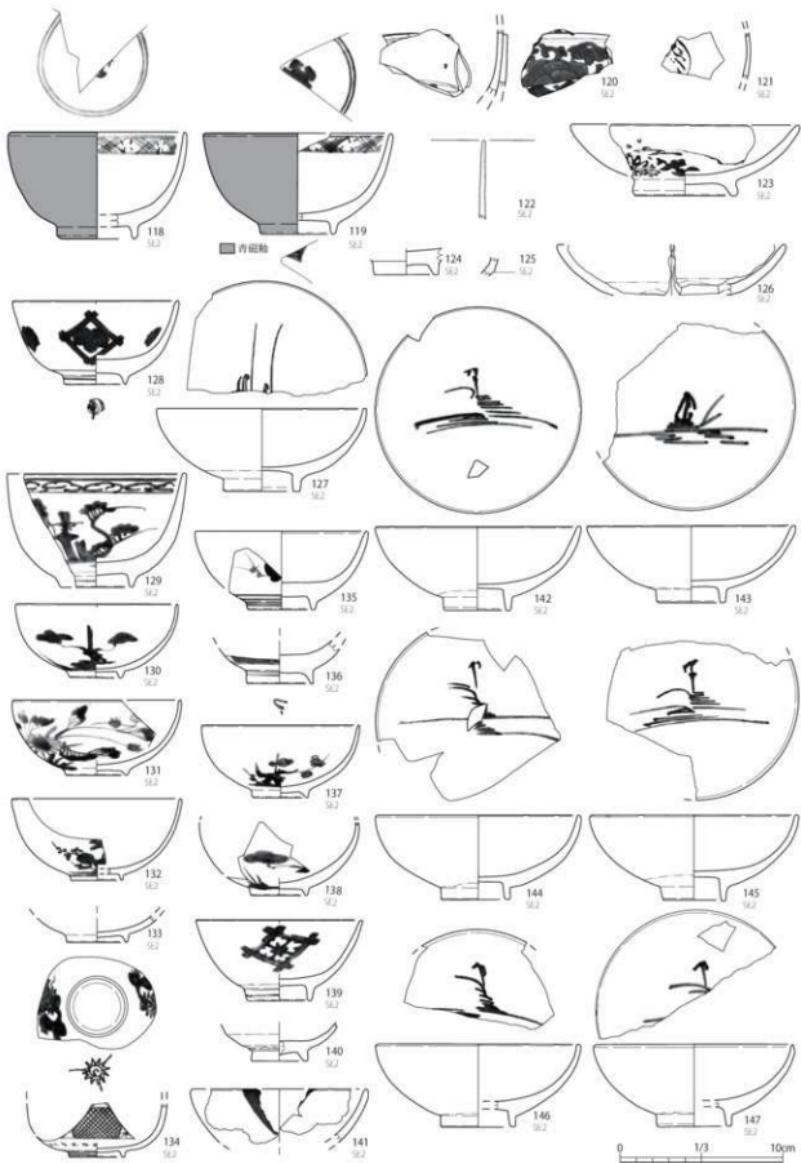


0 2m
 (S=1/100)
 L=150m

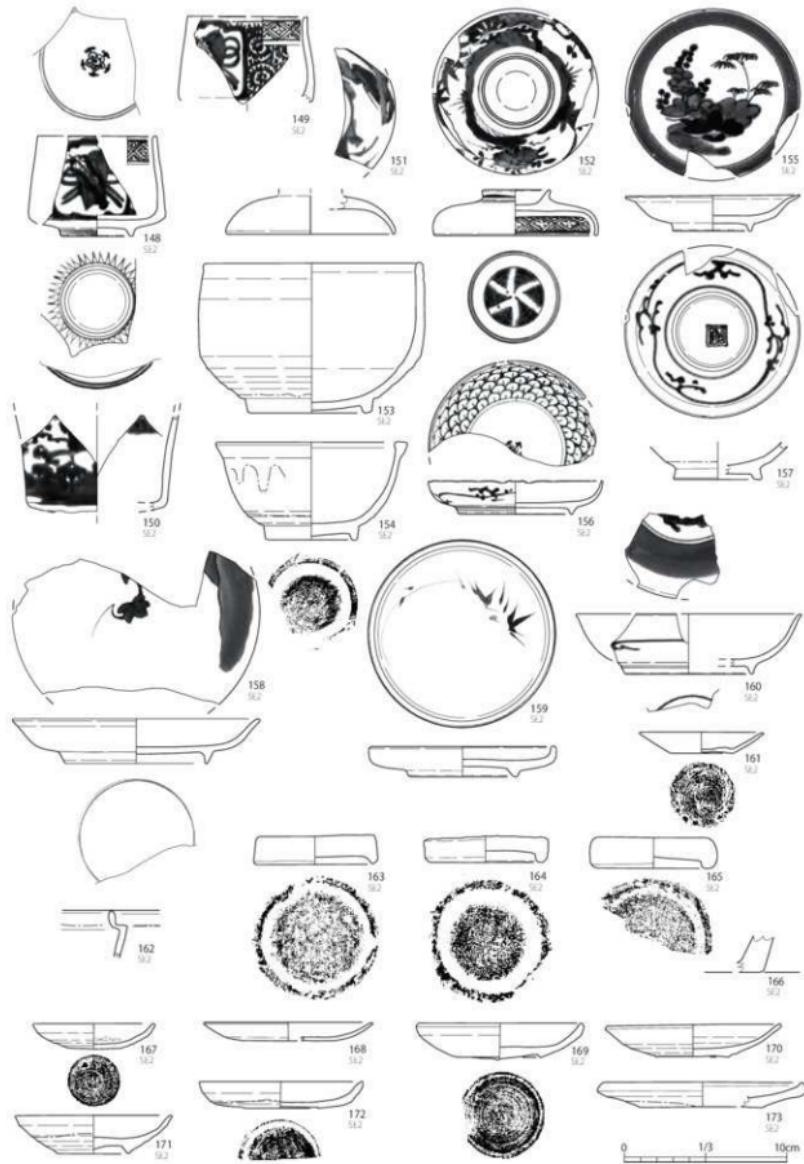
第43図 SD3・SK3・Pit2・SX2・SX4



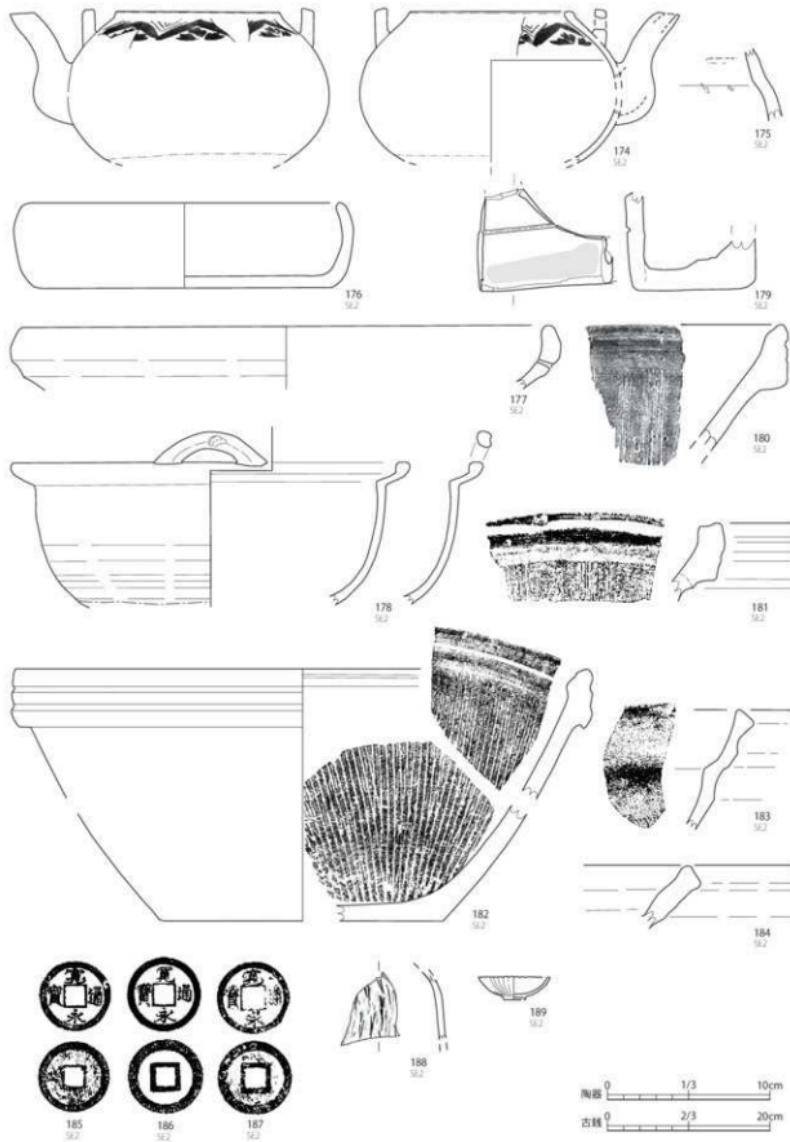
第44図 SX6



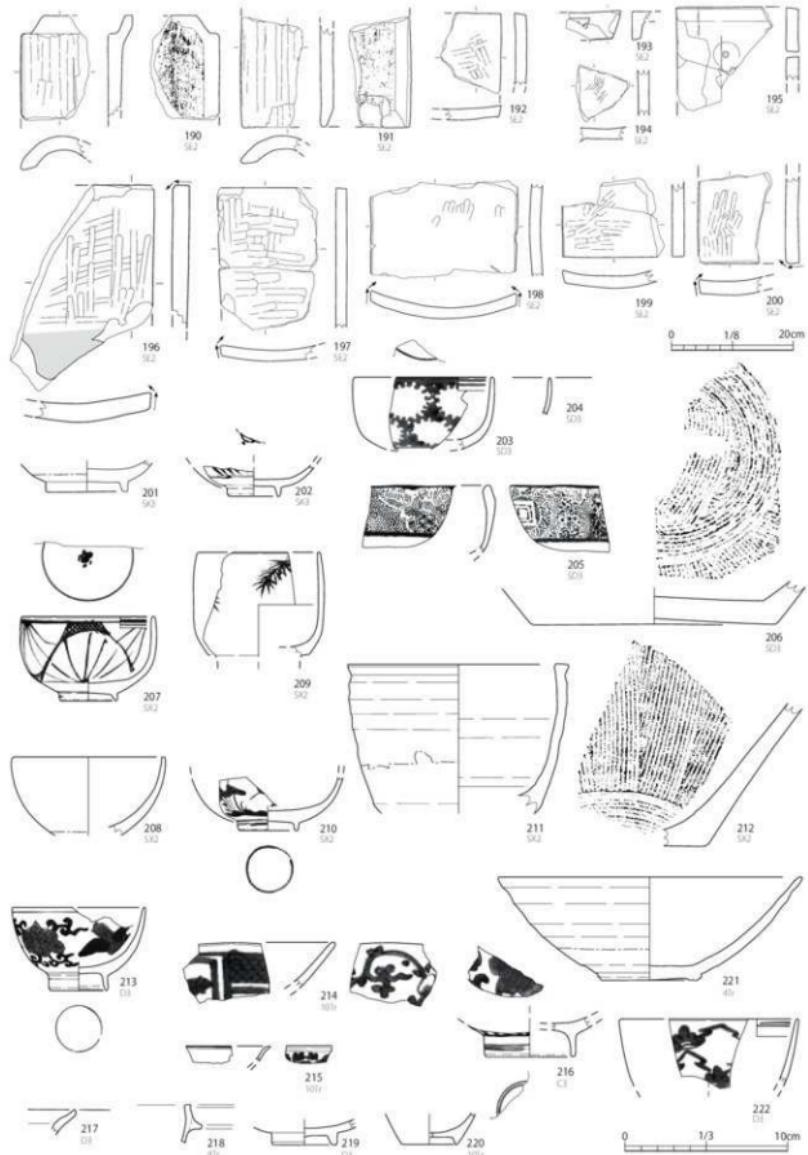
第45図 北ブロック出土遺物(1)



第46図 北ブロック出土遺物（2）



第47図 北ブロック出土遺物（3）



第48図 北ブロック出土遺物(4)

の破片4点(163～166)、京焼と推定される平碗(123)などである。

その他の遺物 特に注目されるのが、216の景德鎮産の大碗である。17世紀後半、清代の製作と考えられる。SE2から出土した同じ景德鎮の碗(120)同様、二次的に火を受けた痕跡が認められる。

また17世紀後半に肥前で生産された大皿(214)、环(215)、皿(223)なども注目される。SE2同様、18世紀末の肥前の皿(224)にも二次的に火を受けた痕跡が認められる。

4Tr北側から出土した15世紀初頭の碗(221)も注目される。出土した土層は水平面確保のための造成土層と考えられ、そこから233～235や15世紀代の羽釜(218)が出土したことは、中世東泉院の実態に迫る可能性があり、注目される。しかし、その一方で、それらの遺物が東泉院の活動に直結するのか、また、造成の時期を直接示しているかどうかについては慎重な判断も必要である。

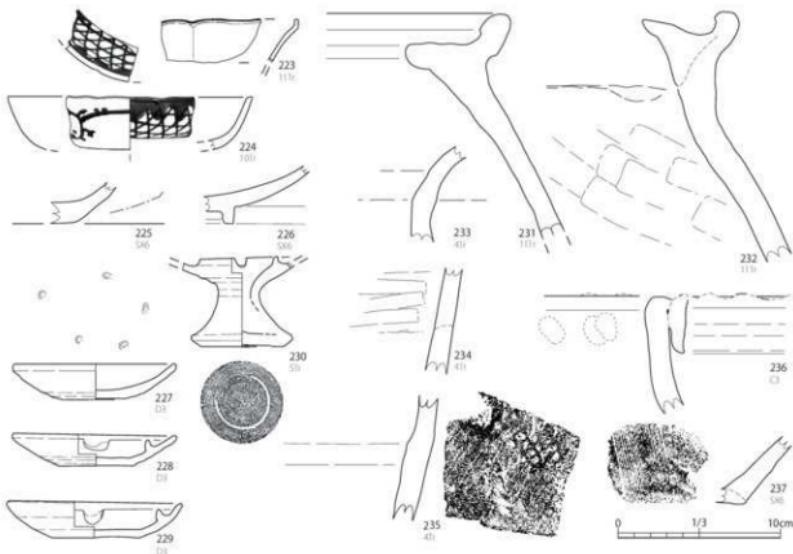
北ブロックまとめ

北ブロックでは、掘り込みを持つ遺構が比較的多く確認された。平面的な調査を実施したことによるが、明治時代以降の大規模な造成や建物再建に伴う改変を受けなかったことによる部分も大きい。

注目される点は2点ある。一点目は、15世紀初頭の遺物が造成土層から出土したことである。造成時期が15世紀かどうかについては慎重にならなければならぬが、中世・近世における東泉院の活動の一端を示している可能性が高い。

二点目は、SE2の検出と出土した遺物の一括性の高さである。SE2・SD3は現主屋や文久年間に描かれた絵図の建物配置と異なり、東西南北軸から多くは離れている。これは、これらの遺構が文久年間以前の遺構であることを示している。

堀内氏が述べるように(第4章第1節)出土資料の中には、将軍家への祈祷や御礼、大名家から贈与された可能性を持つものが認められることは、文書などに認められる東泉院の活動を裏付けるものとして注目される。

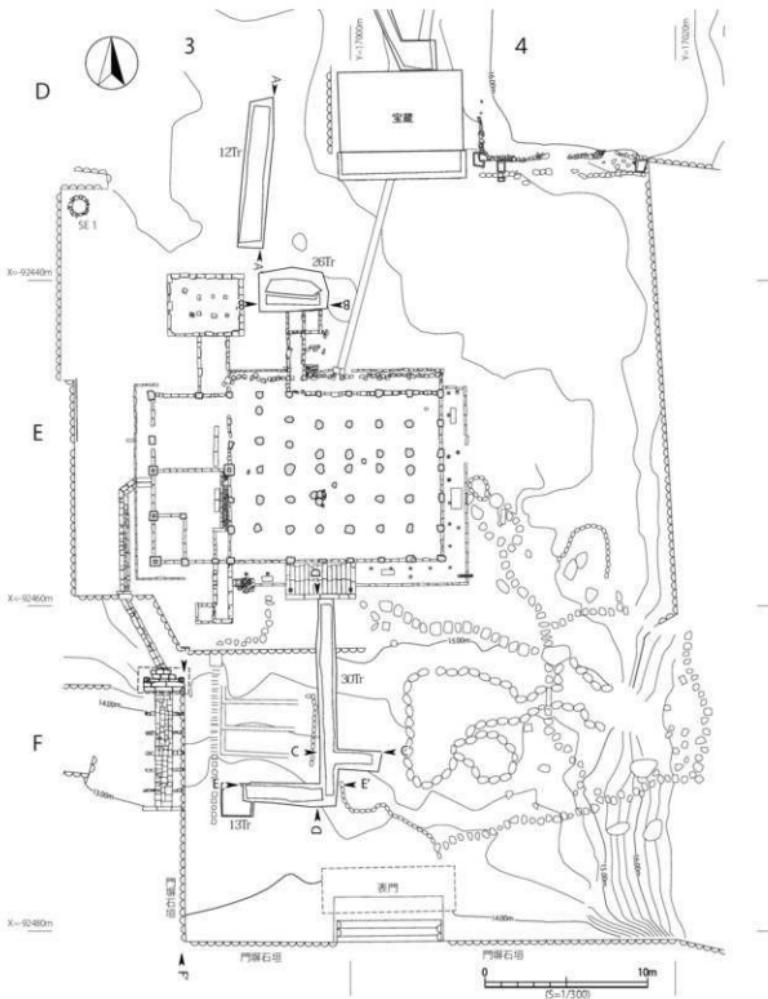


第49図 北ブロック出土遺物(5)

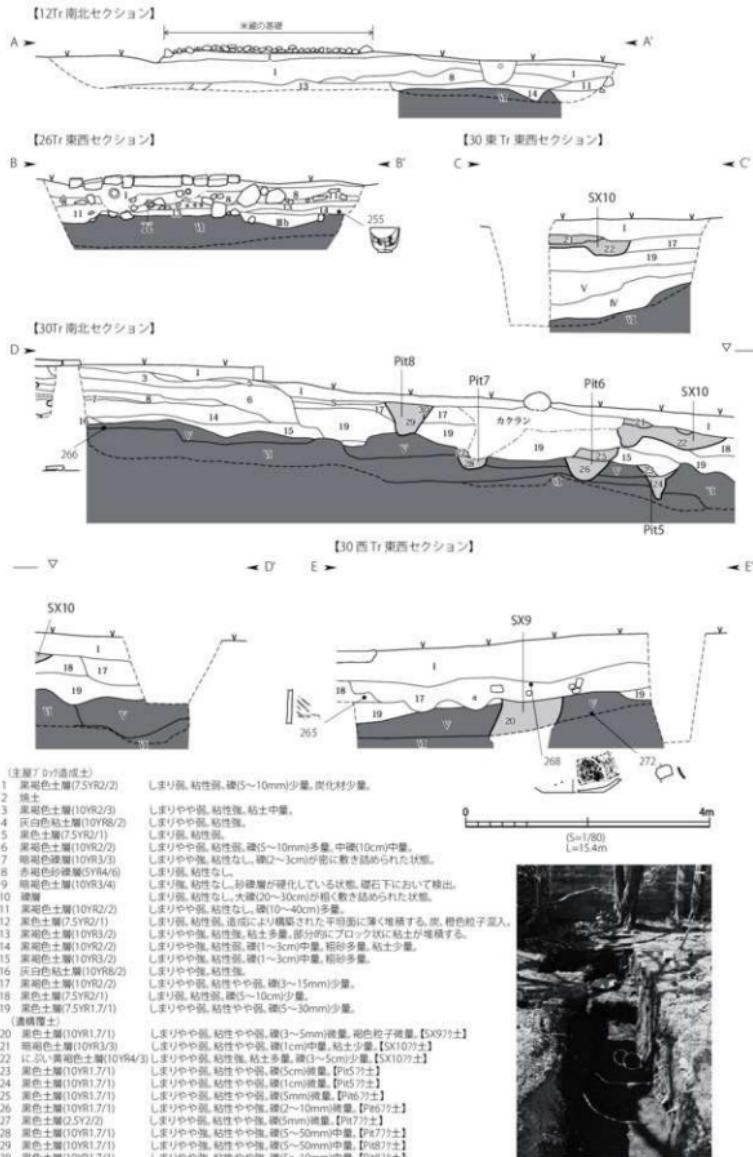
第6節 主屋ブロック

主屋ブロックとしたのは、調査時に主屋が存在した箇所を中心とした範囲である。主屋は平成24年に解体されたものの事前の調査により明治10年頃に建てられた

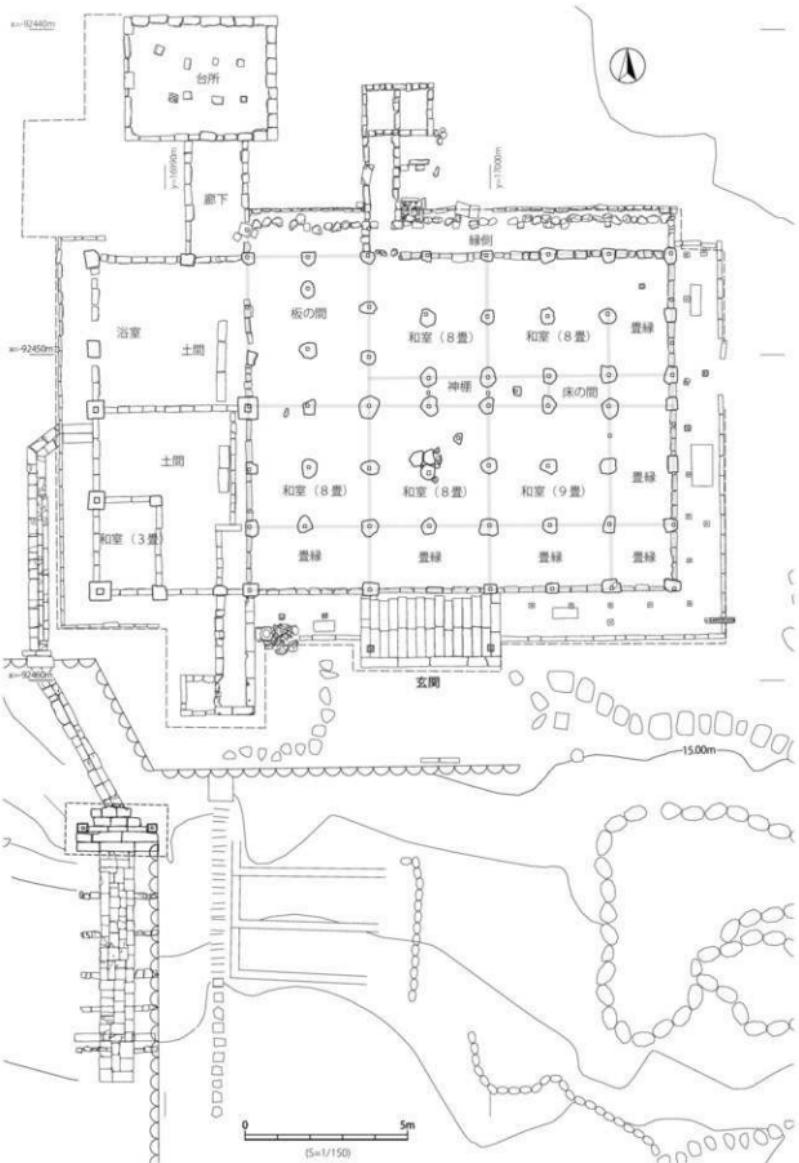
ことが分かっている。しかし、その部材には、再利用の痕跡などが確認されたため、同じ場所における建て替えなども考慮し、発掘調査を行うことになった。



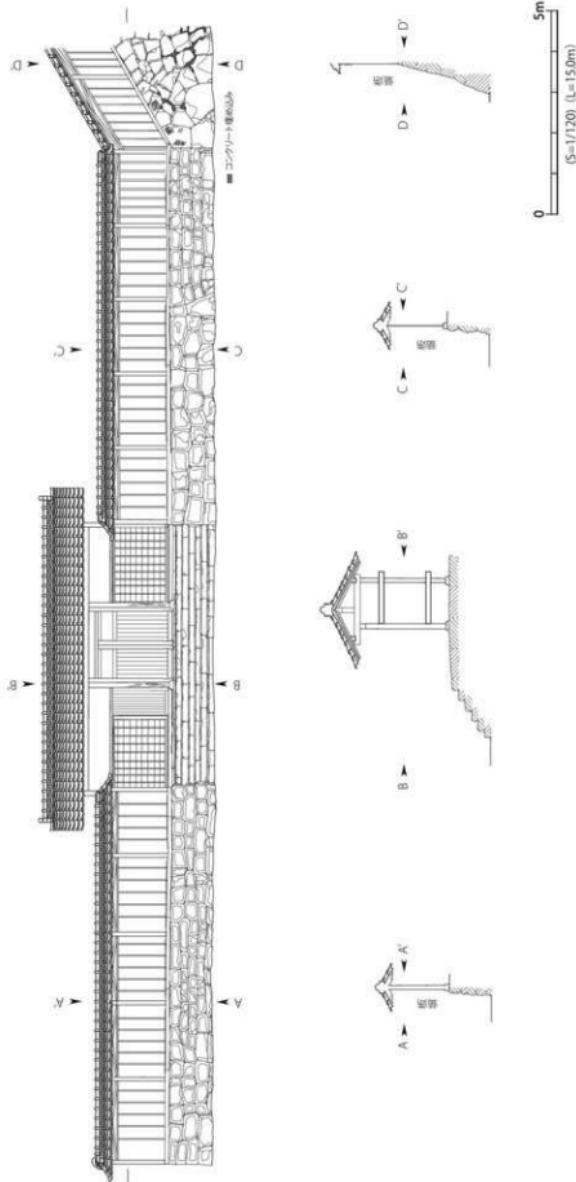
第50図 主屋ブロック トレンチ配置図



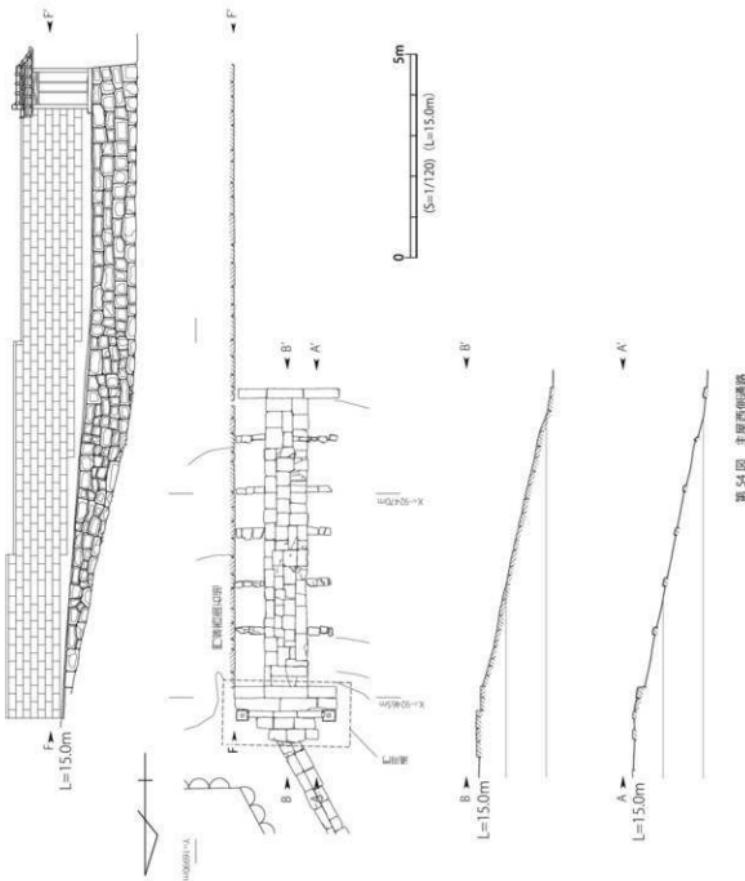
第51図 主層ブロック トレンチセクション図



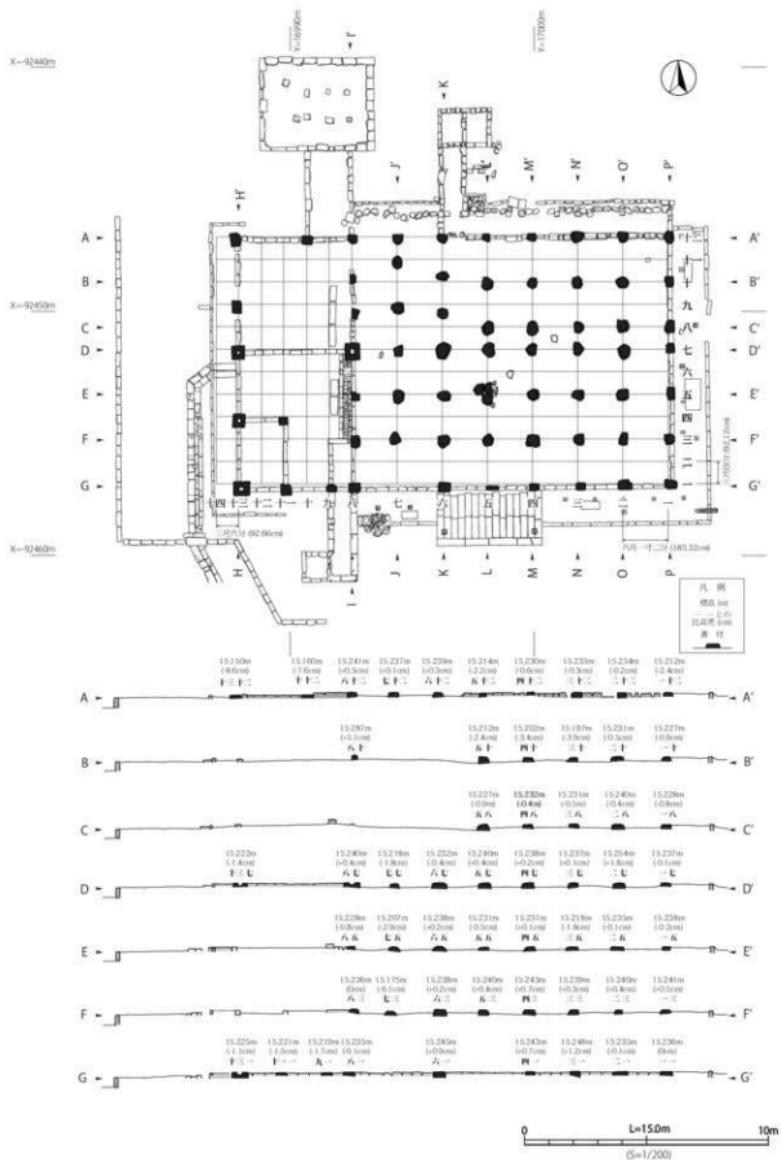
第52図 主屋礎石



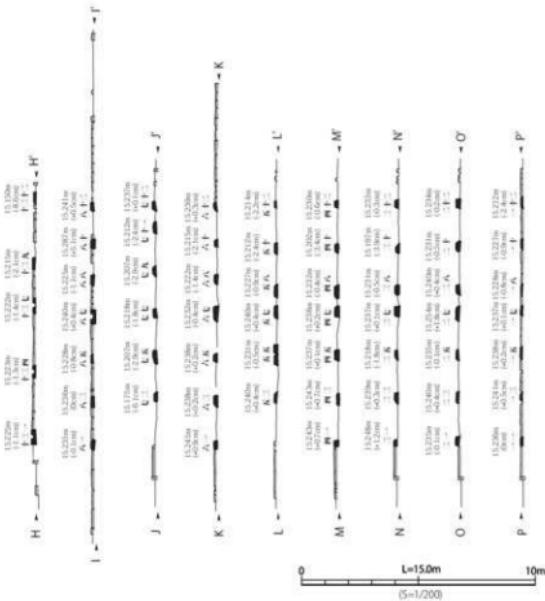
第53図 主屋板橋



第54图 主屋西侧墙



第55図 主屋 磯石エレベーション(1)



第56図 主屋 確石エレベーション（2）

六所家所蔵の文書より、以下の4時期の主屋の存在が

明らかくなっている。

寛政2年（1790）主屋焼失

建物① 通称「寛政2年建物」

寛政9年（1797）主屋再建

建物② 通称「寛政9年建物」

文久2年（1862）主屋新築？

建物③ 通称「文久建物」

明治10年（1877）主屋新改築

建物④ 通称「現主屋」

当然、寛政2年より遡る建物は存在したと考えられるが、建築時期が明確でない。以下、記述の煩雑さを避けるために通称を用いていくこととする。なお、平成25年度に現主屋の地下を平面的に発掘調査しており、詳細な報告は、そちらに譲ることとしたい。

主屋

現主屋を解体した後、掘削前に礎石などの図面作成・写真撮影を行った。詳細は「建造物編」に譲るが、建物は東西南北軸に合う形で建築されており、建物の南東隅の番付を「一一」としていることが明らかくなっている。南東隅を基準として南北 92.12cm（三尺四分）、東西 185.32cm（六尺一寸二分）の規格で設計されているが、大黒柱「八七」を境に土間部分と高床部分でその基準が崩れているようである。

トレチ調査

地下の状況を確認するために「五七」を中心に東西南北方向に十字のトレチを設定した。掘削の結果、表土直下に人頭大の溶岩礫のみで構成された層（仮称「大疊層」）が存在し、それを撤去すると、黒色土が検出された。疊と疊の間に土が入り込んだような「大疊層」と異なり、検出された黒色土は疊をまったく含んでいないため、疊を外すことで容易に検出された。しかし、黒色土

は非常に薄く、削りすぎるとすぐに溶岩の地山が露出してしまう。ただし、建物南側では、北側において黒色土・地山を検出したレベルまで掘削したにもかかわらず、黒色土は検出されなかった。これは、南側に向かって地山が傾斜しているためで、建物建築のための盛土工事を行い、水平面確保が図られている為である。

十字のトレーナーが交差する付近において、前述の黒色土中より遺物がまとまって出土したためトレーナーを一部抜張して掘削した。なお、「大礫層」の平面的な記録はこの部分においてのみ行った。陶器・金属製品・瓦などの遺物がまとまって出土したのは、X=92451m、Y=16997m付近である。また、大礫層下に入骨片が出でたが、これは周囲から礫を運び入れる際に偶然混入したものと考えられる。

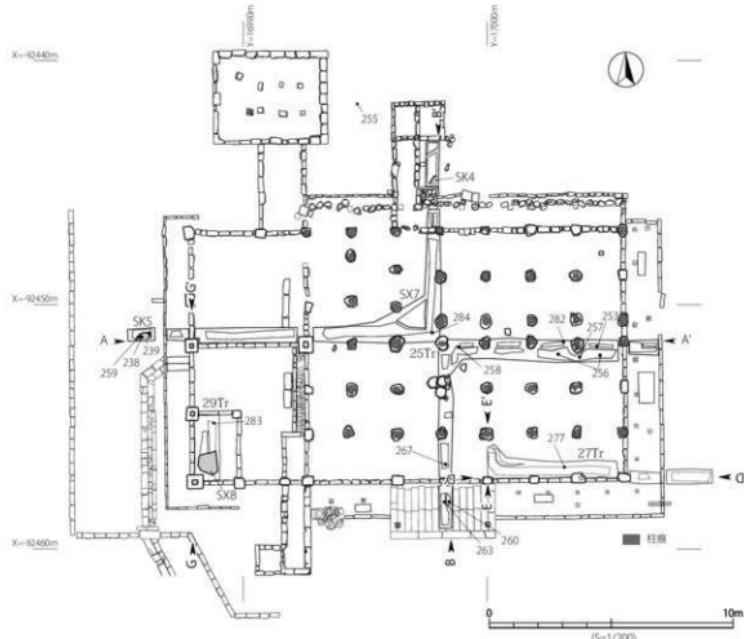
「大礫層」は、旧地形をかさ上げし、現主屋レベルにするための造作と考えられる。その造成時期については、黒色土中から、19世紀後半以降の明確な遺物が出土していないことから文久建物の際ではなかったかと考えて

いる。文久建物は現主屋と比べると東側に1.5倍ほど広がっていたことが絵図の合成から明らかとなっている。大黒柱西側の礫石隙穴（十三七、一三四、一三一）が別の石材（伊豆石）によって埋められていたことなどから、おそらく現主屋に改築する際（明治10年頃）に、建物西側土間部分の礫石などは文久建物のそれを再利用したのではないかと考えられる。民俗学的な見地からも同様の指摘がなされている（松田2010・2013）。それ以前の建物については、平成24年度の調査では明らかとならなかった。

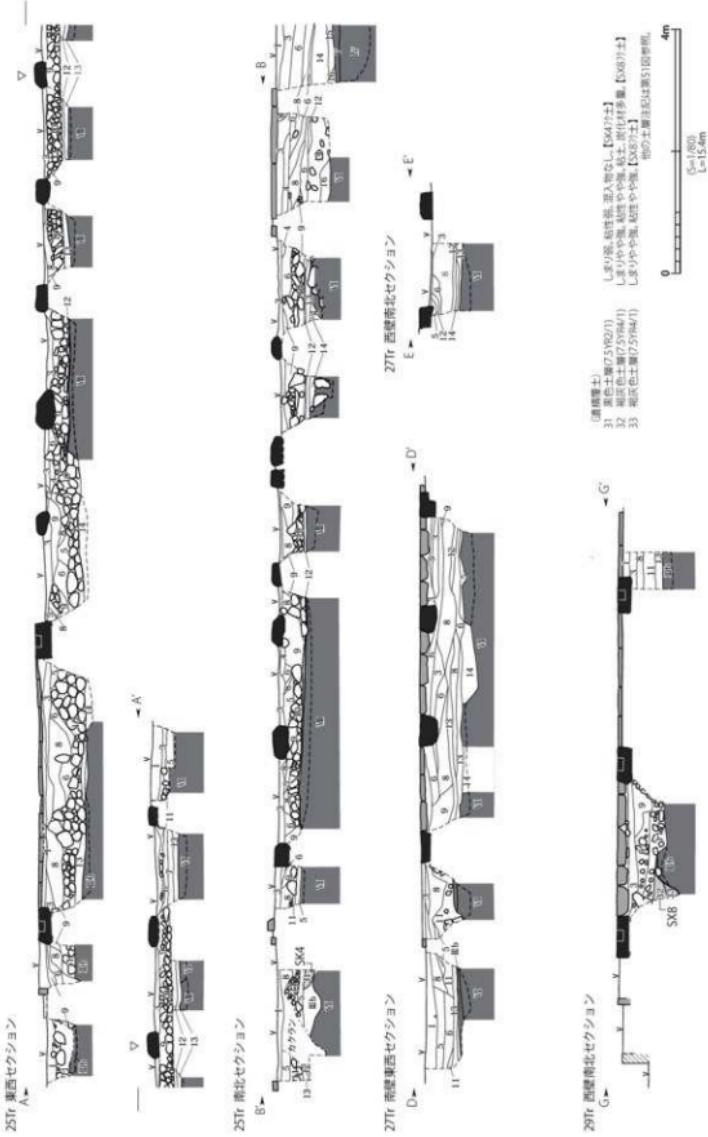
現存する正面の門は、現主屋と一直線上には存在しない。これは、門の位置が文久建物の頃と大きく変わっていない一方で、文久建物を現主屋に改築する際に、建物の西側を基準として狭まっているためである。文久建物の頃には、建物の玄関と門は一直線上に存在したものと考えられる。

主屋南側

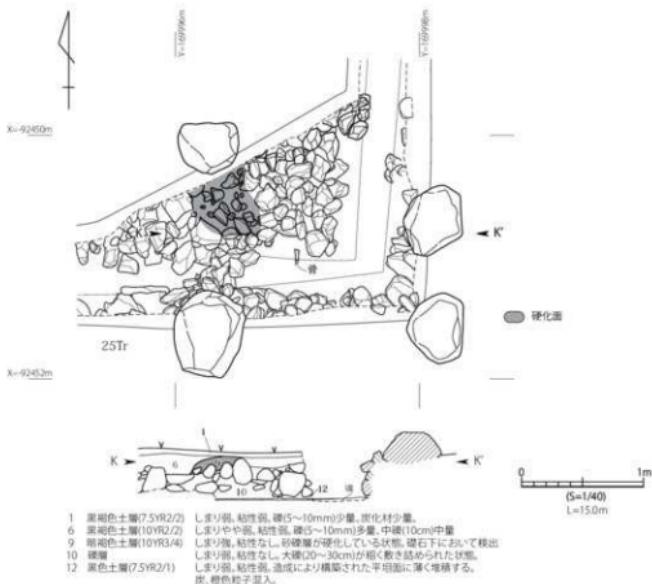
主屋の南側に南北方向のトレーナーを設定し、掘削を



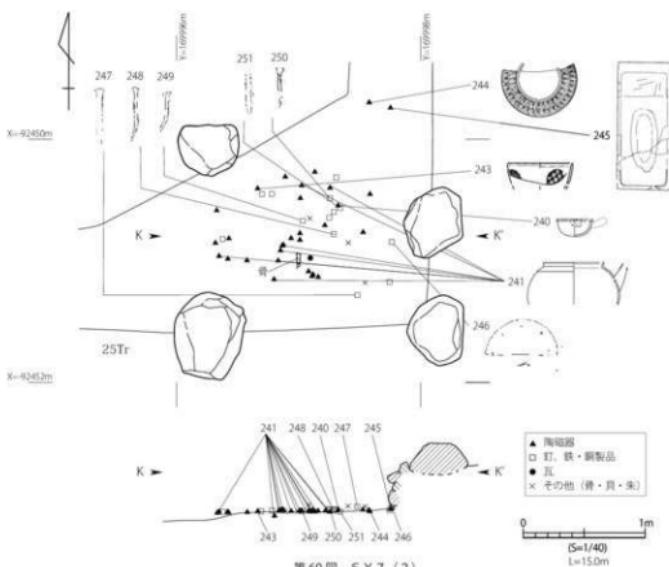
第57図 主屋 トレーナー配図



第58図 主屋 トレンチセクション図



第59図 S X 7 (1)



第60図 S X 7 (2)



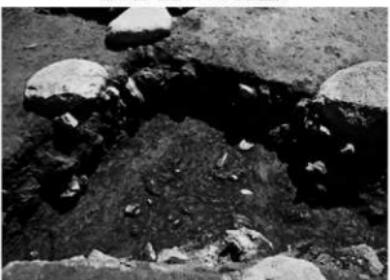
第61図 主屋トレンチ疊層検出



第62図 主屋トレンチ疊層截割り



第63図 S X 7 上層疊



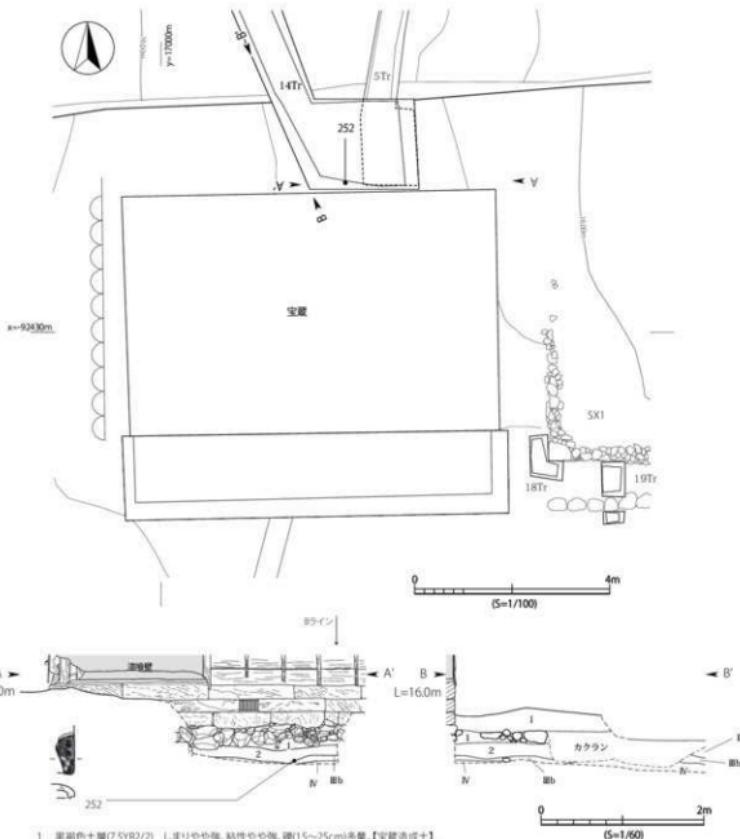
第64図 S X 7



第65図 S X 7 (244・245出土状況)



第66図 25Tr (258出土状況)



第67図 宝蔵



第68図 宝蔵 南東から



第69図 宝蔵基礎

行った。その結果、水平面確保を目的とした造成の痕跡が確認された。造成盛土中からは、15～16世紀の遺物が比較的多く出土しており、北側ブロックと共に特徴を示している。

宝蔵

安政元年（1854）の大地震によって倒壊したものと考えられ、現存する宝蔵の棟札には「安政4年」（1854）再建とある。基礎構造を明らかにすることを目的に平成19年に5Tr、平成21年14Trを建物北側に設定し掘削を行った。基礎には、直方体に加工された伊豆石を三段使用している。その下部には、栗石を含む平らな石を使用して安定を図っている。それらの栗石を外側から被覆するように細かな石が存在する。その石の下層から陶磁器片252が出土しているが19世紀中葉以降と考えられるため、再建後の混入であろう。そのため、基礎の栗石などを被覆していた造作は、再建当時のものではなかったものと推測される。

S E 1

D3グリッドに存在する直径約0.8mを測る円形石組みの井戸である。深さは10m近くあるが、使用時はさらに深かった可能性もある。当初、その石材の積み方から明治・大正時代以降のものと考えていたが、地表下3.4mより下部は、石の積み方、石材が異なり、切り石（伊豆石？）を六角形にきれいに積み上げていることが確認された。そのため、構築時期は江戸時代まではさかのぼり、明治・大正時代以降に、上部のみが改修されたものと推定され、S E 1が「文久絵図」に描かかれている井戸と判断される。文化3年（1806）から同8年（1811）東泉院第18代住持慈範が井戸積のために伊豆石7両分を調達したことが知られており、S E 1がその井戸を示している可能性もある。

出土遺物

240～251は現主屋中央部、礎層の下の黒色土から出土した遺物である。比較的まとまって出土したことからSX7とした。243のように1780～1800年の製作と考えられるものがある一方で、その他は19世紀中葉頃のものが多い。

一方、主屋南側では、厚い造成土中より原始から中世の遺物が認められた。

272は弥生時代後期の壺、260・261は平安時代の

遺物である。特に注目されるのは、263・264・268の15～16世紀の遺物で、268は15世紀の鉢口付大皿である。北ブロックや北東ブロックでも当該期の遺物が比較的多く出土しており、盛土を主体とした造成土中に15世紀の遺物が混入するケースが多い。そのほか、19世紀後半の肥前の碗（254）も注目される。

主屋ブロックまとめ

平成24年までの調査の結果、文久建物は現主屋と同一レベルに存在した可能性が指摘された。このことは、ほぼ現地面に認められる痕跡のみが文久年間以前であることを示している。文久建物を建てる際に多量の礎を使用して周囲よりも一段高く土地を造成する行為は、将軍家茂が東泉院に宿泊するための工事とも考えられる。また、前述の礎層の一部をトレント調査で断ち割った結果、下層より比較的まとまって遺物が出土したことから、文久年間以前の遺構・遺物が平面的に残存している可能性を残した。

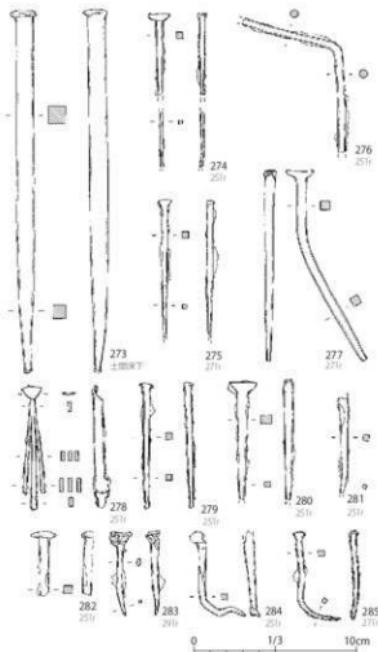
また、繰り返しになるが、北ブロック同様、15～16世紀の遺物が主屋南側の造成土中から出土したことは、中世における東泉院の活動の一端を示している可能性もある。

参考文献

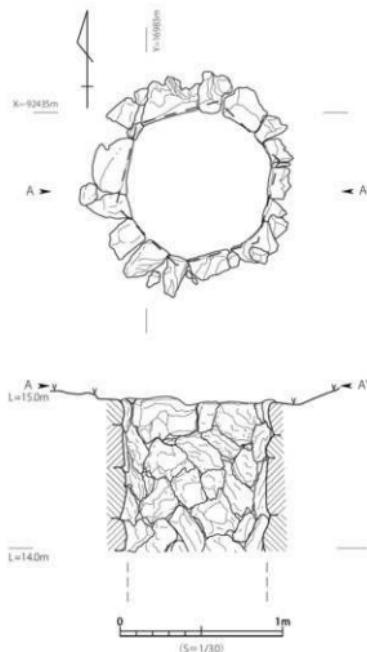
- 井上卓哉 2009「六所家旧蔵棟札類の概要」「富士市立博物館報 平成20年度」
- 大高康正 2009「將軍德川家茂の上洛と東泉院」「六所家総合調査だより」第5号
- 大高康正 2012「富士山東泉院と六所家旧蔵資料の概要」「六所家総合調査だより」第10号
- 菊池邦彦 2012「富士山東泉院を訪れた人々」「六所家総合調査だより」第11号
- 佐藤祐樹 2009「六所家埋蔵文化財発掘調査の中間報告」「六所家総合調査だより」第4号
- 佐藤祐樹 2013「近世陶磁器からみた東泉院の活動」「六所家総合調査だより」第12号
- 杉山一弥 2008「絵図にみる東泉院境内堂舎の変遷」「六所家総合調査だより」第3号
- 建部恭宣 2009「東泉院の棟札類と建築生産活動」「六所家総合調査だより」第4号
- 富士市教育委員会 2013「六所家総合調査報告書 民俗」
- 松田香代子 2010「六所家主屋に残された御室屋」「六所家総合調査だより」第7号



第70図 主屋ブロック 出土遺物（1）



第71図 主屋ブロック 出土遺物（2）



第72図 SE 1



第73図 SE 1 南から



第74図 切り石積みが確認されるSE 1

第4章 総括

第1節 六所家敷地内SE2出土陶磁器の様相

はじめに

六所家は、富士市今泉八丁目に位置し、明治初年まで東泉院という中世から続く寺院を経営していた。平成19年度から開始された六所家総合調査の一環として、試掘・確認調査が行われた（渡井2007、佐藤2009）。

SE2は、平成20年度の調査により、敷地の北西部から確認された井戸跡である。同遺構からは近世後期の陶磁器を中心とした遺物群が出土している。本稿では、SE2から出土した遺物群について、一括資料として当該地における消費・流通などの問題に言及及得るものであると考え、分析を加えるものである。

ここで行う分析は出土遺物全点を対象にし、これらを器種・生産地別に分類し、以降の分析の基礎データとする（第3表）。

1. 年代的位置づけ

SE2から出土した遺物は、総点数273点を数え、年代的には17世紀後半から近代にいたる資料が含まれており、その年代幅は広い。このうち混入と考えられる遺物を除くと、以下で触れるようにおむね江戸時代、18世紀後半を中心とした製品で構成されている。

これまでの江戸遺跡の編年では、磁器碗・皿の存否とその組み合わせ年代の判断を行っており（堀内1997、堀内2001）、ここでも年代的判断基準となる各磁器製品（第75図）の内容から検討を行いたい。

SE2出土遺物群は、肥前磁器断面三角の高台皿、同粗製のいわゆるくらわんか碗、同薄手半球碗、同青磁染付製品、同筒形碗、同小丸碗、同望料碗、同立ち上がりが浅い皿などで構成されている。

断面三角高台（158、160）は、長吉谷窯、白川窯、柿右衛門B窯、楠木谷窯など1650年代～70年代に操業していた窯の製品に特徴的な高台作りで、初期伊万里の幅広U字状の高台から変化するものである。江戸遺跡では、1650年代～1670年代くらいまで（東大678号段階～東大H32-5段階）に多く確認される。

粗製のくらわんか碗（128、135、136、139）は、永尾窯、中尾窯、高尾窯など長崎県波佐見地方で多く生産されている製品で、江戸遺跡では1710年代（東大F33-3段階）ころから確認される。代表的な製品は、染付梅樹文（135）で、これは1770年代頃（東大Y34-4段階）まで見られ、こんにゃく目判が施される製品（128、139）は、1810年代ころ（東大AJ35-1段階）まで確認できる。

薄手半球碗（130～133、137、138）は、体部が薄手で上質な製品である。江戸遺跡では17世紀末ころ（渠鶴1段階）から江戸時代を通じて確認されるが、量的に多いのは18世紀前半～中葉（東大F33-3段階～麹町SK317段階）である。

青磁染付製品（118、119）は、江戸遺跡では17世紀末頃から香炉、猪口などに認められるが、この段階では蛇目目凹形高台との相關性が高く、明代の龍泉窯青磁の影響が看取される。碗、皿などの一般的な器種に多く施されるようになるのは、18世紀中葉以降である。肥前では有田町広瀬向窯から大量に出土しており、広瀬窯はこの手の製品の主たる生産窯であると考えている。江戸遺跡では、1750年代～1780年代（麹町SK317段階～東大Y34-4段階）に多く確認される。

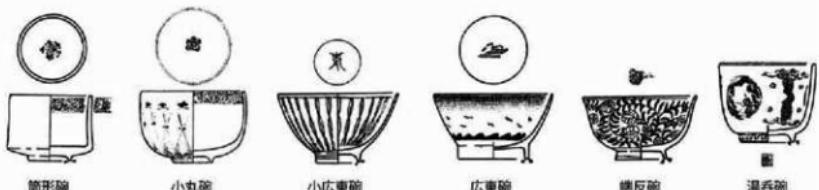
小丸碗（134）、筒形碗（148～150）は、有田町広瀬向窯、波佐見町皿山窯、永尾窯など多くの窯で生産されている製品で、消費遺跡でも一般に確認できる。江戸遺跡では、1750年代（麹町SK317段階）から確認できるが、多く確認されるのは1780年代～1810年代（東大E8-5段階～東大AJ35-1段階）である。

望料碗は、高台が開き腰が張る特徴的な蓋付き碗である。152は蓋であるが、その器形も身と同様描みがやや広がり、肩が張っている。

立ち上がりが浅い皿（156）は、江戸遺跡ではおむね1780年代～1810年代（東大E8-5段階～東大AJ35-1段階）に多く確認される。

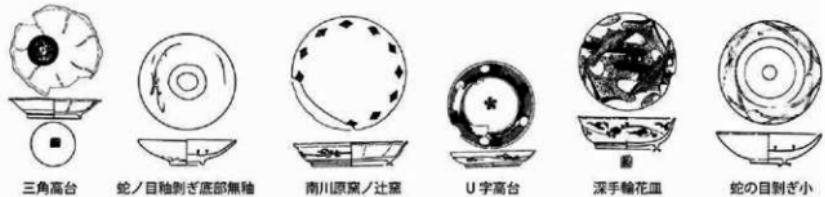
また、1780年代から確認される広東碗、19世紀か

○碗



木型打込

○皿



第75図 年代判断のメルクマールになる小器種

第2表 各段階におけるメルクマールとなる器種・技法とその推定年代

	メルクマールとなる器種・技法	推定年代
丸の内 52	輸入磁器	1610～20年代
有楽町 S22	初期伊万里碗・皿	1620～30年代
東大 532	底部無釉碗	1640年代
東大 678	三角高台碗・皿	1650～60年代
東大 H32-5	桔右衛門様式	1670年代
東大 F34-11	U字状高台(大)碗	1670後半～80年代
巣鴨 1	U字状高台(小)碗、薄手半球碗	1690～1700年代
東大 F33-3	梅樹文碗	1710～30年代
真砂 109	蛇ノ目圓形高台(低)皿	1730～40年代
麹町 SK317	筒形碗、小丸瓶。(青磁染付)	1750～60年代
東大 Y34-4	小広東碗	1770年代
東大 E8-5	広東碗	1780～90年代
東大 AJ35-1	端反碗	1800～10年代
東大 SK81	湯呑碗、蛇ノ目圓形高台(高)皿	1820～30年代
巣鴨 16	幅広高台碗、型皿	1840～50年代
松方町 596	本型打込皿	1860年代

ら確認される瀬戸・美濃の磁器製品が含まれていないこと

とからSE2の一括資料の下限は、1780年代ころであると推定できる。

これとは別に出土資料の多くに二次的な被熱が確認でき、火災による廃棄の可能性が高いことが取扱できる。調査を担当した佐藤祐樹氏は、寛政2年(1790)に描かれた東泉院絵図に「客殿焼失当時無御座候」、「唐破風当時仮建」との建部恭宣氏の指摘(建部2009)から「寛政2年頃にあった東泉院主屋での火災とその片付けに伴う遺物である可能性」を指摘している(佐藤2013)。

2. 器種組成

出土資料は、総点数で273点と組成分析を加えるには若干量的に少ないが、いくつか特徴的な器種が含まれており、遺跡の性格を反映していると考えられる。

まず、出土している器種は、碗、皿、鉢、蓋もの、水滴、灯明皿、环、壺、甕、花生け、土瓶、擂鉢、片口鉢、紅皿、鍋、徳利、水注、ほうろく、かわらけ、壇堀、七輪などである。これらは日常生活用品がひととおり揃っているように考えられるが、遺跡の性格と関連が強く想定できる香炉、御神酒徳利、仏飯器、仏花器などが皆無である。これらからSE2に廃棄された遺物は、信仰の場とは異なる場所で保管・使用されていた道具類であった可能性が高い。

次に、いくつか確認されている特徴的な器種に触れたい。163～165は、焼塩壺の蓋である。いずれも身の成形が板作りの成形のものに伴う蓋で、小川望氏の研究では、イ類④に分類されるものである(小川2008)。形態、

第3表 SE2出土陶磁器組成

位置	生産地	器種	器物名	個体数	
磁器	肥前 瓦	くらわんか		31	
		青磁染付		1	
		半球碗		35	
		筒形		4	
		その他		3	
		不明		19	
		破小片		105	
		蛇ノ目圓形高台		5	
		その他		7	
		皿小片		12	
陶器	瀬戸美濃 沪	蓋もの		3	
		人形		1	
		その他		5	
		肥前計		126	
		瀬戸美濃		鉢	2
		肥前		鉢	126
		瀬戸美濃		小片合計	126
		肥前		平壠(京燒風)	41
		肥前		高麗手	2
		肥前		その他	1
瀬戸	肥前 沪	肥前小片		11	
		皿		1	
		鉢		1	
		片口鉢		14	
		灯明皿		8	
		水滴		1	
		环		3	
		壺		3	
		蓋もの		13	
		その他		55	
志戸	志戸	志戸美濃小片		2	
		灯明皿		1	
		蓋もの		5	
		発		3	
		徳利		1	
		壺		1	
		蓋もの		7	
		その他		30	
		京・備楽		京・備楽	11
		壺		1	
常滑	常滑	壺		4	
		土瓶		5	
		蓋もの		2	
		その他		2	
		壺		1	
		壺		1	
		壺		1	
		壺		1	
		壺		1	
		壺		1	
京・常滑	京・常滑	京・常滑小片		107	
		壺		22	
		かわらけ		7	
		壺		1	
		七輪		3	
		壺		4	
		不明		1	
		壺		36	
		壺		5	
		壺		2	
土器	土器	土器合計		273	

胎土などからおそらく「泉州麻生」刻印がされる身とセットになる蓋であると判断される。「泉州麻生」刻印の塗籠は、1680年代～1730年代に多く確認されるものである。焼塙は、粗塙を底ごと焼いた精製塙で、宴会などの調味料として使われていた。焼塙は、小川川氏の研究では江戸遺跡で総出土数の3/4が出土、そのうち大名屋敷を含む武家地が8割を超えており、焼塙が江戸の武家地で高い需要があり、江戸の武家儀礼に伴って使用されたと考えられる。

120は、中国景德鎮窯青花碗である。二次的な被熱によって同手の製品同士が溶着している。器面には花唐草文が描かれており、1690年代にベトナムブンタオ沖で沈没した中国のジャンク船ブンタオ・カーゴと1723～35年にベトナムカマウ沖で沈没した中国ジャンク船カマウに類例が確認できる（第76図）。また、江戸遺跡では共伴資料から17世紀末の廃棄と推定される渋谷区千駄ヶ谷三丁目遺跡0053号遺構から出土している。17世紀後半から18世紀前半は、磁器は国内では肥前製品が必要を充足しており、当該期に貿易陶器が出土した例は、長崎（海外貿易拠点）、大坂道修町（薬種仲買問屋）、大坂住友御吹所（輸出用棹銅精錬）、江戸千駄ヶ谷三丁目遺跡（長崎奉行拝領地）など中国に繋がりがある場に限定される。

123は京焼と推定される平碗が少なくとも3個体分出土している。透明釉と鉄釉が掛け分けられており、透明釉部分には鉄絵で草花文が描かれている。器厚はやや厚めで、釉も厚く掛けられているが、成形や絵付けなども雑ではない。器形は、皿に形状が近い平碗で、絵付けの方法から18世紀の中葉以降の製品と推定される。こうしたタイプの製品は頻出的ではなく、器形のみならず成形、施釉なども一般的ではない。

量的に多い器種は、肥前京焼風陶器平碗である。肥前京焼風陶器は、伊万里大川内の御経石窯、清源窯などで生産された、「清水」などの刻印を京焼に類似した成形、装飾に施した製品である。外側に文様を描く丸碗、内側に文様を描く平碗が生産の主体で、他に筒形碗、香炉、鉢などがあり、描かれる文様は山水文が多い。出土事例から全国に流通したヒット商品であったと換言できるが、出土の中心は17世紀末～18世紀前葉である。本例は文様や中央を深く繰り込んだ形態から18世紀中葉以降に下る製品と判断される。一方、京焼の平碗は、京

都御所などには18世紀に入ても量的に多く出土している（京都市埋蔵文化財研究所2004）が、他遺跡では18世紀に入ると半球形、半筒形の碗形が主体的になる。江戸遺跡でも18世紀中葉以降に下って平碗の京焼風陶器が出土する遺跡は、尾張藩邸など特に陶器に需要のある場であろうと考えている。SE2からの出土は123の京焼平碗が意識されていた可能性も考えられる。

3. 產地組成

生産地は、中国景德鎮、肥前、瀬戸・美濃、志戸呂、堺、備前、常滑、今戸、京都・信楽である。遺跡の位置からは志戸呂の製品が少ないよう見られる。延宝8年（1680）の津波によって宿が移転した地理的に近い中吉原遺跡では、底部片数82点中6点、口縁部片数115点中8点と1割弱出土しており、出土している器種も碗、瓶、香炉、擂鉢と江戸で出土しない器種が確認されているのに対し、SE2では灯明皿が1点と点数が少ない。静岡県では西部地域に分布の中心があり、掛川市原川遺跡、掛川市清水遺跡（日坂宿）、駿府城二の丸などは20%以上の割合を占めている。

また、江戸在地系のほうろく（177）やかわらけ（161）などが出土している点も注目される。江戸在地系土器は、東海道を上って小田原城下町などにはある程度出土するが、静岡県東部では比較的出土量が多い三島市山中城三ノ丸遺跡第1地点（三島市教育委員会1995）、同接待茶屋遺跡（三島市教育委員会1996）、函南町仲道



第76図 ブンタオ・カーゴ積載品

遺跡（函南町教育委員会 1993）などではほぼ認められない。それに対して、山梨県鍛沢河岸跡（山梨県教育委員会 2005 など）、甲府城下町遺跡（山梨県教育委員会 2004 など）では火鉢、遊具（芥子面）などの出土が一定量確認されている。甲府は柳沢家が大和に転封になった享保 9（1724）年以降に勤番支配になるが、江戸から派遣される勤番によって、「汲々として江戸風味に及ぼざるを憂う」（『裏見寒話』）と記されるように都市江戸の影響を強く受けたと考えている。こうした違いは生活様相の相違とは別に流通ルートの違いの可能性もあると想定されることから、断定はできないものの产地組成の状況はこれまで指摘したような特徴が看取されている。このあたりは年代的なことも含めて、陶磁器流通の復元は周辺遺跡の資料の増加を待ちたい。

小結

これまで六所家敷地内 SE2 出土資料の出土状況についてその概略と他遺跡との対比などに触れたが、さいごに六所家の歴史的環境と照射を試みたい。六所家が権門との関係が少なからずあったことが史料によって判っている。以下、概述する。

東泉院は酢が名物で、『和漢三才図会』はじめ種々の史料から「善徳寺酢」として名産であったことが知られている（大高 2011）。その由緒は中世にさかのぼり、将軍家への献上や大名など上級武家に販売を行っていたことが記録されている。

六所家は、江戸期を通じて伊勢津藩藤堂家、美濃高須藩松平家、対馬藩宗家、長門長府藩利家、美濃大垣藩戸田家をはじめとする大名家や山科少将、飛鳥井中納言など公家が庭を「御見物」しに頻繁に立ち寄り、東泉院が接應していたことが史料から知られている（菊池 2012）。その際に幾許かの謝礼が行なわれたことも記載されている。このうち寛延 2 年（1749）には肥前平戸藩主松浦信誠から詳細は書かれていないが 5 個の茶碗が心付けに贈られていることが確認でき、陶磁器が寸志謝礼として取引されていたこともあった。

また、文久 3 年（1863）には將軍徳川家茂上洛の際東泉院に宿泊したことが『昭徳院殿御上洛日次記』によって判っており、東泉院が將軍の宿所に選択された理由を「由緒と格式が認められた」と指摘している（大高 2009）。

今回分析の対象とした出土資料が、いくつかの点でそのような場の性格を反映している可能性が高いので、再確認したい。まず、日本ではほとんど出土事例がない時期に景德鎮の碗が出土していることである。おそらく通常の商業ルートでこれを入手することは、できなかつたと考えられることから、將軍家への祈禱や御礼、あるいは大名や公家が立ち寄った際の饗応などの対価として贈与されたこととも考えられる。これは可能性の示すにとどまるが、平戸藩主松浦家が贈った 5 個の碗は具体的な記載は無いものの、景德鎮の碗あるいは先述した京焼であった可能性も否定的ない。また、焼塙の出土は、立ち寄った大名や公家接應に使用したと推定できるものであろう。

今回の分析では対象とした資料が量的に少なかったことで、明瞭なモデルの示すにはいたらなかったが、東泉院の歴史的経緯と連動するいくつかの資料が確認できたと考えている。本資料は、前述のように 18 世紀後半を中心とした時期であり、その後の將軍接應などに関する情報は欠落している。今後、調査の進行あるいは民俗資料などとの対比によってこのあたりの復元をする必要がある（註 1）。

註

1. 民俗資料の中には、嘉永 6 年（1853）の共箱に入ったヨーロッパ製プリントウエア皿なども伝来している（下図）。



第77図 嘉永 6 年の共箱に入ったヨーロッパ製プリントウエア皿

参考・引用文献

- 有田町史編纂委員会 1988『有田町史 吉窯編』
- 有田町教育委員会 2009『広瀬向窓跡』
- 大高康正 2009「將軍徳川家茂の上洛と東泉院」『六所家総合調査だより』第5号
- 大高康正 2011「善徳寺跡に関する一考察」『六所家総合調査だより』第9号
- 小川 望 2008『燒塙壺と近世の考古学』同成社
- 函南町教育委員会 1993『仲道道路孤塚地点』
- 菊池邦彦 2012『富士山東泉院を訪れた人々』『六所家総合調査だより』第11号
- 京都市埋蔵文化財研究所 2004『平安京左京北辺四坊』
- 佐藤祐樹 2009「六所家埋蔵文化財発掘調査の中間報告」『六所家総合調査だより』第4号
- 佐藤祐樹 2013「近世陶磁器からみた東泉院の活動」『六所家総合調査だより』第12号
- 建部恭宣 2009「東泉院の棟札類と建築生産活動」『六所家総合調査だより』第4号
- 富士市教育委員会 2002『中古原宿遺跡』
- 富士市教育委員会 2013『六所家総合調査報告書 民俗』
- 船内秀樹 1997「東京大学本郷構内の遺跡における年代的考察」『東京大学本郷構内遺跡調査研究年報』1
- 船内秀樹 2001「関東地方（1）－江戸遺跡出土の肥前陶磁－」『第11回九州近世陶磁学会 国内 出土の肥前陶磁 東日本の流通をさぐる』
- 三島市教育委員会 1995「静岡県三島市山中城三ノ丸遺跡第1地図』
- 三島市教育委員会 1996「静岡県三島市接待茶屋遺跡』
- 山梨県教育委員会 2005『麻沢河岸跡』II
- 山梨県教育委員会 2004『甲府城下町遺跡』
- 渡井義彦 2007「六所家総合調査について」『六所家総合調査だより』第1号
- Christiaan J.A.Jorg Michael Flecker『PORCELIN from the VUNG TAU WRECK』ORIENTAL ART Singapore

第2節 埋蔵文化財からみた空間構成と調査成果の統合化

最後に周知の埋蔵文化財包蔵地「善得寺跡・東泉院跡」における遺構の変遷について整理していくこととする。特に江戸時代後期における堂舎の配置を絵図との対比から復元し、さらに、東泉院歴代住持の事跡と埋蔵文化財調査成果との対比を行いたい。

原始・古代

「舟久保遺跡」に接していることもあり、弥生時代後期の遺物が1点認められる(272)。また、平安時代の遺物(260)も同様の位置づけができる。平成25年度に行った日吉浅間神社東側の確認調査(今泉八丁目1445番1)でも、平安時代と考えられる堅穴建物跡が検出されており、六所家敷地内における当該期の遺構は、中世以降の土地改変、言い換れば東泉院の活動により削平されたものと考えられる。

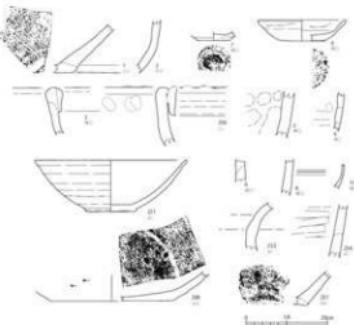
中世

13世紀の常滑窯の痕跡が複数出土しているが、出土遺物のまとまりが見えるのは15世紀に入ってからである。特に北東ブロックのSD1出土の1、2や北側ブロックの218、237、主屋ブロックの264、268である。まとまりがあるといってもこの程度であるが、近世以降の大規模な土地改変の存在を考えれば、一定量の出土と

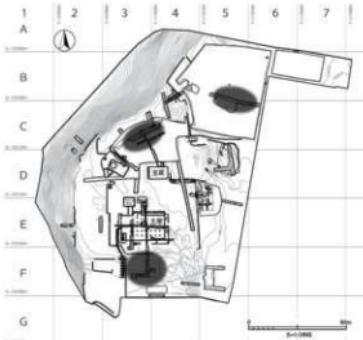


第78図隣接地で見つかった古代建物跡

評価したい。この時期の掘り込みをもつ明確な遺構は確認できなかったが、これらの遺物が主屋北側や南側において水平面確保のための造成土中から出土していることは重要である。しかし、造成土中から15世紀の遺物が出土するということは、それ以前に造成が行われたことを示しているに過ぎない。一方で、造成土中から近世の遺物が認められないことも事実であり、前述の土地造成が東泉院の活動を直接示している可能性がある。



第79図 出土した中世の遺物



第80図 中世遺物の出土範囲

近世

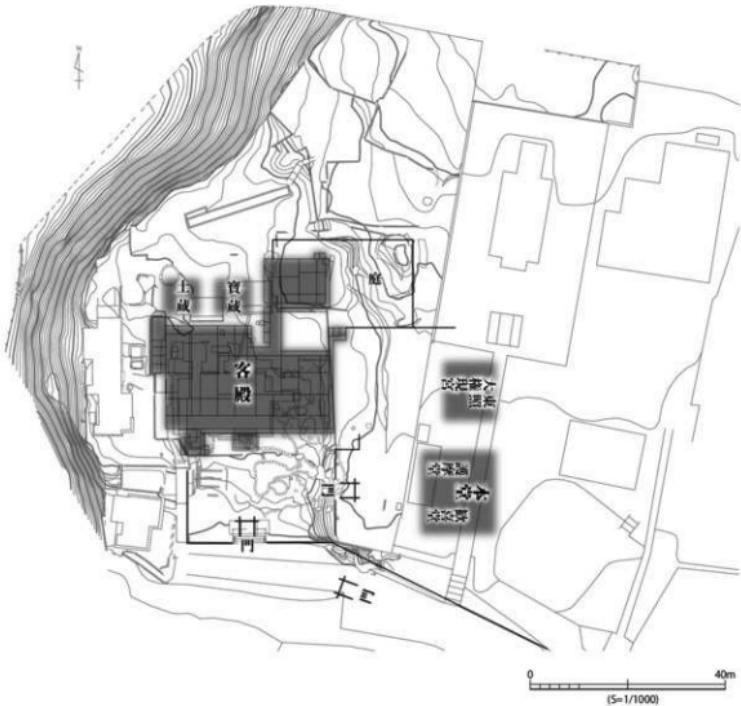
中世末の15世紀の遺物が認められたものの、その後活動が活発になり遺構・遺物が増加するわけではなく、16・17世紀前半の遺物は少ない。東泉院は遅くとも永禄元年（1558）には今泉八丁目付近に境内を構えて、江戸時代を通じて変わらなかったと考えられているが（大高2012）、残念ながらそのことを発掘調査から追跡することはできなかった。

出土遺物から見て、東泉院の活動を確実に示していると考えられるのは、17世紀後半から18世紀前半である。それまで、出土遺物がほとんど見られなかつても関わらず、この時期に入ると、特に質の高い製品が多い。堀内氏の分析にあるように、商業ルートでは入手すること

のできない景徳鎮窯の碗を入手したりと、東泉院における大名家や公家などの接應の際に宴會道具として使用したり、贈与された可能性が高い。

東泉院第九代住持圓成は、元禄4年（1691）から八年間住持を勤め、その間、江戸へ参府の際に、將軍綱吉主催の御講釈に同席し、また、別の機会には護持院の能を見物した際にも同席している。そのほかにも「金屏風三十六歌仙」を購入するなど將軍家とのつながりや東泉院の繁栄に尽力した人物と考えられる。

一方、163から165の焼塩壺は全国での出土数の四分の三が江戸遺跡、特に武家屋敷に集中しており、18世紀前半の焼塩壺は第11代住持光盛（勤榮房）の頃に入手したものと考えられる。光盛は宝永6年（1709）



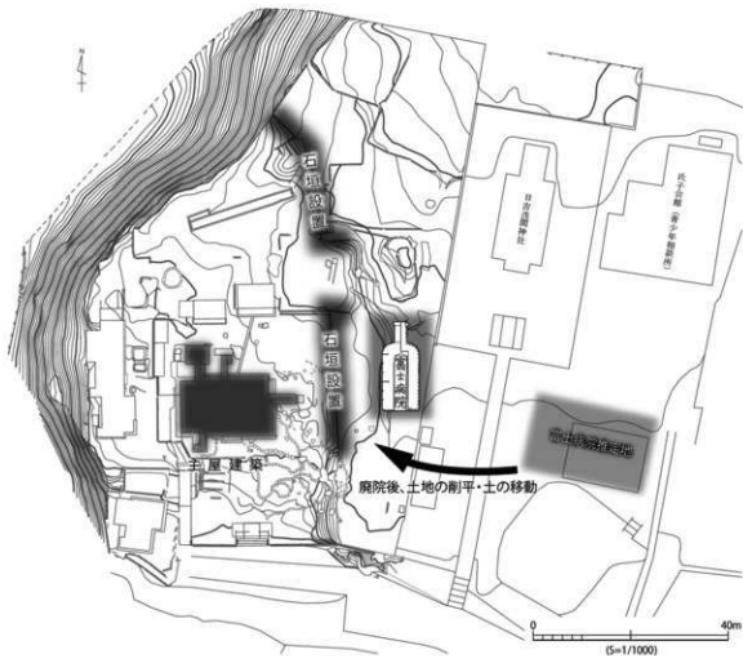
第81図 江戸時代後期（文久2年頃）の東泉院

11月に東泉院を繼承し住持50年と18世紀前半に長期間、東泉院の住持を務めたことが明らかとなっている(大高2012)。住持中の正徳元年(1711)には御室仁和寺再開院跡を兼帶、色衣免許となり、藤色紋紗の着衣を頂戴したり、元文5年(1740)から寛保元年(1741)にかけて領内で地押改(再検地)を実施したりと対内・外の宗教的・経済的活動を示す時期の住持が光盛である。

18世紀後半に入つてからはSE2において前述の17世紀後半から18世紀前半の高級品が寛政2年(1790)の火災後に廃棄・片付けされた状態で確認することができた。東泉院第14代住持淳盛(良勧房)退去後に醍醐寺報恩院末寺から高野山宝性院末寺へと変更した第15代住持隆尊(勤応房)の頃であろう。

19世紀後半では、文久3年(1863)2月18日、将

軍徳川家茂が上洛の際に東泉院を宿所とし、元治2年(1865)5月23日の再上洛の際にも宿泊している。六所家には將軍宿泊の前年、文久2年(1862)8月に「御普請役元メ米倉内殿・増田多緑郎殿」による内見分を受けた際に提出した絵図の控えが残っている。住持は第21代義雄(探道房)のころである。この「文久建物」を建てる際に、建物を建てる部分の地面を一段高くする土木工事を行つてることが発掘調査で明らかとなつた。さらに、それまでの建物配置を一新し、主屋(客殿)や門扉は、東西南北軸にあわせた配置に変更したものと考えられる。文久2年には他にも本堂(護摩堂・歡喜堂)や東照大権現(徳川家康)を祀つた神社を普請していることから、大規模な境内整備を行つたものと考えられる。東照大権現御宮の造営場所は文久絵図によれば本堂北側



第82図 近代における土地利用の変化

あたりと考えられる。しかし、当時はまだ普請中であり、本堂との位置関係ははっきりとはしない。大高氏は、日吉浅間神社鳥居東側の高台がその跡ではなかつたかと推定している（大高 2012）。この高台には、徳川家康による御手植の松が存在したという伝承も残っているよう興味深い。

明治時代

第21代葵雄は復飾し、六所良邑と改名し、六所家初代となる。現在も敷地内東側を中心として石垣が存在し、それに伴う盛土工事が行われている。盛土中から出土した医療器具のなかには、41のピンのように「富士病院」とエンボスされたものがある。それは、明治13年に建設された保全病院を前身とし、明治32年（1899）7月富士郡町村長会で建設した「組合立富士病院」を示しており、明治44年（1911）3月、建物を解体して廃院としている（松田 2011）。そのことから、前述の大土木工事はそれ以降に行われたことが想定される。現主屋は明治10年頃に建築が開始されたことが明らかな事から現主屋の東端を強く意識し、石垣を含む盛土工事が行われたことが分かる。その隣に、文久年間に庭としていた篠山付近については、石垣設置をしなかつたようで、旧地形が良好に遺存している。造営時期から、良邑氏の養子で昭和23年に亡くなった六所国四郎氏の頃の工事と考えられる。

参考・引用文献

- 大高康正 2012 「富士山東泉院と六所家旧蔵資料の概要」『六所家総合調査だより』第10号
- 菊池邦彦 2012 「富士山東泉院を訪れた人々」『六所家総合調査だより』第11号
- 佐藤祐樹 2009 「六所家埋蔵文化財発掘調査の中間報告」『六所家総合調査だより』第4号
- 佐藤祐樹 2013 「近世陶磁器からみた東泉院の活動」『六所家総合調査だより』第12号
- 建部恭宣 2009 「東泉院の棟札類と建築生産活動」『六所家総合調査だより』第4号
- 富士市教育委員会 2013 「六所家総合調査報告書 民俗」
- 松田香代子 2011 「日吉浅間神社境内にあった郡立病院」『六所家総合調査だより』第8号

第6表 出土遺物觀察表（2）

番号 品名 出所 番号	出土 場所 番号	発見 場所 番号	剖面 番号	Gr/Tr 遺構名	層位	時代	推定產地	器種	胎質	装飾・特徴
70 298 356 第34回 PL. 15	24Tr	一括	19世紀中ヨーロッパ		磁器	イギリスかオランダを通じての輸入品				
71 294 353 354 第34回 PL. 15	23Tr	一括	19世紀後肥前		磁器	金緑ぎの花唐 朱書きで「和東」				
72 211 346 第34回 PL. 15	23Tr	表土	18世紀後～19世紀前		磁器	染付（若松） やや腰の張る碗				
73 223 356 357 第34回 PL. 15	24Tr	一括	18世紀後～19世紀前		磁器	染付（菊文） やや腰の張る碗				
74 213 354 第34回 PL. 15	23Tr	一括	18世紀後～19世紀前		陶器	染付（竹） やや腰の張る碗				
75 210 346 第34回 PL. 15	23Tr	表土	19世紀中瀬戸・美濃		磁器	厚口の碗 染付				
76 208 353 第34回 PL. 16	23Tr	一括	19世紀前～中瀬戸・美濃		陶器	染付（扇） 碗反形 めし茶碗				
77 228 356 第34回 PL. 16	24Tr	一括	18世紀後～19世紀中		磁器	扁平な球形を呈する合子				
78 229 356 第34回 PL. 16	24Tr	一括	18世紀後～19世紀前		磁器	染付（淡墨草花）				
79 214 353 第34回 PL. 16	23Tr	一括	19世紀中瀬戸・美濃		磁器	型打ち成形横切り方形青磁皿 見込みに開割（菊） 被熱				
80 230 356 第34回 PL. 16	24Tr	一括	18世紀後～19世紀前		陶器	染付（桜） 広東碗				
81 212 349 第34回 PL. 16	23Tr	一括	18世紀中肥前		陶器	鉄線 京焼風陶器				
82 225 356 第34回 PL. 15	24Tr	一括	18世紀後～19世紀前		磁器	染付（蛇） 目白台				
83 215 354 第34回 PL. 16	23Tr	一括	19世紀中肥前	■	磁器	蛇ノ目四形高台 輪花 見込みに環状文、被熱				
84 224 356 第34回 PL. 16	24Tr	一括	18世紀後～19世紀前	肥前	陶器	染付（桜） 広東碗				
85 209 353 第34回 PL. 16	23Tr	一括	18世紀後～19世紀前		陶器	染付（松） 広東碗				
86 226 356 第34回 PL. 16	24Tr	一括	18世紀中～後肥前		磁器	染付				
87 234 356 第34回 PL. 16	24Tr	一括	19世紀後肥前		陶器	見込みに角の開割 「大日本□□□」				
88 297 356 第34回 PL. 16	24Tr	一括	19世紀中肥前		磁器	青磁染付 八角鉢 植口窓				
89 295 356 第35回 PL. 16	24Tr	一括	18世紀前関西方面燒壺直蓋		土器	蓋掛けが低い				
90 251 340 第35回 PL. 16	22Tr	一括	江戸時代在地		土器	底部の平ら				
91 233 356 第35回 PL. 16	24Tr	一括	18世紀後～19世紀前瀬戸・美濃	鉢	陶器	半周繩 繩目鉢				
92 227 356 第35回 PL. 16	24Tr	一括	19世紀前～中肥前		磁器	志は堂 高台径 15cm 被熱				
93 219 353 第35回 PL. 16	23Tr	一括	19世紀中瀬戸・美濃	鉢	陶器	鉄輪菊花文				
94 232 356 第35回 PL. 16	24Tr	一括	18世紀後～瀬戸・美濃	鉢	陶器	鉄輪				
95 221 353 第35回 PL. 16	23Tr	一括	19世紀中～後瀬戸・美濃	片口鉢	陶器	灰釉				
96 231 356 第35回 PL. 16	24Tr	一括	19世紀前～中瀬戸・美濃	鉢	陶器	灰釉				
97 296 356 第35回 PL. 16	24Tr	一括	19世紀後肥前	徒利	陶器	灰釉				
98 220 354 第35回 PL. 16	23Tr	一括	19世紀前～中瀬戸・美濃	徒利	陶器	灰釉 尺胴形で頸部が短い 五合徒利				
99 222 347 第35回 PL. 17	23Tr	一括	18世紀前瀬戸・美濃	ナリ鉢	陶器	灰釉				
100 218 346 第35回 PL. 17	23Tr	表土	19世紀前～中瀬戸・美濃	鉢	陶器	鐵輪 ようそく				
101 216 347 第35回 PL. 17	23Tr	一括	19世紀中瀬戸・美濃	燈明皿	陶器	灰釉 芝立部分のスリット残存せず				
102 217 346 第35回 PL. 17	23Tr	表土	19世紀前～中瀬戸・美濃	燈明皿	陶器	灰釉				
103 520 339 第35回 PL. 17	西側裏面	表振		鉢	金属					
104 207 346 第35回 PL. 17	23Tr	表土	17世紀中以前高島		石	磨り面磨印				
105 401 345 第36回 PL. 17	22Tr	表土			瓦	剪斗瓦				
106 447 352 第36回	23Tr	一括			瓦	剪斗瓦				
107 411 352 第36回	23Tr	一括			瓦	伏閑瓦				
108 402 345 第36回 PL. 17	22Tr	表土			瓦	伏閑瓦				
109 404 348 第36回	23Tr	表土			瓦	平瓦				
110 408 352 第36回	23Tr	一括			瓦	横瓦				
111 410 352 第36回	23Tr	一括			瓦	横瓦				
112 409 352 第36回	23Tr	一括			瓦	横瓦				
113 403 348 第36回	23Tr	表土			瓦	横瓦				
114 407 352 第36回	23Tr	一括			瓦	横瓦				
115 405 348 第36回	23Tr	表土			瓦	横瓦				
116 406 352 第36回	23Tr	一括			瓦	横瓦				
117 448 352 第36回	23Tr	一括			瓦	横瓦				
118 50 40 第45回 PL. 17	SE2	一括	18世紀後肥前		磁器	青磁染付 被熱				
119 69 39 第45回 PL. 17	SE2	3層	18世紀後肥前		磁器	青磁染付				
120 52 41 第45回 PL. 17	SE2	一括	17世紀後景徳鎮		磁器	青花				
121 53 41 第45回 PL. 17	SE2	一括	18世紀京都	鉢？	陶器	誘絵				
122 259 35 第45回 PL. 17	SE2	一括	18世紀前肥前		陶器	刷毛目				

第9表 出土遺物観察表(5)

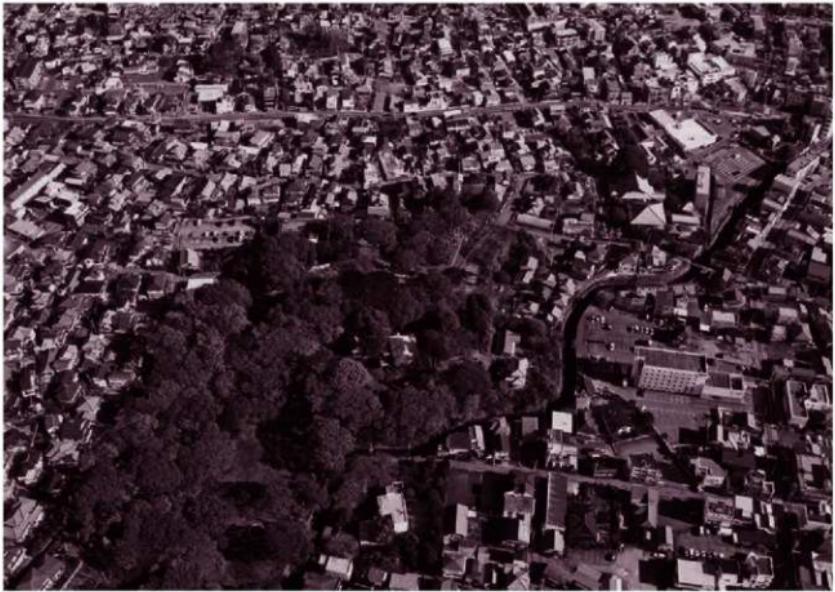
報告書 番号	提出 年	取上 番号	検出 番号	検出 場所	Gr/Tr	遺物名	層位	時代	測定産地	種類	性質	装飾・特徴
242	241	374	第70回	PL. 23	25Tr	SX7 大レキ下	19世紀前～中	肥前	陶器	染付		
243	242	383	第70回	PL. 23	25Tr	SX7 大レキ下	1780～1800年	肥前	磁器	染付 展文		
244	238	484	第70回	PL. 23	25Tr	SX7 大レキ下	19世紀前～中	肥前	磁器	染付		
245	240	382	第70回	PL. 23	25Tr	SX7 大レキ下			横	石	側面劃「大富」「神田」	
246	501	400	第70回	PL. 24	25Tr 北	SX7 大レキ下			鉄板	金属性		
247	502	404	第70回	PL. 24	25Tr 北	SX7 黒色土上塗			釘	金属		
248	503	456	第70回	PL. 24	25Tr	SX7 大レキ下			釘	金属		
249	514	468	第70回	PL. 24	25Tr	SX7 大レキ下			鉄	金属		
250	512	462	第70回	PL. 24	25Tr	SX7 大レキ下			鉄	金属		
251	511	461	第70回	PL. 24	25Tr	SX7 大レキ下			鉄	金属		
252	152	131	第70回	PL. 23		宝鏡	明治	幕戸・美濃	蓋物	磁器	染付	
253	243	408	第70回	PL. 23	25Tr	黒色土上塗	1820年以降	瀬戸・美濃	横	磁器	染付 見込み「萬」	
254	301	358	第70回	PL. 23	26Tr	一括	19世紀後半	肥前	磁器	染付		
255	249	361	第70回	PL. 23	26Tr	鮑土化粧土	1820年～幕末	瀬戸・美濃	横	磁器	染付	
256	245	433 434	第70回	PL. 23	25Tr	一括	1830年代以降	幕戸・美濃	横	磁器	染付	
257	246	427	第70回	PL. 23	25Tr	黒色土上塗	1830年代以降	瀬戸・美濃	横	磁器	染付	
258	244	405	第70回	PL. 23	25Tr	黒色土上塗	19世纪以降	肥前	蓋物	磁器	染付 「大明年製」	
259	247	437	第70回	PL. 23	25Tr	黒色土上塗	17世纪末～	肥前	横	陶器	京焼風陶器	
							18世紀前					
260	318	489	第70回	PL. 23	25Tr	一括	平安		坪	土器		
261	314	357	第70回	PL. 23	表採				横	陶器	灰釉	
262	250	429	第70回	PL. 24	30Tr	一括	19世紀	京都・信楽	土瓶	陶器	灰釉	
263	315	490	第70回	PL. 23	25Tr 南	黒色土中	16世紀後	瀬戸・美濃	擂鉢	陶器	大窓	
264	317	357	第70回	PL. 23	表採		15世纪後～	肥前	横	陶器	青磁深付	
							16世紀前					
265	153	338	第70回	PL. 23	13Tr	一括			常滑	甕	陶器	
266	316	425	第70回	PL. 24	30Tr	一括	不明			陶器		
267	246	441	第70回	PL. 23	25Tr	鮑土(通風)	17世紀	瀬戸・美濃	寸リ钵	陶器		
268	313	442	第70回	PL. 24	30Tr	一括	15世紀	瀬戸・美濃 即日付大皿	陶器			
269	252	339	第70回	PL. 23	表採		18世紀	江戸 七輪風炉	土器			
270	420	9	第70回	PL. 24	12Tr	一括			瓦	軒平瓦		
271	419	9	第70回	PL. 24	12Tr	一括			瓦			
272	319	488	第70回	PL. 24	30Tr 西	一括	弥生		土器			
273	504	410	第71回	PL. 24	土壤床下	床下			鉄	金属		
274	513	395	第71回	PL. 24	25Tr 北	大レキ地中			鉄釘	金属		
275	518	397	第71回	PL. 24	27Tr	一括			鉄釘	金属		
276	516	369	第71回	PL. 24	25Tr 北	一括			鉄	金属		
277	508	423	第71回	PL. 24	27Tr	黒色土上塗			鉄釘	金属		
278	517	359	第71回	PL. 24	25Tr 東	一括			鉄	金属		
279	505	422	第71回	PL. 24	25Tr 東	土壤下			鉄釘	金属		
280	515	369	第71回	PL. 24	25Tr 北	一括			鉄釘	金属		
281	510	399	第71回	PL. 24	25Tr 東	外区			鉄	金属		
282	507	439	第71回	PL. 24	25Tr 東	黒色土上塗			鉄釘	金属		
283	509	451	第71回	PL. 24	29Tr	大レキ磨下			鉄釘	金属		
284	506	436	第71回	PL. 24	25Tr 西	黒色土上塗			鉄釘	金属		
285	519	397	第71回	PL. 24	27Tr	一括			鉄釘	金属		

写真図版
PLATE



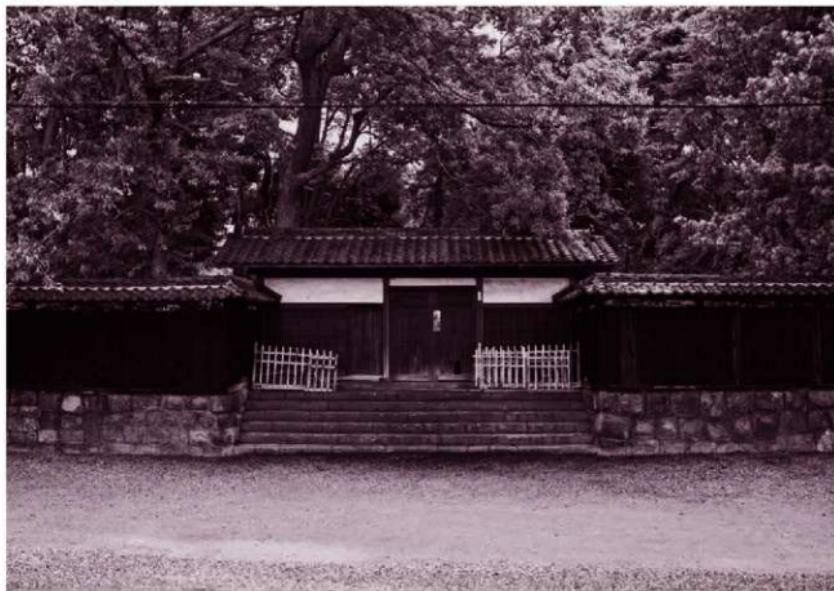


1. 調査地遠景（南から）

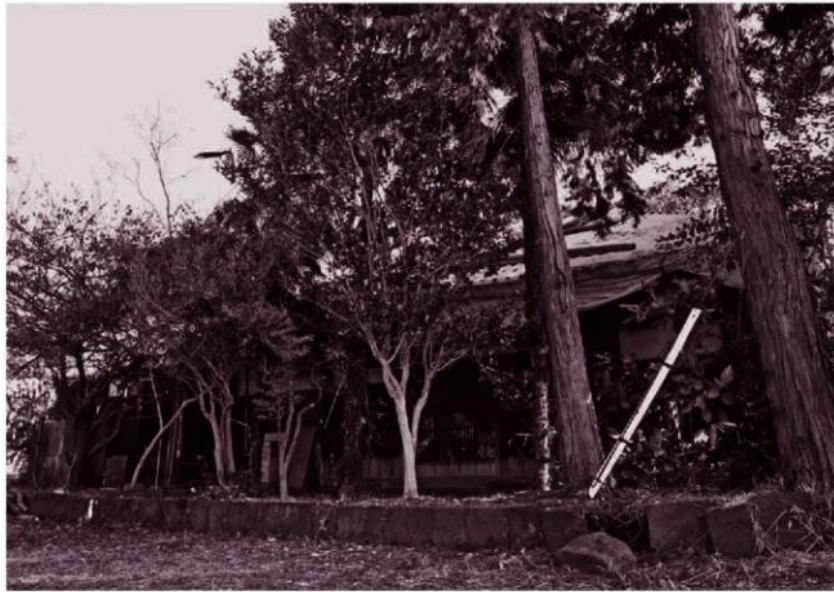


2. 調査地（西から）

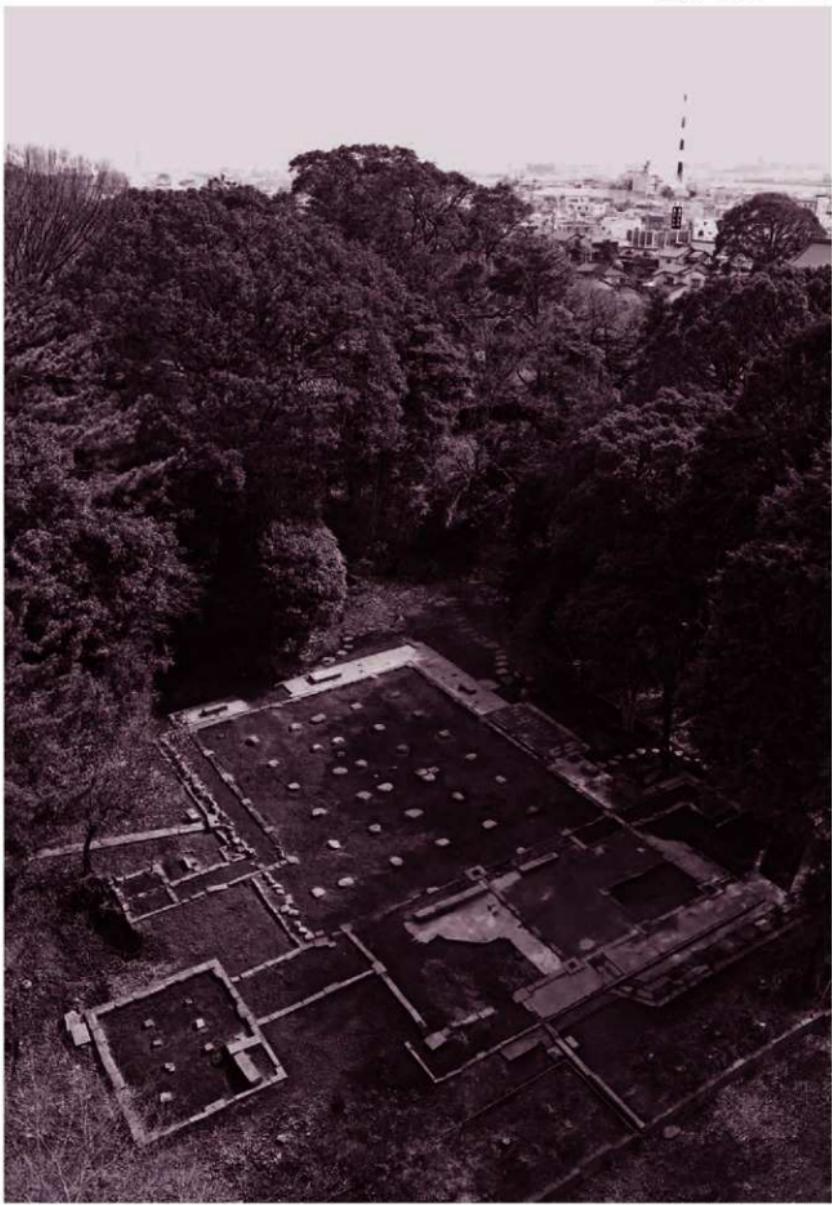
PL.2 主屋ブロック



1. 現存する六所家門扉（南から）



2. 解体撤去前の主屋（南西から）



1. 現主屋解体後の基礎（北西から）

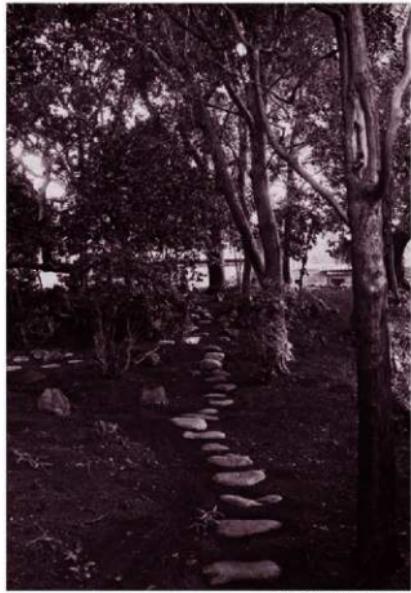
PL.4 主屋ブロック



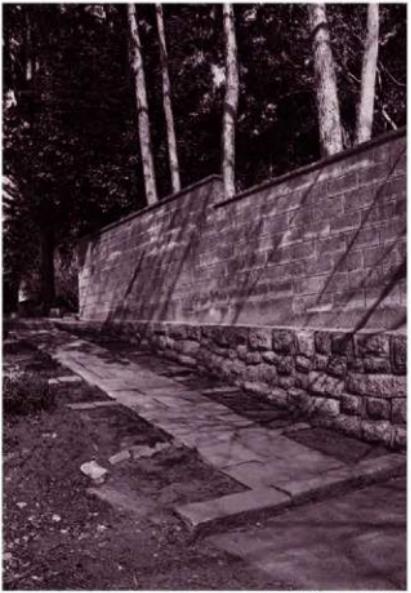
1. 現主屋礎石（北西から）



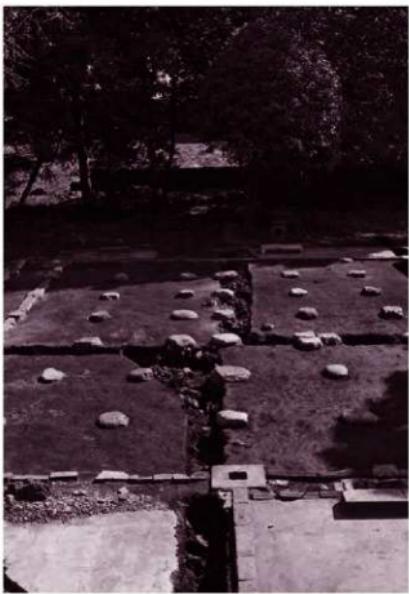
2. 現主屋礎石（南東から）



3. 主庭飛石（西から）



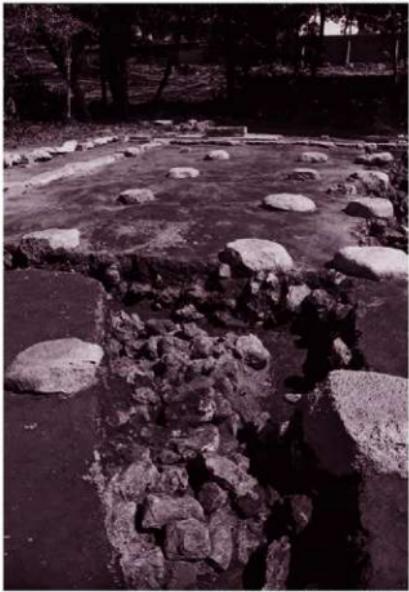
4. 敷石通路（南西から）



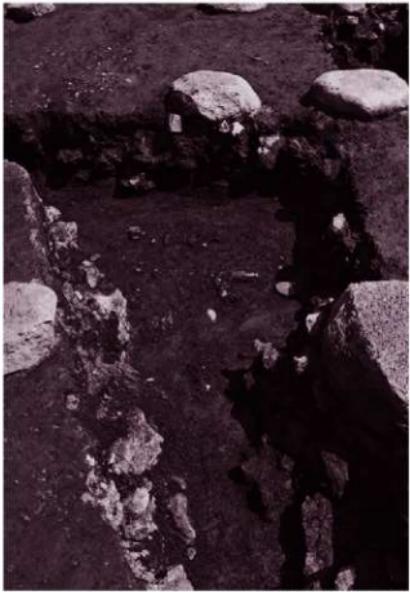
1. 25Tr 碓層検出状況（西から）



2. 29Tr 碓層検出状況（南東から）



3. SX7 上部の碓層（西から）



4. SX7 遺物出土状況（西から）

PL.6 東ブロック



1. D5 調査区調査前（南から）



2. DS 調査区調査前（北西から）



3. SX3 (築山)（南西から）



4. IG5（西から）



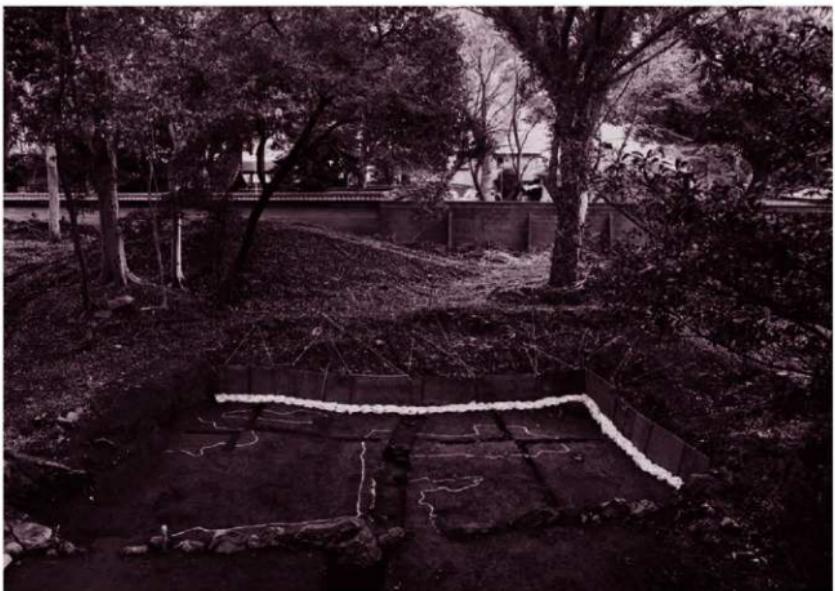
5. 3Tr 板石棟出及び土層堆積（南東から）



6. 3Tr 板石棟出状況（南東から）



7. SX5 板石北側断ち割り（東から）



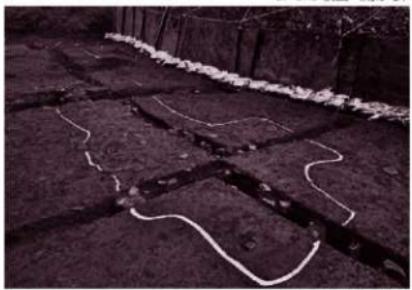
1. DS 調査区 SXS (西から)



2. DS 調査区 SXS (南から)

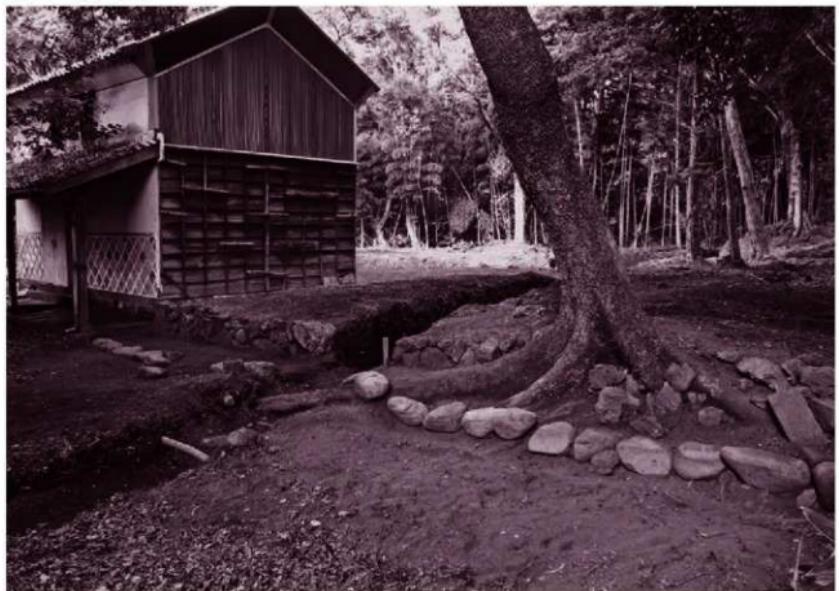


3. SXS 検出 (南から)



4. SXS 検出 (南西から)

PL.8 東ブロック



1. SX1 (南東から)



2. SX1 18Tr (西から)



3. SX1 19Tr (南から)



4. SX1 20Tr (西から)



5. 宝蔵北壁 14Tr (北東から)



1. 北ブロック調査前（東から）



2. 4Tr (北西から)



3. 4Tr SX6 石積み（北西から）



4. SX6 (南東から)

PL.10 北ブロック



1. SX6 (北から)



2. SX6 14Tr 南北セクション (西から)



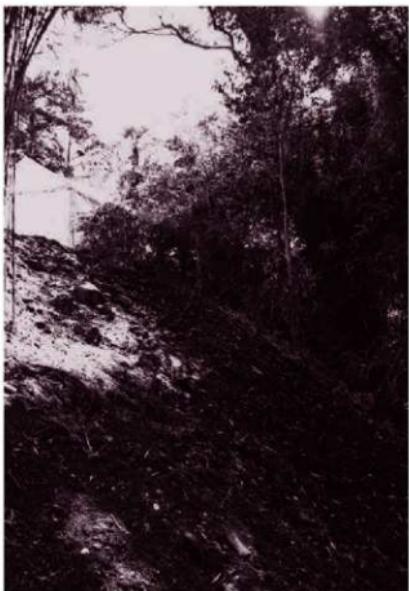
3. SD3・SE2・SX2 (南東から)



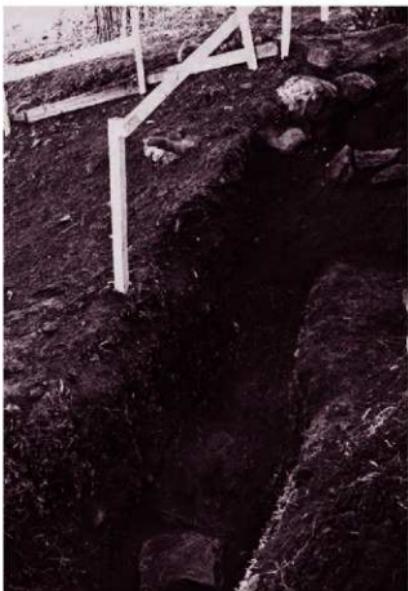
4. 北ブロック調査区南側粘土棟出状況 (北から)



5. 北ブロック調査区全景 (南東から)



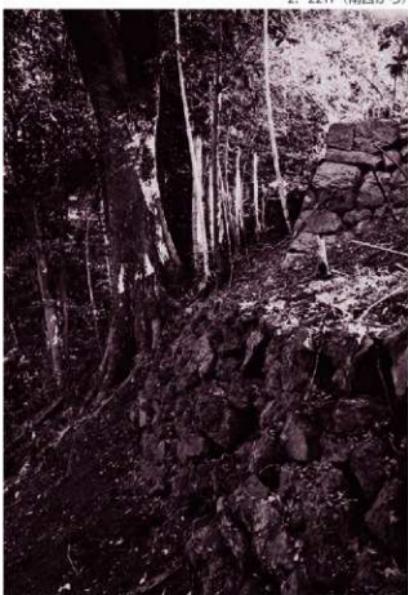
1. 22Tr 調査前 (北西から)



2. 22Tr (南西から)



3. 23Tr (北西から)



4. IG6 (奥) + IG7 (前) (西から)

PL.12 北東ブロック



1. 北東ブロック調査前（北西から）



2. IG3（北西から）



3. SX3（北から）



4. IG4 南側石段（北西から）



5. SD1（東から）



6. 北東ブロック調査区西壁セクション（東から）



7. SD2（南から）

北東ブロック SD1 出土遺物



北東ブロック壇①出土遺物



北東ブロック壇①出土遺物



北東ブロック出土遺物



東ブロック SX1 出土遺物



東ブロック 3Tr 出土遺物

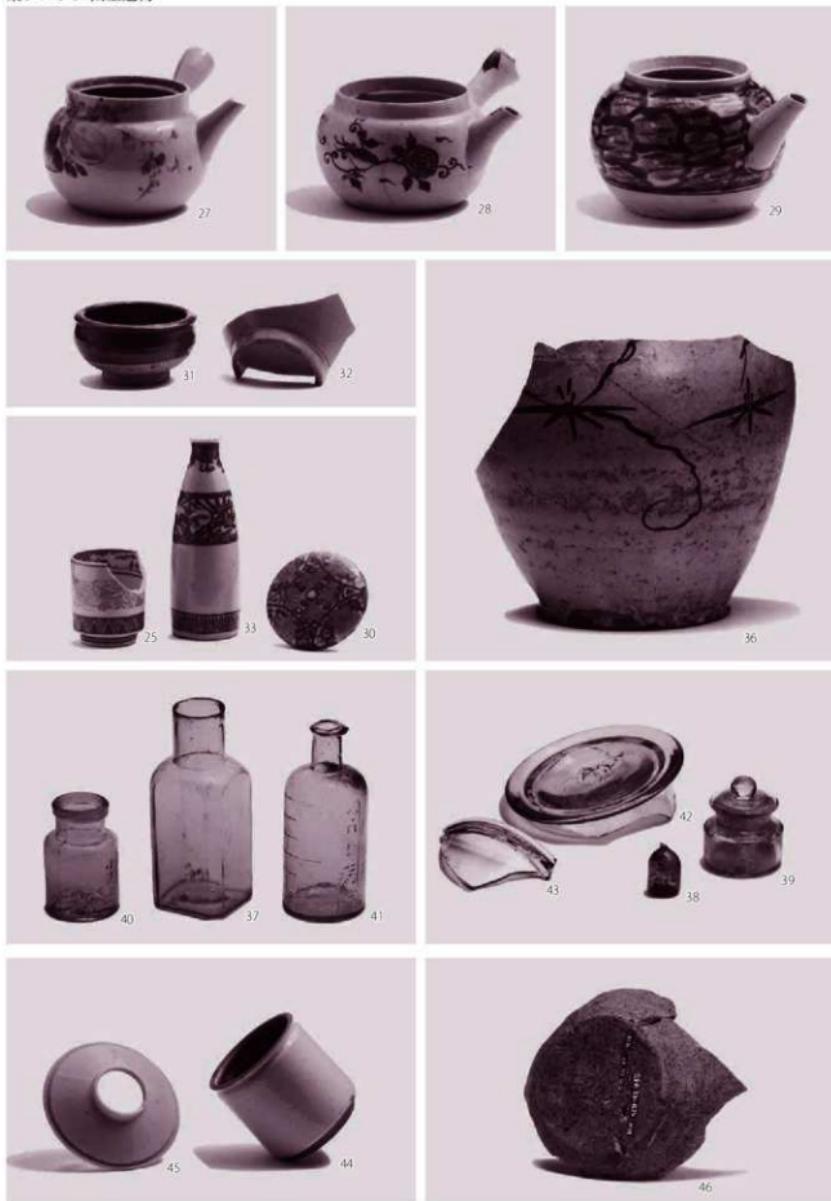


東ブロック出土遺物



PL.14 出土遺物

東ブロック 出土遺物



東プロック SX1 出土遺物



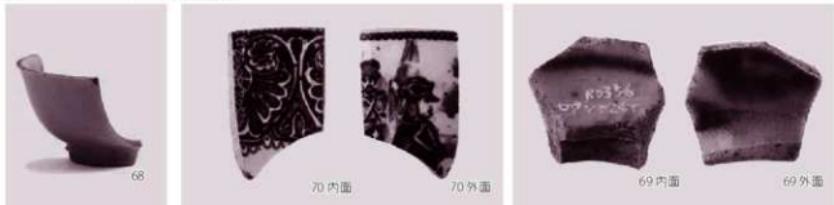
東プロック SX5 出土遺物



東プロック出土遺物

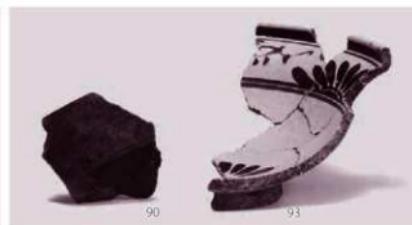


西プロック 23Tr・24Tr 出土遺物

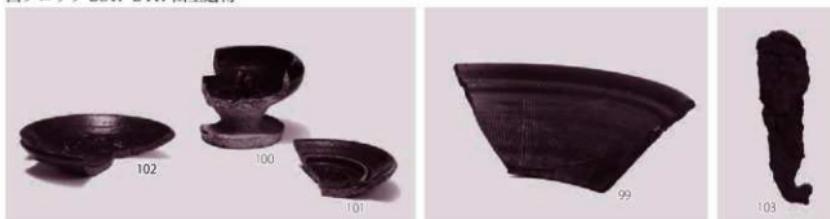


PL.16 出土遺物

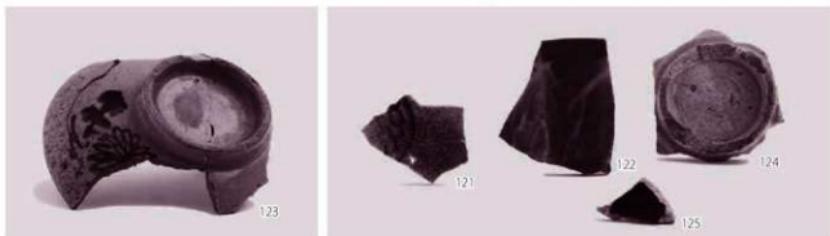
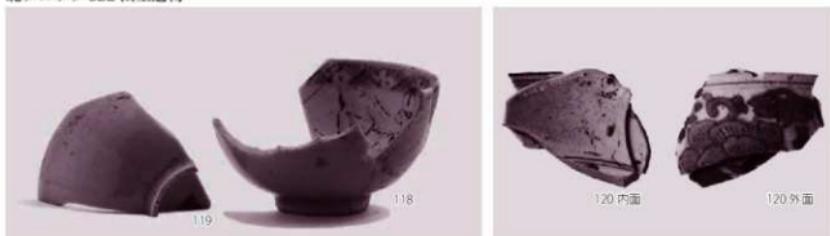
西ブロック 23Tr・24Tr 出土遺物



西ブロック 23Tr・24Tr 出土遺物

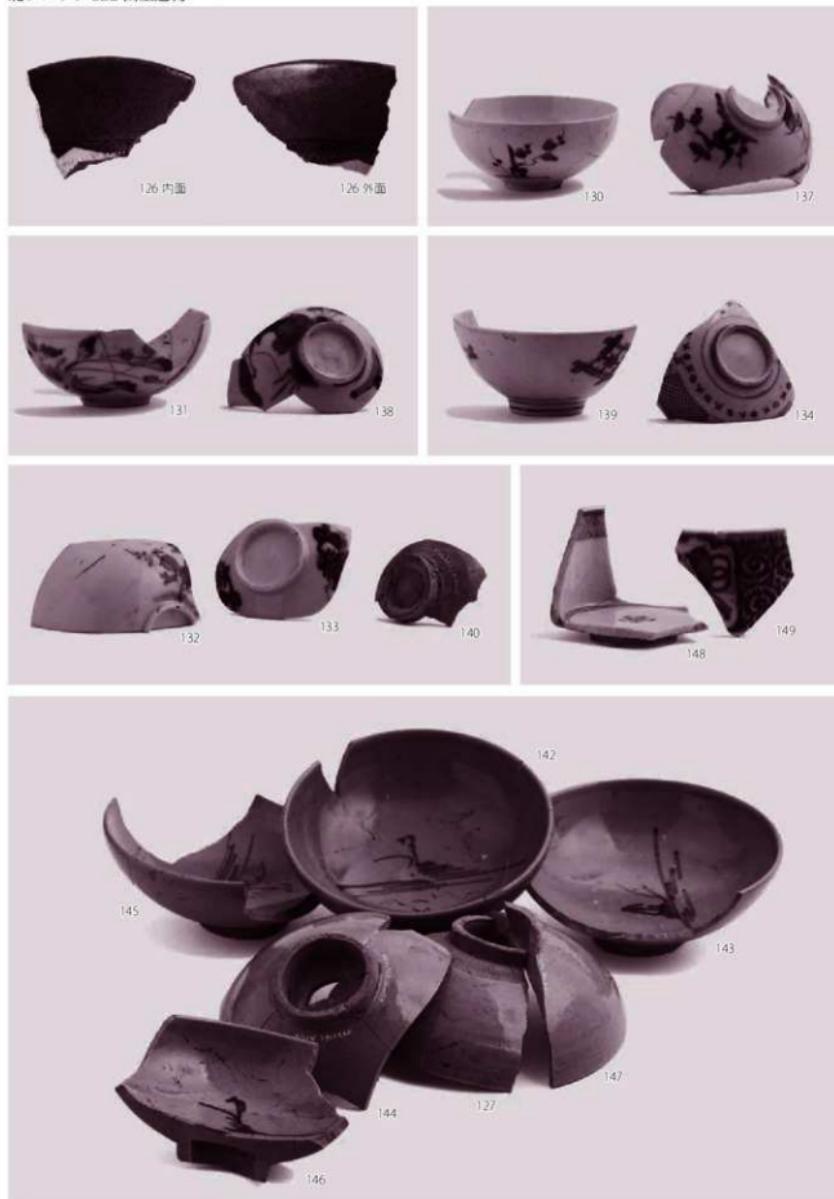


北ブロック SE2 出土遺物



PL.18 出土遺物

北ブロック SE2 出土遺物



北プロック SE2 出土遺物

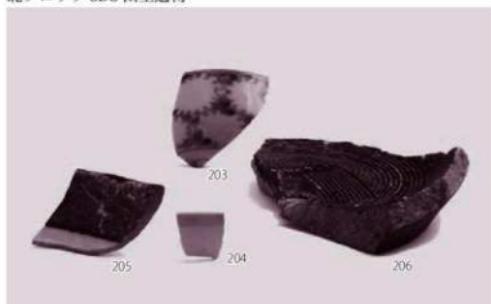


PL.20 出土遺物

北ブロック SE2 出土遺物



北プロック SD3 出土遺物



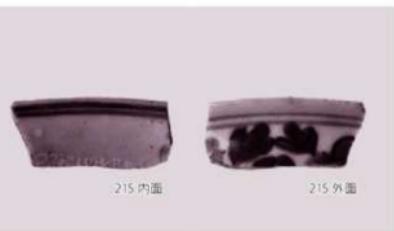
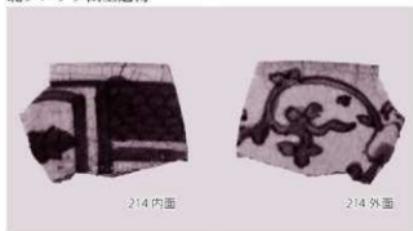
北プロック SK3 出土遺物



北プロック SX2 出土遺物

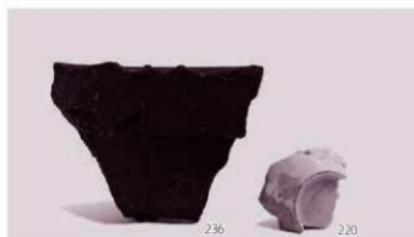
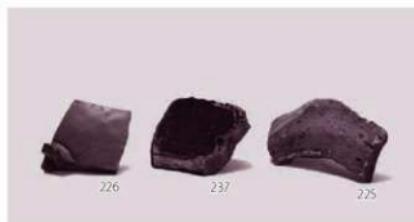
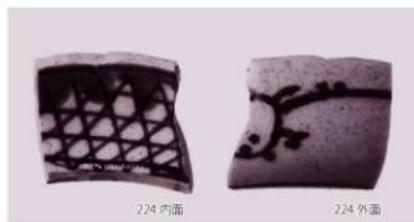
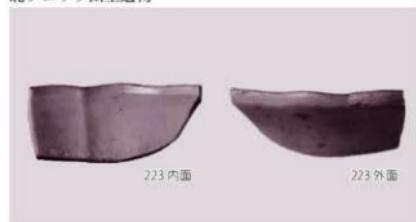


北プロック出土遺物



PL.22 出土遺物

北ブロック出土遺物



主屋ブロック SX7 出土遺物



主屋ブロック SK5 出土遺物



主屋ブロック SX7 出土遺物



主屋ブロック 宝藏出土遺物



主屋ブロック出土遺物



主屋ブロック出土遺物

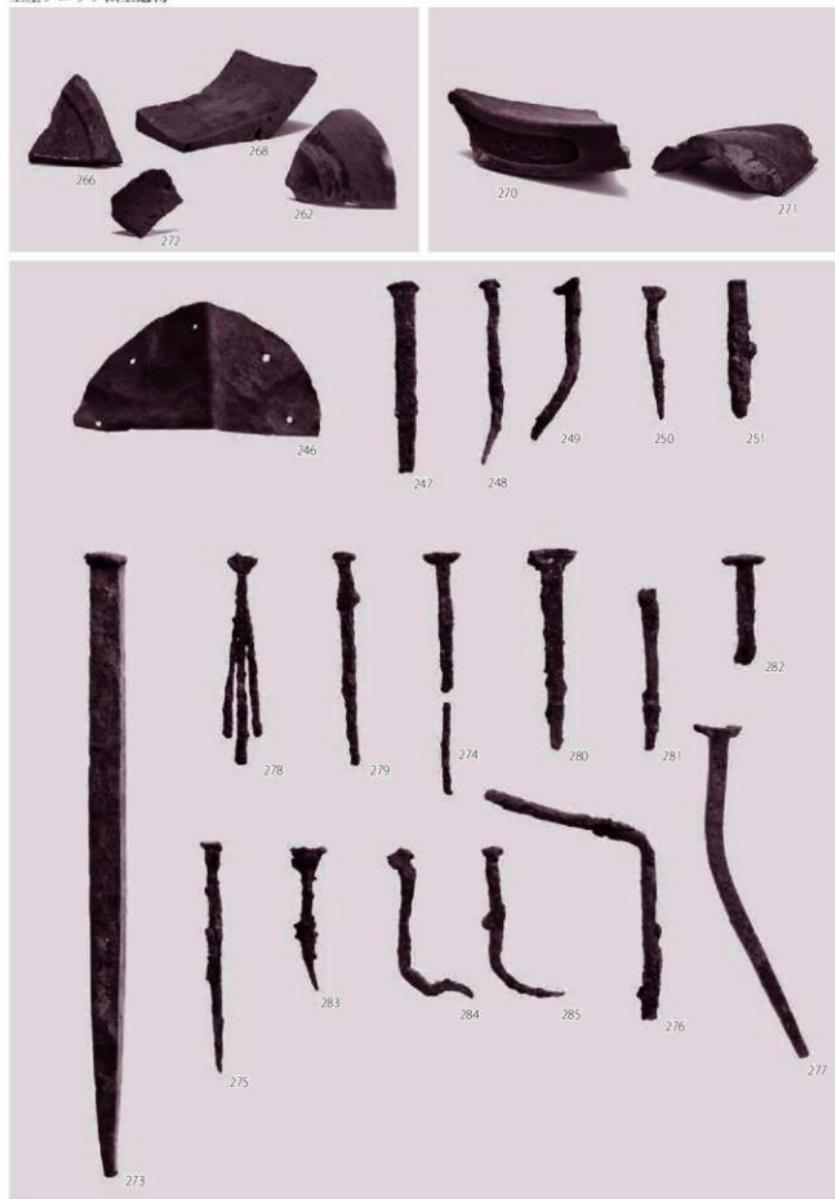


主屋ブロック出土遺物



PL.24 出土遺物

主屋ブロック出土遺物



六所家総合調査報告書 既刊と今後の刊行予定

民 俗	平成 25 年 3 月刊行
古 文 書 ①	平成 26 年 3 月刊行
埋 藏 文 化 財	平成 26 年 3 月刊行
建 造 物 ・ 庭 園	平成 26 年 3 月刊行
聖 教	平成 27 年 3 月刊行予定
美 術 ・ 書 画	平成 27 年 3 月刊行予定
古 文 書 ②	平成 28 年 3 月刊行予定
古 文 書 ③	平成 29 年 3 月刊行予定
東 泉 院 の 歴 史	平成 30 年 3 月刊行予定

六所家総合調査報告書 埋藏文化財

発 行 日 平成 26 年 3 月 31 日

編集・発行 富士市教育委員会
〒 417-8601
静岡県富士市永田町一丁目 100 番地
電話 0545-55-2875

印 刷 文光堂印刷株式会社
(富士市行政資料登録番号 25-52)